女鑑

明治三十一年十二月二十日發兌

第百七十一號

東京國光社

女鑑第百七拾壹號

目録

伊藤ゆき女



自信と自負心

自信はなかるべからず。自負心はあるべからず。古來自信と自負心とを同一の心とし、自信をも自負心にかたより思ふが多く、之をもまた惡しう思ふ。これ大にひがみたる事なり。自信は自らをたのむ心にして、自負心は自らを、滿てり、足れり、充分なりと、何事も滿足せるこゝろなり。少しく位あり、富あれば、はや己を高尚富貴のものとして、あだかも烏の高き枝に留まりたる如く、人を眼下に見下し、奴婢とやしなひ、或はあまりたるもの少許を人にとらすれば、こよなき仁惠として、あだかも天帝になれるが如く心得。少しく小學の道をかじり、大學の門に入れば、はや學問の大小を兼ねたるものとし。一を聞きて一を知る並々の才を、なみ／＼ならぬ才とし、何事も己をいみじがり、己を貴び、己を賢しとす。あだかも一舛の袋に小

豆の充てる如く、小さき瓶に水を盛れる如く、氣内にみてれば、人の言、人の戒、ゆいるゝ隙なく、父母の敎、兄姉が說諭、はては友の諫も、舅姑がいましめも、耳にも心にも入らず、一舛の袋、遂に一舛のみにて、又增す所もなし。甚しきは、容顏の少しく美しきをほこり、牡丹、百合、芍藥、百草、万花、如何に露をてらすとも、如何でわが一片の笑みにまさらむやとて、自ら黃金にも玉にもまさる寶とし、はては此の容顏、此の盛色、又何を修めんやとて、人の人たる道をも問はず。其の他、學はなきも、われには此の藝あり、之は惡るけれど、此の能き事ありと、惡しき所は捨てゝ、少しの能き所をとりて心をみだし、自ら足れりとし、終に身を誤るに足る。歎ぜざるべけんや。

自信は之と均しきものならず、たゞ己が心を賴むなり。人の性もと善なり。我も人、善、如何で行はれざるべき。玉石磨きて後に知る、我もみがゝば玉の光万一ゝはざらん事もやと、まづ琢磨をてらす。聖人も人、賢人も人、我も人、聖人のみ天に禀

はぬことやはある。はては文王が妻、孟子が母、楠公が母、山内一豊の妻、よきを持ち、夫を助け、子を儲け、はぐくめぬ事やはと、己が性をたのむを自信とはふなり。自信とは此の如き心にて、已は愚なり、學びしとて人なみにはならず、人は天につぐものなり。我には如何でさやうの行なし得らるべき。我は世の婦人り、如何で男など輔け得られむなどとて、かしこき人の言行を聞くも、鑑とも見ね、到底行はれぬものとする、これ自暴自棄の甚しきものなり。猫はこぞりて鼠をふ、犬は皆よく家を守る、鶏はみなよく時をつくる、鯉は皆よく瀧に昇る、鳥獸魚みなよく其の性はなし得るものなり、人の性を持ちたらんもの、人の事業の行れぬ事やあるべき。行はざるは、自信のうすければなり。かく自信は人として肝のものなり。世の姫達、ゆめ之を自慢と同じものになし給ひそ。





日本古代の女子道徳（承前）

白松園主人

日本紀、垂仁天皇四年の條に、

四年秋九月、丙戌朔戊申。皇后母兄、狹穗彦王、謀反、欲危社稷、因伺皇后之燕居、而語之曰、汝孰愛兄與夫。於是、皇后不知所問之意趣、輙對曰、愛兄也。則誂皇后曰、夫以色事人、色衰寵緩。今天下多佳人、各遞進求寵、豈永得恃色。是以吾登鴻祚、必與汝照臨天下。則高枕、而永終百年。亦不快乎。願、為我弑天皇。仍取匕首、授皇后曰、是匕首佩于裀中、當天皇寝、廼刺頸、而弑云々

古事記にも、

此天皇、沙本毘賣を、后と為給へる時に、沙本毘賣命の兄、沙本毘古王、其伊呂妹に、夫と兄とは、孰か愛きと、問へむ、兄ぞ愛きと、答給ひき。

て、即八鹽折の紐小力を作りて、其妹に授て、此小力以て、天皇の寢坐らむを、刺殺しまつれといふ。

嗚呼、之の后の一擧は、忽ち天下の大事を、惹起せんとせしなり。婦道の大事も、亦ここに至りて、極りぬ。後世の王朝時代は、更にも云はず、武家時代に至りて、節義を重んぜし武人の妻女も、かゝる局に當りては、多くは惑ひぬ。

又、日本紀に、

皇后於是、心裏兢戰、不知所如、然視兄王志、便不可得諫、故受其匕首、獨無所藏、以著衣中、(遂有諫兄之情歟)

諷して、兄王を諫め給はんの御心ありしかといへり。げに、さる心れはしますによりてこそ、天皇にも告け給はざりけれ。其の遂にあらはるゝに及び、御身を殺して、婦道を全うし給ひぬる御心こそ、いとほしけれ。無上の至尊に配して、天下の母とれはしますれど、御親、婦道の鑑を、衆庶に示させ給へるにこそ。此の御事蹟と共に、仰ぎ鑒みまつるべきことあり。そは弘文天皇の、大海人皇子(後の天武天皇)と、爭ひ給ひけるとき、弘文天皇の御妃は、大海人皇子の御女なりしかど、御父を失はれんことを恐れて、密に近江方(弘文天皇の、近江に都し給へるによりて、近江方といふ)の、機密をぞ、悉く

れしと承れば、いと風流やかに、數寄をつくし給ふらん。御庭の趣など、嘸ゆかしう侍らんと察し奉り、さくまゐりて靜ごと申述べまほしう侍れど、あやにくにあしわけ小舟のさわり侍れば、いと無禮なれど、拙なき筆もて、御よろこび申上ぐるになん。さて此花瓶一對、いと粗末には侍れど、御祝のしるしにと、送りまゐらするを、うけ給ひてよ、何れ近き内さぶらひて、萬聞は上ぐべくこそ、あなかしこ。

佐藤喜代子

あはれ此さわかしきちまたをいとひ給ひて、いと物しづかなる向島に、こたび伯母君の御望みにて、御新築遊さるゝとかや、こはいと／＼御身の上にもよろしき空氣のかよひて、幸あるのみならず、殊にちごたちの御學問にも、いか計りよろしからん、夫に伯母君の御意によりて、御室内は申すもさらなり、み庭のおもには、いとひろやかなる池に、ふん水を設け、そのかたはらには東屋をも設け、終ひぬとかや。さぞさぞ目出度う千代のよはひのつるかめもやがてはなち終ふ御事と、今よりこよなくうれしうてなん、あなかしこ。

藪内津義子

此程より、つくりみかゝせ給ひし、御普請、思ひしよりも早う成りて、いよ／＼明後日は、御わたましのよしにて、數ならぬ、私供までも、御招き下され、うれしう存じ上げ候、承れば、こたびの御すまひは、四季のながめもすくれさせ給ひ、なかにも遠隈の月、遠山のけしき、一方ならず、こゝには空氣の流通もよろしきおもむき、御家は、これよりいや榮ゆに榮ゆ賜ふならむと、祝ひ上げ候、御當日には、さぞ／＼おごそかなる儀式もあり、且つは花子樣の琴のしらべ、飾り物など、くさ／＼とり行はるゝ由、かならずまかり出て御祝詞申し述べたく、先は、拙き筆もて、御祝かた／＼御招きのかへりごとまで、あら／＼申述ぶるになむ、あなかしこ。

戸塚鐵子

木からしの風に、庭のもみぢは、行く／＼なりなりぬる折から御細書うれしかや、めでたういはひ壽き上げ候、明日はその御祝宴にて午後より來よとの仰せ、有りがたく、不風流なる私故、御席につらなるはいとはづかしく存じ候へども、いかばかりかの黃金を以てなせる御造作のめでたさを、拜見も致し度、御居宅は御高燥の御地といひ、御庭もいとひろやかの由なれば御見はらしもさぞかしよろしからん、丁度明日は舊曆の十五日とか、秋に入りて上總殿出る月の、御池の水の面照り渡り候ひなば、此世の外のけしきからましと、ゆかしう萬事を打すて參上仕るべく候、なほ申上げたき事の數々は拙筆に盡しがたく、よろづは拜顏のふしと、あら／＼申殘し候、まつは取あへず御祝ひまでに、めでたくかしこ。

目黒佐喜子

其後はいと遠々しく打過ぎ侍りしが、いつも恙なう渡らせ給ふなん喜び參る。扨去ぬる年購ひ給ひしと聞く某の地に、先つ頃より新たに御居をしつらはせ給ひつるが、こたび成りて、いよ／＼引移らせ給ふとか、さも／＼目出度く、幾久しう壽き參らするになん。未だ見參らせねど、聞は海に向ひて、遙かに富士の峰を眺め、後は遠く山を望み、近くは廣き田の面を見渡し、かつ水清く市に近きなど、所すでに得難きにあるに、の君の御好のみやびなる、萬づ質素を旨として、趣深く造らせ給ひ、殊に御庭のたゞずまひなど、世の常ならず、別きて御茶室は、みこゝろを盡されし跡見ゆて、愛でたし共愛でたしと、見し人の只管取りはやすに、まだ見ぬ先きより其景色の推し計られ、まことに千歳の齡を延へ給ふべき御すみかならんと、只とく見ま欲しければ、來む月の朔日頃訪らひ申さむに、見せ給ひてよ。

河原芳子

うけたまはり侍れば、おもとには、こたびあらたしく家造りして、近き吉日に、御ひきこしなさるゝよし、げに目出たきかぎりなりや。あゝその新室や、下津葛根の。ゆるぶことなく、朽つることなく、常盤堅磐にさきはひ、椽の木のいやつぎ／＼にさかゆまして、高倉山の高き

、あはれ、

あたらしき室にむかふる新玉の
　春の光りは千世もつきせじ

つれ、わらはもまかりいでゝ、たくみ給ひしみやびのつくりごさなゝ、見たてまつらまほしうあれば、何ごとも、その御目見得のふしに。ゆりはべらむ、こは。おくりまゐらすべう品にあらねど、みいはひのししにさて、さしあげつれば、たくみがたの御まかないになりさ。用ひまはゞ、うれしきかぎりになん、かしこ。

岡部やよ子

れ〳〵、伺ひなり候ひし、御さのつくりのこよなく、さゝのはせられふよし、御土地がらさへよきに、まして御いへゐのさまの、衛生にかひ候ふは、さらにも云はず、いさ趣味ある、御すきを、つくさせ給へば、さきなり〳〵の、御ながめにも、さませ給ふて御そのふなど、いしらず、御めでたく、御庭の松のさきはかきはに、さかゐさせ給はん、ぎりの御庭の、千代萬代に、うごきなき、御ためし、御見わたしの、海かけて、幾久しく、御祝ひ申し上げ候、まづは、さりあへず、御ことぎまで、かしこ。

所佐以子

〻に、さむさを加へ候處、御許様始め、皆々様には、事なう御すごしばされ候哉、伺ひ上げ候、儕も、此度は、御研究にもまして手腕に御築遊ばされ、且つ御出處にて空氣の流通もよろしく候由、御健康にもし、いく久しく榮ゐまさん事、御よろこび申上げ候、付ては鰹鮭二尾、一荷、いさゝか御祝のしろし迄に、差上げ申し候間、御受納下され度、來る何日の御祝日には、私共迄も御招ぎに預り、難有存じ奉り候、其はやく〳〵さ參上致し、及ばず乍ら御手傳仕るべく候、先は御祝迄、しこ。

田中ひろ子

しう、みむねをこめさせ給ひて、御ふしん中さのよしは、早うより、人てならで承りゐ侍りしが、昨日今日さは思はざりしに、早も、此程成

り給ひて、あさては、御わたましのよしにて、御招ぎ給はりしうれしさ、げに此上やあるべき、みがき立てさせ給ひし御殿つくりは、さもこそ、四方のながめいさうはれやかに、はたうるはしうおはすらめ、御高欄より海山の景色を、はるばる見わたし、たらむには、いかばかり床しからましさ、今よりいみじう、たのしみになん、この九谷燒花瓶、並に文晁松竹梅三幅對、進じまゐらするを、幾久しう納めたまはらば、いさうれしうなん、あなかしこ。

●明治卅二年度女鑑月並歌文兼題

一月五日	歌	新年松	十二月廿日〆切
	文	梅をめづる詞	
一月廿日	歌	都雪	一月十日〆切
	文	鶯を待つ	
二月五日	歌	尋梅	一月廿五日〆切
	文	婦人慈善會に入會を勸むる文	
二月廿日	歌	霞隔行船	二月十日〆切
	文	同返事	

〆切期日に遲れたるは總て採用せず。

一月五日兼題に限り歌文とも特に左の賞品を參らすべし

●天
土佐日記燈　一部

●地
女鑑　半ヶ年分

●人
女子の本分。女子處世論。女子教育要言。雅文消息集。修身百首。の内望みもの一部

●秀逸

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名

用紙は半紙半裁の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　住所　姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に認し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名字は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○書式に違ひたるは總て沒書とす。

男爵高崎正風先生序　◎　本居豊穎先生序

故富士谷御杖先生述

土佐日記燈

大和綴優美　自一巻至八巻　紙數壹千百頁　上中下合三册

◎全三册◎正價壹圓五拾錢◎遞送料　四種郵便卅錢　小包〇十里迄七錢〇百里迄十二錢〇百里以外二十五錢

富士谷御杖の翁斯の學に至り深かりしは今更にいはず其ものせられし著書これかるが中に燈といふもの古事記燈、萬葉集燈は翁か在世の頃にゐり巻ともなりて、世に廣こりしも、この土佐日記燈は早く文化の末つかたになれるものなるかさるよしありて時の粟田の宮の請はせらるゝに稿本のまゝ奉られしを、後いくはくもなくて翁はみまかれしかは、さなからに理もりて流布せすなりにき、世の學者見まほしふすれとも、さるよしもなくて空しく年經ぬること玆に數十年、さるを翁の男元廣ぬしかさるへき筋より辛うして寫し傳へたるを、いとうれしくて、このたひ我社にて、摺り巻にものして廣く世に流布せしめんとす抑々此の燈は世にありふれたる註釋書の類と異にして、貫之朝臣のこの日記を書かれしはかりそめのすさひにあらす、土佐の守に任されしを深く憤る由ありて、あらはには女のものせしさまになし心はその言葉のうちに、ふくめたりといふを、本として言詞は更なり文意をもいと委しく解なしな深き考證をも引き出でられたり凡國史國文に志ある士は座右一日も欠く可からざる最良書なり

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社（電話新橋八八八）

●秀逸　常陸帯（安藤朴翁著）　一部

○總て文字は分り易き様、漢字は楷書、假名字は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○書式に違ひたるは總て沒書とす。
○女子は、

第八版

●○●○●○著史女子佐眞田輪三○●○●○●

女子乃本分

金銀摺彩色表紙
大和綴最優美

全壹册

定價金廿五錢
郵稅金六錢

本邦固有の道德に基きて、我が國の婦女が盡すべき本分を明にせるもの之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは世間既に定評あり、敢て贅せず

●所載極めて擴大試に其目次を示さむ●

東京京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 國光社 (電話本局八八)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事 ○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

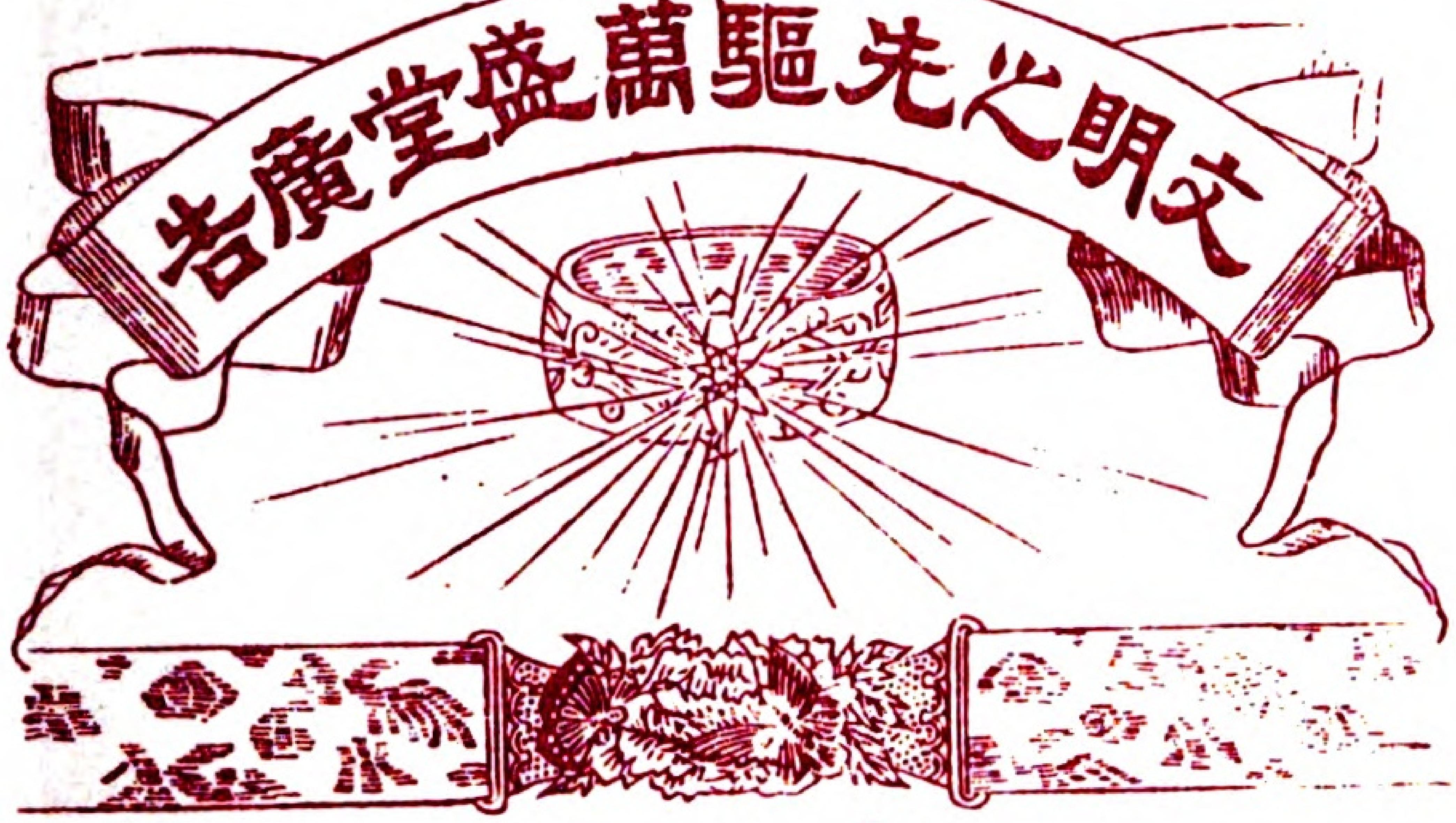
定價	一冊	十錢
	六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢
	十二冊前金（半年分）	壹圓
	全國遞送料	[illegible]
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十錢	

明治三十一年十二月四日印刷
同年十二月五日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛

印刷人 東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木貞雄

發行所 東京京橋區築地二丁目二十一番地 （電話番號新橋八八） 國光社


文明之先驅萬盛堂廣告

女鑑

治三十一年十二月二十四日發兌

第百七十一號

東京國光社

女鑑第百七拾壹號

目録

伊藤ゆき女



自信と自負心

自信はなかるべからず。自負心はあるべからず。古來自信と自負心とを同一の心とし、自信をも自負心にかたより思ふが多く、之をもまた惡しう思ふ。これ大にひがみたる事なり。自信は自らをたのむ心にして、自負心は自らを、滿てり、足れり、充分なりと、何事も滿足せるこゝろなり。少しく位あり、富あれば、はや己を高尚富貴のものとして、あだかも烏の高き枝に留まりたる如く、人を眼下に見下し、奴婢とやしなひ、或はあまりたるもの少許を人にとらすれば、こよなき仁惠として、あだかも天帝になれるが如く心得。少しく小學の道をかじり、大學の門に入れば、はや學問の大小を兼ねたるものとし。一を聞きて一を知る並々の才を、なみ〳〵ならぬ才とし、何事も己をいみじがり、己を貴び、己を賢しとす。あだかも一舛の袋に小

豆の充てる如く、小さき瓶に水を盛れる如く、氣內にみてれば、人の言、人の戒、つゆいるゝ隙なく、父母の敎、兄姉が說諭、はては友の諫も、舅姑がいましめも、耳にも心にも入らず、一舛の袋、遂に一舛のみにて、又增す所もなし。甚しきは、容顏の少しく美しきをほこり、牡丹、百合、芍藥、百草、万花、如何に露をこらすとも、如何でわが一片の笑みにまさらむやとて、自ら黃金にもまさる寶とし、はては此の容顏、此の盛色、又何を修めんやとて、人の人たる道をも問はず。其の他、學はなきも、われには此の藝あり、之は惡るけれど、此の能き事ありと、惡しき所は捨てゝ、少しの能き所をとりて心をみだし、自ら足れりとし、終に身を誤るに足る。歎ぜざるべけんや。

自信は之と均しきものならず、たゞ己が心を賴むなり。人の性もと善なり。我も人、善、如何で行はれざるべき。玉石磨きて後に知る、我もみがゝば玉の光万一りはざらん事もやと、まづ琢磨をこらす。聖人も人、賢人も人、我も人、聖人のみ天に禀

はぬことやはある。はては文王が妻、孟子が母、楠公が母、山内一豊の妻、よき
を持ち、夫を助け、子を儲け、はぐくめぬ事やはと、已が性をたのむを自信とは
ふなり。自信とは此の如き心にて、已は愚なり、學びしとて人なみにはならず、
人は天につぐものなり。我には如何でさやうの行なし得らるべき。我は世の婦人
り、如何で男など輔け得られむなどとて、かしこき人の言行を聞くも、鑑とも見ね
、到底行はれぬものとする、これ自暴自棄の甚しきものなり。猫はこぞりて鼠を
ふ、犬は皆よく家を守る、鶏はみなよく時をつくる、鯉は皆よく瀧に昇る、鳥獸
魚みなよく其の性はなし得るものなり、人の性を持ちたらんもの、人の事業の行
れぬ事やあるべき。行はざるは、自信のうすければなり。かく自信は人として肝
のものなり。世の姫達、ゆめ之を自慢と同じものになし給ひそ。





日本古代の女子道德（承前）

白松園主人

日本紀、垂仁天皇四年の條に、

四年秋九月、丙戌朔戊申。皇后母兄、狹穗彥王、謀反、欲危社稷、因伺皇后之燕居、而語之曰、汝孰愛兄與夫於是、皇后不知所問之意趣、輙對曰、愛兄也。則誂皇后曰、夫以色事人、色衰寵緩。今天下多佳人、各遞進求寵、豈永得恃色。是以吾登鴻祚、必與汝照臨天下。則高枕、而永終百年。亦不快乎。願、爲我弑天皇。仍取匕首、授皇后曰、是匕首佩于裀中、當天皇寢、廼刺頸、而弑云々

古事記にも、

此天皇、沙本毘賣を、后と爲給へる時に、沙本毘賣命の兄、沙本毘古王、其伊呂妹に、夫と兄とは、孰か愛きと、問へむ、兄ぞ愛きと、答給ひき。

……天皇……沙本毘賣……居ます時に、沙本毘賣命の兄、沙本毘古王、其伊呂妹に
夫と兄とは、孰か愛しき、と問へば、兄ぞ愛しき、と答へ給ひき。
[illegible]

て、即八鹽折の紐小力を作りて、其妹に授けて、此小力以て、天皇の寢坐らむを、刺殺しまつれといふ。

嗚呼、之の后の一擧は、忽ち天下の大事を、惹起せんとせしなり。婦道の大事も、亦こゝに至りて、極りぬ。後世の王朝時代は、更にも云はず、武家時代に至りて、節義を重んぜし武人の妻女も、かゝる局に當りては、多くは惑ひぬ。

又、日本紀に、

皇后於レ是、心裏兢戰、不レ知レ所レ如、然視二兄王志一、便不レ可レ得レ諫、故受二其匕首一、獨無レ所レ藏、以著二衣中一、(遂有下諫レ兄之情上歟)

と記して、兄王を諫め給はんの御心ありしかといへり。げに、さる心おはしますによりてこそ、天皇にも告げ給はざりけれ。其の遂にあらはるゝに及び、御身を殺して、婦道を全うし給ひぬる御心こそ、いとほしけれ。無上の至尊に配して、天下の母とおはしますなれど、御親、婦道の鑑を、衆庶に示させ給へるにこそ。此の御事蹟と共に、仰ぎ鑒みるべきことあり。そは弘文天皇の、大海人皇子(後の天武天皇)と、爭ひ給ひけるとき、弘文天皇の御妃は、大海人皇子の御女なりしかど、御父を失はれんことを恐れて、密に近江方(弘文天皇の、近江に都し給へるによりて、近江方といふ)の、機密をぞ、悉く

吉野方（即ち御父、大海人皇子の、吉野に居給ひし故に、吉野方といふなり）に、内通し給ひしかど、近江方の計畫は、皆漏れて、遂に一敗地に塗れ給ふに及べり。即ち水鏡にも、其事實を

大友皇子（即ち弘文天皇）の御妻は、この御門の御女なりしかど、みそかにこの事のありさまを、御消息にて、告げ申し給へりけり、云々（此の御門とは、後の天武天皇にて、大海人の皇子をいふ、）

と記せり。之れに反して、大海人皇子の御妃は、天智天皇の御女にて、弘文天皇とは、御兄弟（此皇后、後に持統天皇と、申し奉る）にてはしゝかども、一意御夫を助けて、其の戰勝を祈り給ひき。天武天皇の、業を遂げ給ひしも、實に皇后内助の功、甚れはかりきとぞ。

日本紀、景行天皇の卷に、日本武尊、東夷を征し給ひし時、相摸より航して、上總に至り給はんとする時、

望海高言曰、是小海耳、可立跳渡。乃至于海中、暴風忽起、王船漂蕩而、不可渡。時有從王之妾、曰弟橘媛、穗積氏忍山宿禰之女也、啓王曰、今風起浪泌、王船欲沒、是必海神心也。願以妾之身、贖王之命而、入海。言訖、乃披瀾入之。暴風即止。云々

…王之妾ハ日、弟橘媛ハ穗積氏忍山宿禰之女也、啓王曰、今風起浪泌、王船欲沒…
必海神心也。願以妾之身ハ贖王之命而、入海。言訖、乃披瀾入之。暴風即止。云々

爾其后、名は弟橘比賣命、白之。妾御子に易りて、海中に入なん、御子は所遣の政遂
て、覆奏し給ふべしと、白して中略 歌曰

さねさし さがむのをぬに もゆる火の はなかにたちて
相摸之小野 火中立
とひし君はも

其の貞烈かくの如し。これ所謂一定不變なる、唯一の女子道徳にして、民衆之れを欽仰
し、其の御美徳を謳歌して、百世絶ゑず。長く模範を示めし給へることそ、めでたくも亦
尊けれ。

景行天皇、熊襲梟帥を征し給ひしとき、梟帥の女、市乾鹿文天皇の爲に、謀りて其の
父を殺しき。紀に其の狀をしるして曰く、

市乾鹿文、奏天皇曰、無愁熊襲之不服。妾有良謀、即令從一二兵於已。而返家、以多
設醇酒、令飮已父、乃醉而寢之。市乾鹿文、密斷父弦。爰從兵一人、進殺熊襲梟帥。天
皇則惡其不孝之甚、而誅市乾鹿文。

子として父を殺す、已に大逆なり。況や、女子の敢するをや。天皇の之れを誅し給ひし
も、蓋、婦人としてのみにあらず、一般子として、大不孝をせめ給ひしなり。

雄略天皇、途に引田部の赤猪子に、あひ給ひて。汝をぞ、宮中に喚しあぐべけれぞ、他

に嫁せずてあれと、のりたまひしを、うれしく恐みて、其の身の八十歳になるまでも待ち渡りしこと、古事記に見えたり。今の人の心より見ましかば、をろかなりとや、笑ひなまし。されども、古の醇朴なりし御代は、さもありけんことぞかし。況や現神と、恐みまつる天皇の御詔をや、いと若やぎて、花やかなりし姿の、數多の年を經て、老いに至るまでも、猶綸言の重きと、一度思ひ定めし心とを、變せざりしをもても、古代、女子道德の美は、如何なる點にありしかを、伺ふに足りぬべし。今左に、事のこちたきをも厭はで、其の事實を掲げ、もて古代のさまの、從容迫らずして、いかに閑雅優美なりしかを、示さんとす。

一時、天皇遊行つゝ、美和河に到ませる時に、河邊に、衣洗ふ童女あり。其容甚姿麗き。天皇其童女に、汝は誰子ぞと、問けれぞ、己が名は引田部の、赤猪子と謂と答白き。

爾詔しめ給へらくは、汝嫁夫ずてあれ。今喚てむと詔しめ給ひて、宮に還坐き。故其赤猪子、天皇の詔を仰待て、既に八十歳を經たりき。

於是、赤猪子以爲けるは、詔を望ぎ待つる間に、已て多年を經て姿體痩萎てありしかば、更

代物を持しめて、參出て、貢獻き。
然に、天皇先に所宣之事をぞ、既忘らして、其赤猪子に問けらく、汝は誰老女、何由以參來つるぞ、問けれぞ、爾赤猪子答白けらく。其年の、其の月に、天皇の宣を被て、大命を仰待て、今日至に、八十歳を經にたり。今は容姿既に老て、更に所恃なし。然はあれども、己が志を、顯し白さんとして耳、參出つれど、答しき。
於是、天皇大驚まして、吾は既先事を忘たり。然に汝、守志に宣を待ちて、徒に盛年を過し丶事、是甚愛悲ど、宣給ひて、云々

萬葉集に、

ことし行く新防人が麻衣かたのまよひは誰かとり見ん

昔は外國のふせぎにとて、太宰府といふ者を置かれて、文武の官人を撰みて、れかれしか。其處の人夫に使はれしを、防人といひて、東國の賤きものをあてられて、年々交代せしめたるなり。此の歌は、其のさきもりに出でたつ子を送りて、其の母のよめるなり。肩のまよひとは、麻衣の肩の綻び破る丶ことなり。即、今年新に、防人となりて行く我子が、今迄は我が膝下にありて、愛でたりしかども、今分かれて、遙の國へ行かんからは、誰ありて衣服の破れをも、繕ひくる丶者あらんど、なげきたるなり。歌の心哀れに

悲しく、老いたる母の思ひ、誰れもかくこそと、千歳のもと、人をして泣かしむ。されども、國の爲、君のためなれとて、涙を揮ひながら、否み厭ふ者はなかりしが如し。即ち萬葉集の二十の卷に、

大君のみことかしこみうつくしきまてが手をはなれ島づたひ行く　眞妻

大伴の家持卿が、防人のこゝろをよめる歌に、

大君のみことかしこみ　妻わかれ　悲しくはわれど　ますらをのこゝろふりおこし　とりよそひ　かどでをすれむ　たらちねの　母かき撫て　わかくさの　妻は取りつき　平げく　我はいはゝん　まさきくて　はや歸りこと（下略）

家庭團欒のさま、極めてうつくしかりしを見るべし。

衣通姫　わがせこがくべき宵なりさゝがにの蛛のふるまひこよひしるしも

萬葉十八　青丹よし奈良にわる妹がなか〱にまつらん心しかにはわらじか

仝　くれなゐは移ろふものぞつるゐみの馴にしきぬになほしかめやも

こは夫の妻を忍びて、忘れかねたるなり。

くありてこそ、妻も夫に對すべけれ。

古今　たらちねのれやの守とあひそふる心むかりは關などがめそ

となりての慈悲は、かくこそあらまほしけれ

萬葉　難波人あし火たくやはすしたれどれのが妻こそとこめづらしき

赤染衛門　うつろはでしむし篠田の森をみよかへりもぞする葛のうら風

古今　あまのかる藻に住む虫のわれからと音をこそなかめよをむ怨みじ（をはり）

書翰文　　鹿山

書翰は人の性質を現はす

言語動作は人の性質を表はすこと言ふまでもなし、而して書翰また能く人の性質を示すものなり。之を言語動作に比するときは、書翰は間接なるが如しと雖も、彼我相距れて之に接するや、殆ど其の人と面晤するの感なきにあらず。隨つて其の書法の精粗、字句の排列、用語の尊卑、語調の難易、文字の生熟等孰れも切に注意すべきものなり。男女老少如何なる人の書翰にても、之を一讀するときは、畧、其の人の性質學識を推測するに難からざるを知る。即ち、書翰は其の人の品性を顯はすものなり。然るに、近來小壯

男女が認むる處の書翰、多くは蕪雜にして容易に解し難きを常とす。其の用語、書法、文字の誤脫多く、莊重の誠意を缺ぎ、學藝の素習なく、大事小事共に之を忽諸に附するの弊ある、是れ豈深く患ふべきにあらずや。而して吾人は殊に茲に我邦女子の猛省を促かさゞるを得す。

女子の書翰は女子の特性に應すべし

人あり、吾人に告げて曰く、近頃女子の認むる書翰を讀むに、殆ど男子と區別すべからざる艱澁生硬の語調を用ひ、或は文字を誤り、或は假名遣を正さず、一讀嘔吐を催すもの多しと。是れ果して深く憂ふるに足らずとするか。余は曾て女子に知人なし、故に當今の女子の書翰を實撿するの機を得ずと雖、吾人の交遊せる名士父老の歎は、此點に於て悉く一致せり。蓋し輿論なり。吾人の所見を以てするに、女子の書翰文たる、女子の本性を傷らざるを以て標準とす。別言すれば、男子と相異なる所の特性を保つを要す。乃ち女性の天稟思想の自然的標章たるに適するを旨とす。而して文章の一種として書翰文を觀るときは、亦唯吾人の思想を發表するの一機關たるを以て、女子は女子の性格に適して所謂女子らしき文體を擇ふを可とせん。果して然らば、最良至便の文體何くにか

を観るときは、亦唯吾人の思想を發表するの一機關たるを以て、女子は女子の性格に
して所謂女子らしき文體を撰ふを可とせん。果して然らば、最良至便の文體如何に

の從來慣用の語調字句を用ふるの外、他に術あらざるなり。

文章と時勢との關係

言文一致せざる我邦の今日に於て、男女文體を異にする我邦の今日に於ては、異同の點を保存するを以て頑愚とすべからず。世に慣熟せざる文章は奇と雖も効なし。文章の時勢と共に變化せざるべからざるや素より論なきのみ。而も其の變化たる、急進に在らずして漸進に在り。時機未だ到らず、轉移尚ほ熟せざるに先ち、之を激變するは、恰も、夏未だ到らざるに單衣を着け、冬未だ來らざるに綿入を纒ふが如きのみ。亦異ならずや。然りと雖、吾人は、今日、猶、上古の文體を用ゐよといふに非ず。即ち、夏既に到りて袷を更めず、冬既に來りて單裝を變へざれば、其の弊や亦前者と擇ぶ處なからん。されど、唯、其の時代に應じて、宜しきに適ふをこそ最上とすなれ。姉妹諸子、幸に其の取捨去就を誤ること勿れ。





伊藤ゆき女

壚井ふく子

匹夫にして百世の師となる、韓退之と名を齊しうせむもあまりなれど、げに百世はおろか、千世萬世の鑑ともなさまほしき婦人こそはあれ。名をゆきとて、三重縣、朝明郡、富洲村、大字一色にすめる伊藤孫八の妻にて、おなじ村なる樋口權平が二女なり。權平家もと貧しかりけれど、ゆき女は幼きより小細工の勞をとりて、小さき腕に父母を補けゝるが、やうやう二八の春、あはれ富家の女ならむには母兄口を開かずして、はやも媒すべき人擇なる年なみと、之は[illegible]とより温厚篤實まめやかに主人に事ふること三年、弘化四年、ゆき女十九歳の折り、媒する人ありて、伊藤孫兵衞の弟、即ち孫八なる者に嫁ぎて分家をなしぬ。然るに此家もまた貧家、家を分たんにも送るべき財産はなく、やう〳〵白米二斗麻苧百目を裂きて與へられしのみ、僅かに二三日を糊すべきのみなれど赤貧洗ふが如く、夫は日々、漁業を以て其の日の生計をすれど、ゆき女は麻などつむぎて之を補け、かつ〳〵世を渡るほどに、やがて一男兒二女子の子寶はつゞきてまうけぬれど、まだ白玉の、腰にかゝり、手足にまろびて、之が爲いよ〳〵困窮に陷りぬるに、夫孫八は、慢性間歇熱にかゝりて病の床をはなれず、之れ實に嘉永三年にて長男やう〳〵四歳、二女なほ襁褓の中にあり。病の看護幼兒の養育に手業はさまたげられ、實に窮途、饑餓に泣くばかりの慘境、目もあてられぬを、子に迷ふの[illegible]

は霜ふるも天性おら雪の潔白、貞實、おのづから知る操、父母が言の葉を退けて云ひけるやう、誠に父母が御心くだりはさることとながら、夫が不幸は妾が不幸、今此の病床に臥す夫をおきて歸るは、妾が忍びざる所、むしろ饑餓に迫りて死すとも、此の家は去らじ。願くば、母上、父君、妾をして女の道をつくさしめ給へよとて、固く貞操を守りて、動かざるに、父も、母も、其の志の奪ふべからざるを知りて、又云はざりき。ゆき女は夫よりますます奮勵し、人より少許の資を借り魚網を編製し、朝に夙く鳥の音をまたず起きて業に就き、夜は近隣のものと共に夜なべなしつゝ、夜半近隣の者が寢に就くを、ゆき女は更に燈火をかきたて、これまでは普通の夜業のみ、今よりわが身のなす仕事なりとて、雪女一層精勵をつみ、いぬるを忘れて、曉におどろくこと幾夜なるを知らず、げに花咲く春のあけぼのをつゝる鶯の聲も、はやとく起きて業に就けよとの音と聞き、夜半深くはたれる虫の聲にも、已が身をつみ、螢の光、窓の雪、たゞさねさゆる友と見て、つゆまどろまんとせねど、春の夜も打ちとけて臥せず、夏のあつき日、つゆすゞしきを取らんともせず、一年三百六十五日、夜も晝も、雪女貞實に千辛萬苦を積むこと十三年、骨身を碎きぬる曉、天ますます寒く、一朝夫は急劇に眼病を發し、醫藥効なく數日ならずして雙眼明を失ひたり。ゆき女はおどろき且悲しめど、詮すべなければ、ますます奮勵して、生計を營む中に、已がもと雇はれたる主人伊藤孫左衛門、文久二年の頃、產を破り、一家流離し、其の子敬太郎といふもの、引き取りてなく、困厄するを聞くに忍びず、窘厄の中に、敬太郎を引き受け、之を養育しけるほどに、舊主敬太郎が名にて負債したる金圓ありて、金貸共きびしく敬太郎に迫り、ゆき女に懸け合ふに、ゆき女は、其が債主に就き、百方哀請の上、全金額の中幾分かを棄捐せしめ、即ち金九十八圓を年賦として之を負担したり。

ゆき女は一層勉勵せしが、子もやうやう長じて、長男

は十五六才、二女は十三四才にもなりしかど之をも督勵して、幾分かの手助をなさしめ、其の身をもくだき其の得る所の賃錢の內、幾分を日掛となし、之を問屋に預けおき、遂にそれにて全く償ひたり。あはれ金錢何の食にかなる、さやうに迫り取らずとも、己が口のかるゝにあらざらんに、金錢を貪ばる人の心は虎狼より又凄じかりけり。こゝに又主の兒敬太郎は年長ずれど、人となり鈍愚にして、自ら立つ能はず、衣食皆ゆき女が助くる所となれるが、一朝之も俄かに急劇風眼と稱する劇性の眼病を發し、夫とひとしく盲目となり、いよ／＼自活の道を失ひけるに、ゆき女は之をいたはり、按摩の業を覺えしめ、遂に細きけぶりを立つるに至らしめしとぞ。嗚呼一方ならぬ玄ら雪の惠に、みさをに、且は潔白に、勉勵に、殊に兄夫妻には偏に身を下して事へけれど、近隣の人々、感じ感せぬものは

賞されけるに、善人德に感ずるいみじう、ゆき女は泣きてよろこび、ます／＼感奮して職をはげみけれど、そ數多の子女を儲けて、家計の困難を增したりしも、その不屈不撓の心、遂に貧苦にかちて、一家をなすに至れり。後長男は不幸にもみまかりしかど、明治七年九月、同村の民、伊藤松藏の三男孫七と云ふ者を迎へて養子となり、二女これに娶しけるに、孫七も實直なるものにて、よく家業を勉め、遂に漁舟漁網等を合せ家產凡そ二千餘圓を有ち、安居して老を養ひ能ふ身となるに至りしかど、ゆき女はなほ身をやすきにおかず、日節儉を守り、子女を督勵し、一家の和合に心を注ぎけれど、子女もみなこれに訓せられて、みなよく職業をはげみ、貧苦の中に人となれど、かつて一人の說諭を受くる者なく、孫さへ數多見て、家いよ／＼榮えゆくける。これ實に雪女が積みにし功績にして、殊に、衣

そに、且は潔白に、節儉にゝ殊に兄夫妻には偏に身を下して事へけれど、近隣の人々、感じ、感ぜぬものは

受くる者なく、孫さへ數多見て、家いよ〳〵榮えける。これ實に雪女が積みにし功績にして、孫に

る言は、心なき近隣のもの、口碑となりて、四隣寄りとは之を賞し、知らず〳〵其の勉勵篤實に感化せらる者少なからずとぞ。あはれ世に家を興し、產をなすの少からずと雖、淸廉、貞實五十年の久しき、終始渝らざるゆき女が如きは、またたぐひあらざるべし。

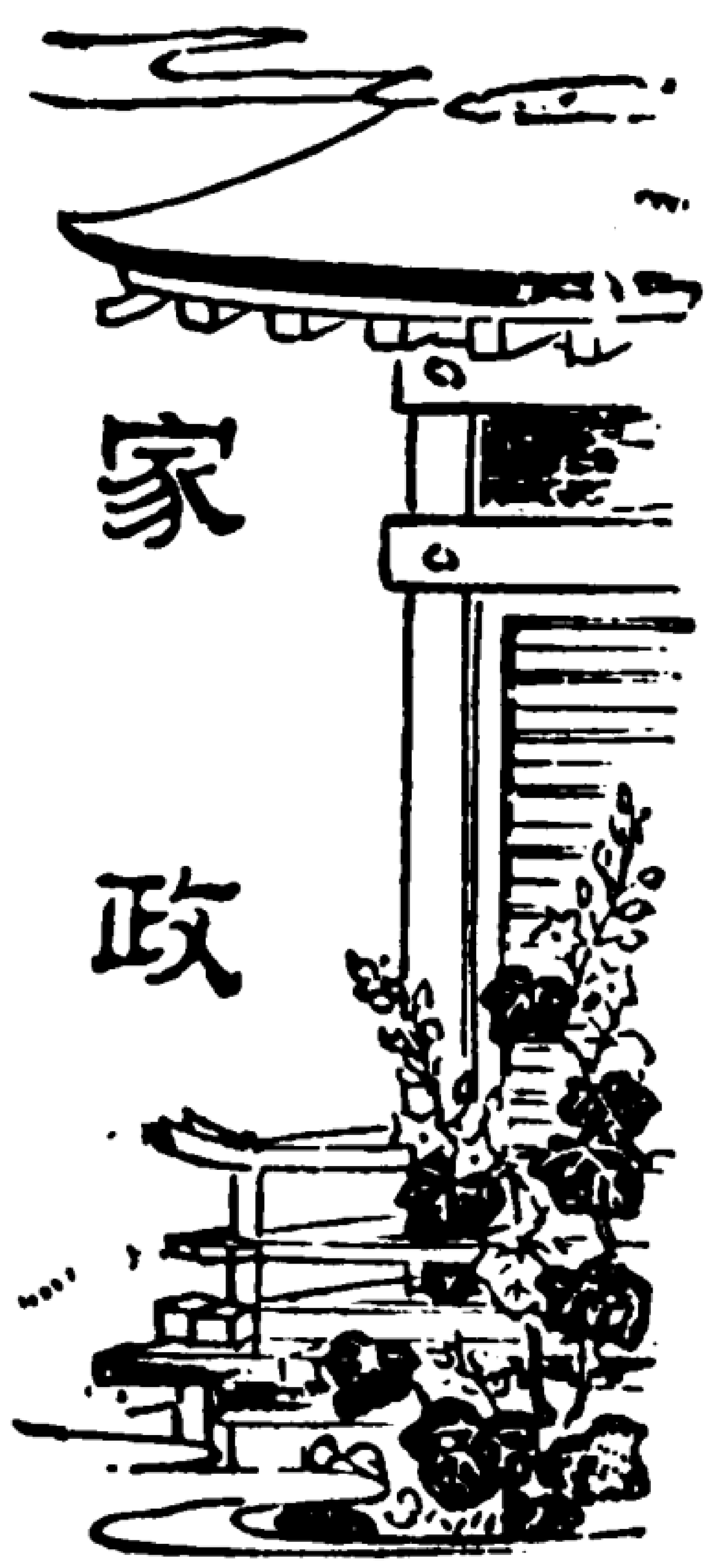
藤原豐成の妻

山本正周

藤原豐成の妻は、藤原百能の女なり。夫死して後は固く貞操を守り、內職を供奉して世を送り、賢女の聞えありけれど、勝寶年中に從五位下を授けられ、寶龜年中には從二位に進み、延曆元年に薨じたまへり。年六十三なりしといふ。

刑部刀自咩

刑部刀自咩といへるは、武藏の廣主といへりし者の妻なり。廣主が死せし後は、墓側に廬を設け、朝夕悲泣して、之に事ふること生るが如く、歲を經て渝らざりけれど、承和年中に。國司より此の事を官に上申しけり。よりて、勅して位階を授け、田租を免じたまへり。

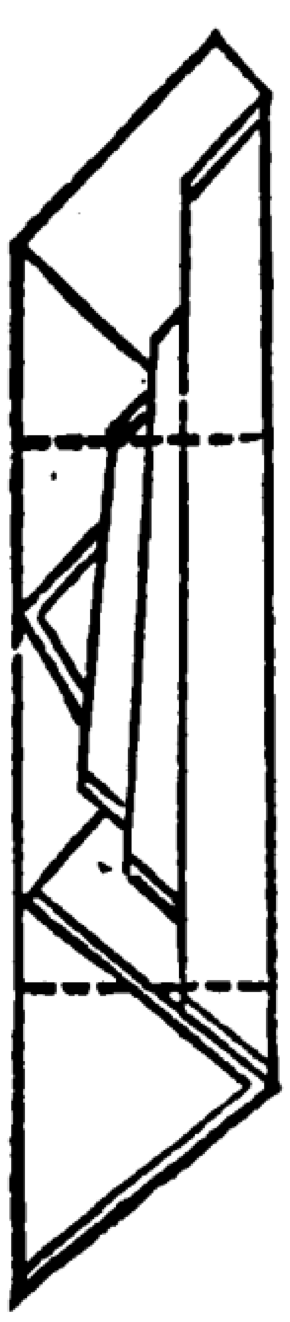


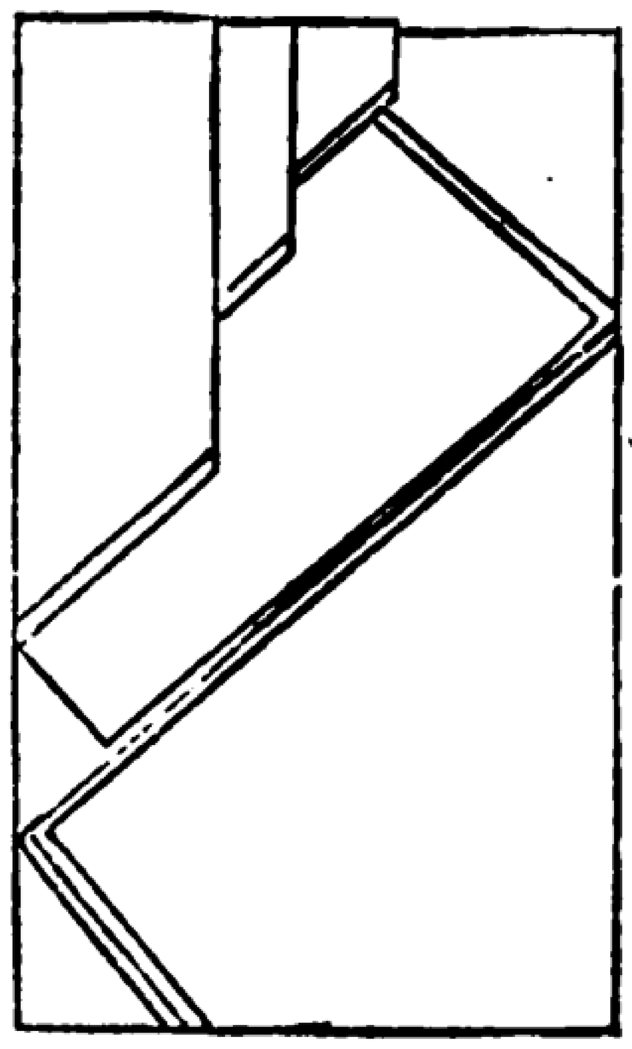
包の記

故有住齊先生致授

門人　なみ子　鏻子　筆記

（眞）煙草入。揚枝さし包

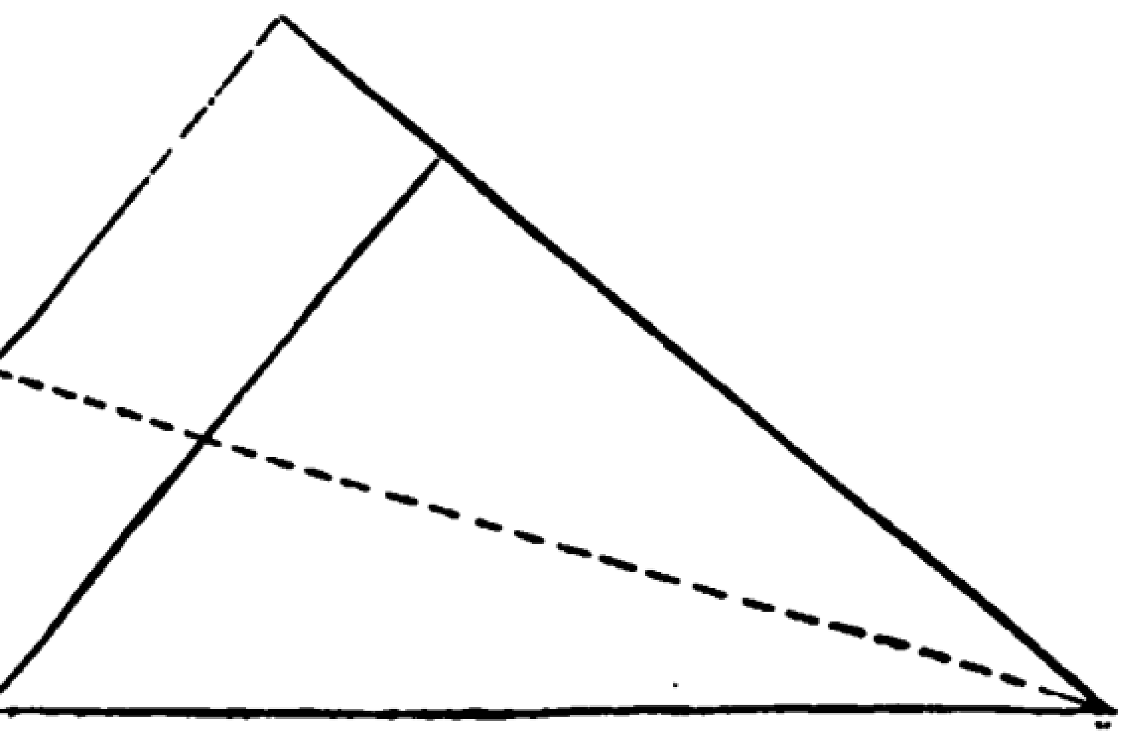




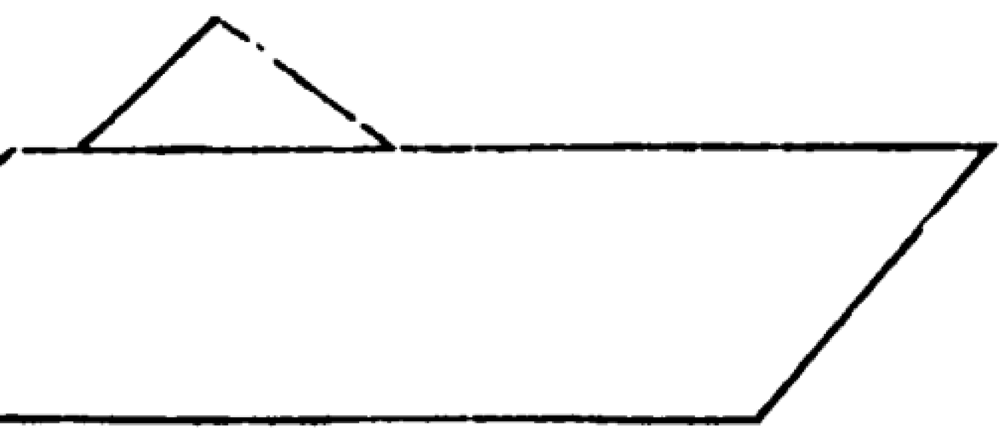
折り上りたる裏の方

第一圖の如く紙取して、直に第二圖の如く、向へ折り反し、第三圖の如く、うちかへして、段々に折りなして、第四圖の如く折り、形紙をつくりなすべし。

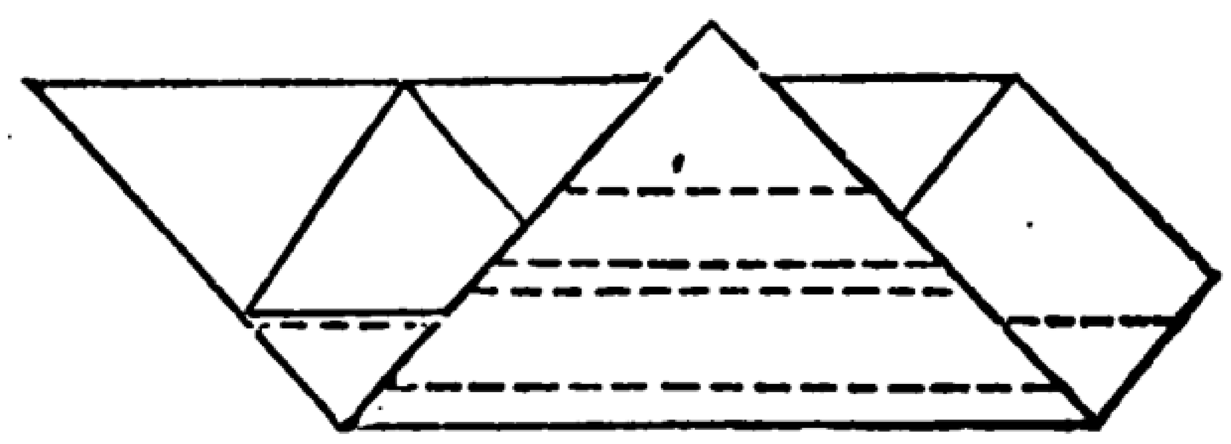
第一圖



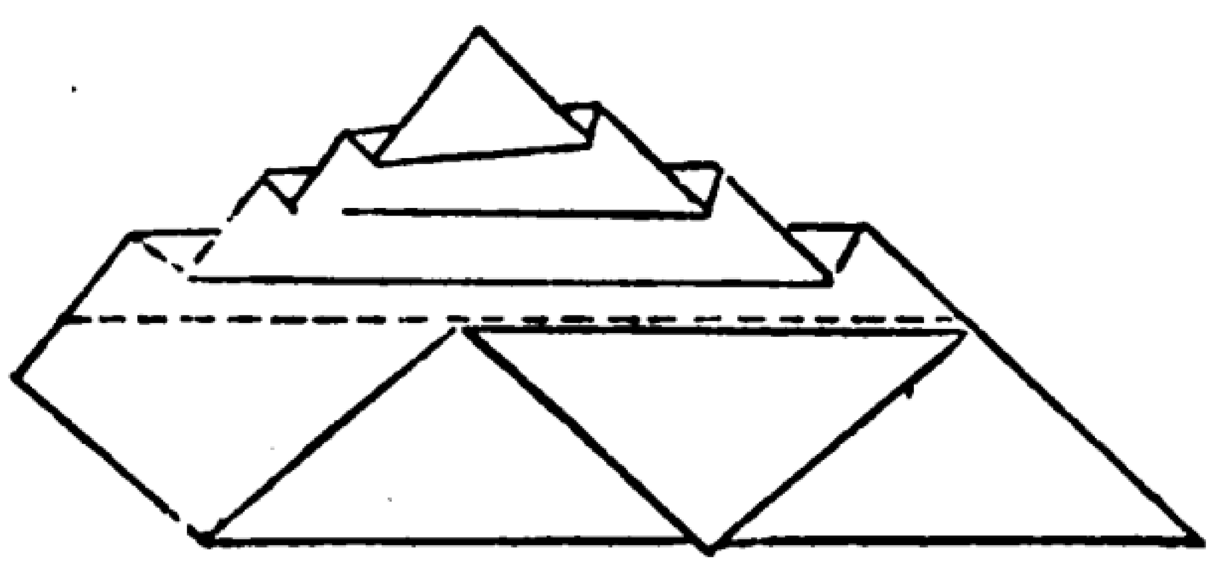
第二圖



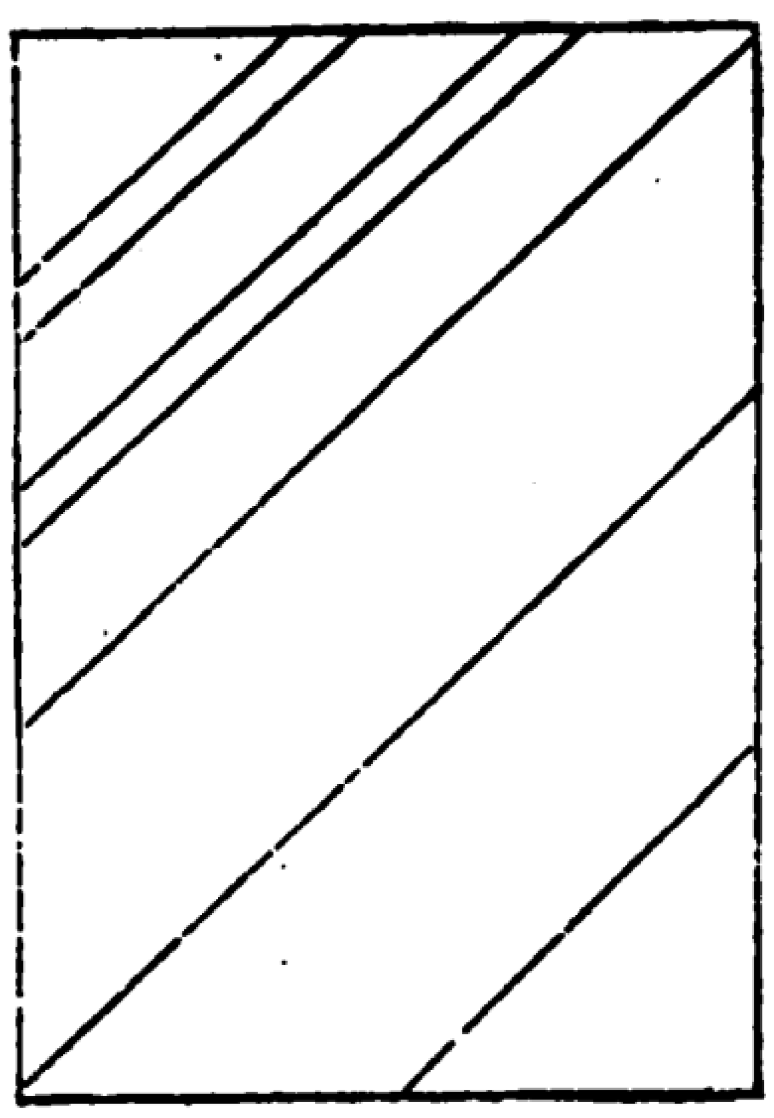
第三圖



第四圖

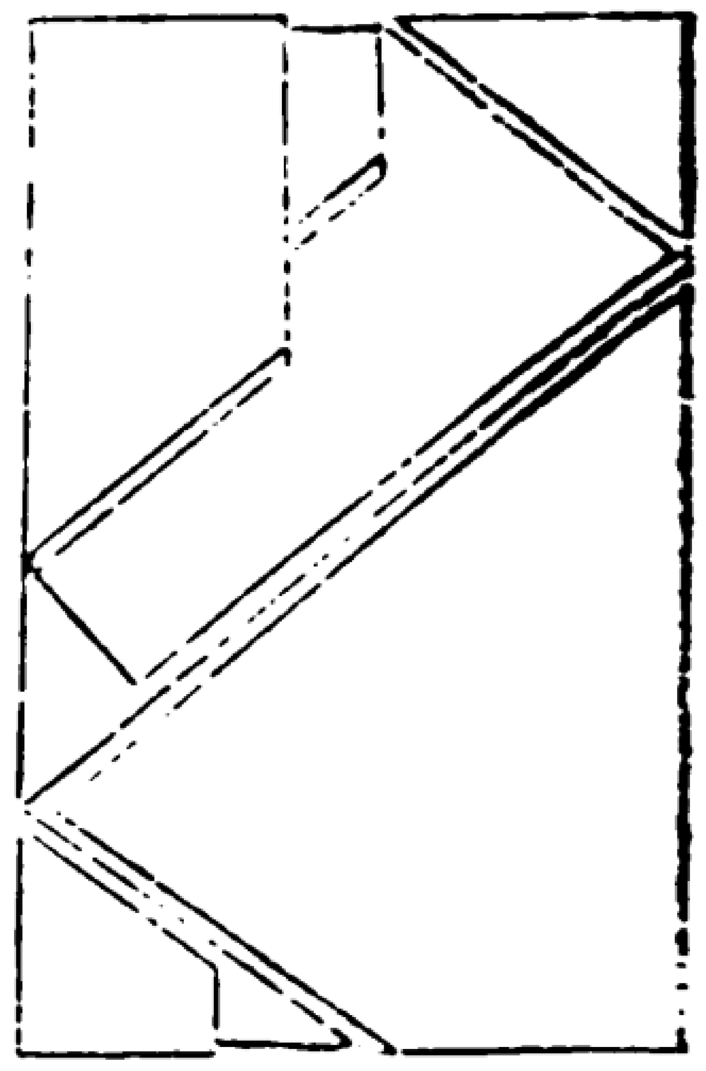


形紙



（草）同

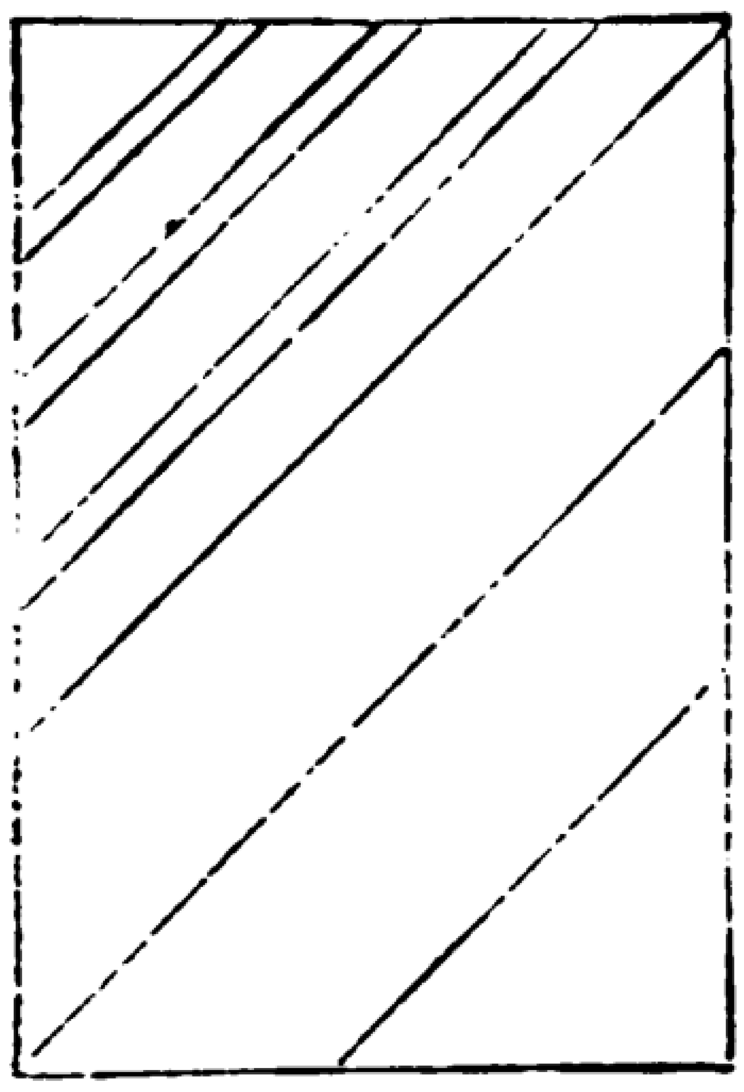




折り上りたる裏の方

れも眞の如く折りなすなり。圖を見て考ふべし。

形紙





茶の湯

茶禮初學

孤峰庵碌仙齋不羨
關　葦雄

客中立之內勝手の式

一客出たる時、先炭を組直し、灰炮烙拵へ、茶碗を仕籠、水指の水を入、花入を拵へ、花を拵へ、花臺へ組、水こばし、柄杓、蓋置迄拵へ、夫より小座敷を明け、先づ潜り口の掛金をかけ、菓子盆を引、掛物を卷、釜の蓋をしめ、座中を羽箒を以て輕く掃、釜の蓋を切、花入を掛、花を入、水指を置付、水鉢へ水を入、くゞり口明かけ、客へ案內する。

不羨曰一會の茶の湯を務むるには、午前十時茶席へ釜を掛ると同時に、水屋の茶巾盥に水を入、柄

杓、茶巾、茶筌、青竹の蓋置を水に漬置べし。水指へ水を入、水翻も曲ならで水を掛濡すべし。是釜を掛ると同時に準備すべき事也。第百六十四號に掲げたれども、事繁雜に亘り、脫條の處なきにしもあらざれば今爰に訂正す。偖賓客は茶席を出て腰掛に至るべし。主方にては、例の建切の微音を聽たらで、如二本文一、炭斗の炭を組、灰炮銤を拵へ、次に茶碗を拵ふべし。其仕法は、濃茶點前水屋拵の條、(既載)に掲げたる如く、先茶碗を水にて洗ひ、布巾にて拭ひ、茶巾を絞り、疊みて茶碗に入れ、茶筌の軸を持、さは〳〵をして水を振切、結目を改め、茶碗に入べし。軸を前の緣に持せ、穗先を茶碗の中に落し入べし。又平茶碗には、穗先を茶碗の向のふちへかけ、軸の方を前へ落し、茶巾をあしらひ留る樣にする事なり。是は平茶碗

方眞中に眞直に緣よりふちへかけ渡すべし。翻も再び水にてぬらし、群なき樣にすべし。是に蓋置を入柄杓を掛べし。(但し合と柄とを眞直になすべし。曲の綴目は前と心得べし。水指の水を九分目に入、蓋をなすべし。(但し釣瓶水指、曲物水指こ水を能爲レ含點茶中ぬれ居樣にすべし。信樂、伊賀、備前燒の類も同樣水を掛ぬらし置べし。次に茶席を明け入、先菓子盆を下げ、釜のふたを締て、座中を座箒にて輕く箒べし。次に掛物をはづし卷て勝手に入、花入を竹ならで水をよく〳〵そゝぎ、水を入持出、床の正面の壁、折釘に掛、或は置花盆に花を載せ、水次、茶巾、鋏をも添持出、花を生けべし。扨此花の生方は、大に六つけ敷物なり。生花者流の如く、眞添行流し、留と云樣に枝を極め撓透して生るには無レ之、所レ謂茶の花は概して



何と愛に指敎しがたし、徐々茶を學び、茶の湯にも屢往て了解し、倘宗匠に質議して口傳を受けべし。枝振木振は生れの儘を見立て切べし。一種にも不限二種も有べし時節に寄、草花抔寄せ花と唱へ、三種五種も生べし、色取を差合さる樣にすべし、形姿は能取締て全体の治りを第一とす、又花生に取合を見斗ふべし、大圓庵不昧侯舊諸侯松平出羽守雲別、松江の城主茶會を催さるゝ時、茶道掛りの士今日の御茶會には、御花入は何品を差出し可レ申哉と伺ひしに、同侯先花を取極めて後、花入を定めて命ずべしと、被レ仰しと、實に去る事也。流石數奇者の意匠は格別なる者にて、一言も無レ之、花の事を記すに望み、思ひ出る儘爰に一言す。

（以下次號）

女禮

飯鉢出し樣

有住常子

まづ飯鉢を臺に載せて、杓子をうつふせに前におきたるを、兩手にてふちをもちて進みいづるなり、兩人にて出づるに、一人蓋置をもちて共に出るなり、程よき所に至らで、共に踏そろへて、左足を半足ひきて左膝より跪きて右をつきて居りて、鉢臺をおきて、

○鉢持出たる者は、鉢のふたを兩手にてはしをもちてとりて、内の方を御前の方へむけてとりて、露を鉢の前の方のふちにてきりて

よせておくべし

○蓋置持出し者は、蓋置の臺を右の方、鉢臺のわきに蓋をあをむけておきて杓子を、手をあふむけて下よりとりて左手をそへて、あふむけて鉢の中へいれて、鉢臺をとりて、もちいで、御前に至り、御左の方へ、自

らの進むほど膳と臺との間をわけたきて据ゑたくべし、さて、兩方の手を進む時の順に疊につけて進めて、兩膝をもすゝめて、右の手に左の手をそへて椀を受とり(糸ぞこを持て)て、左の手にうつして、右の手を引て疊につけて、それを力にして、右に膝をよせて臺の前によりて、左の手の椀の糸ぞこを鉢のふちにかけて、右の手をおふむけて下より杓子をとりて、二杓子半ほどによそひて、杓子をたきて、右の手にうつして、左の手をたゝみにつきて左にむきて、進みて、右の手に左をそへて參らするなり、

客の品によりて、左手にて出し、又左手にて受取ことあるべし。

さて兩手を引て、兩手をつきて鉢臺の前にすらしてたきて、膝を其方へ直にむけて、御臺をあしをとりて引て、兩手にもちてたちて、右膝を引て爪だて、左膝を

[illegible]

にむきて立て、右足を一足、左足を一足あとさがりに引て、次に右足を、左足のあとへ引てつけて、次に左足を右足のさきへたてにつけてめぐりて、左足より進みて立かへるべし。

さて蓋置の者の所に來りて、右足を左足にかぶらせて左にめぐりて、もとの如くすわりて、ともにたちてかへるべし。かへりやう、三足にて引こと、まへに同じことなり。

新撰 結物百種

百草庵一無

眞の寶珠結(1)

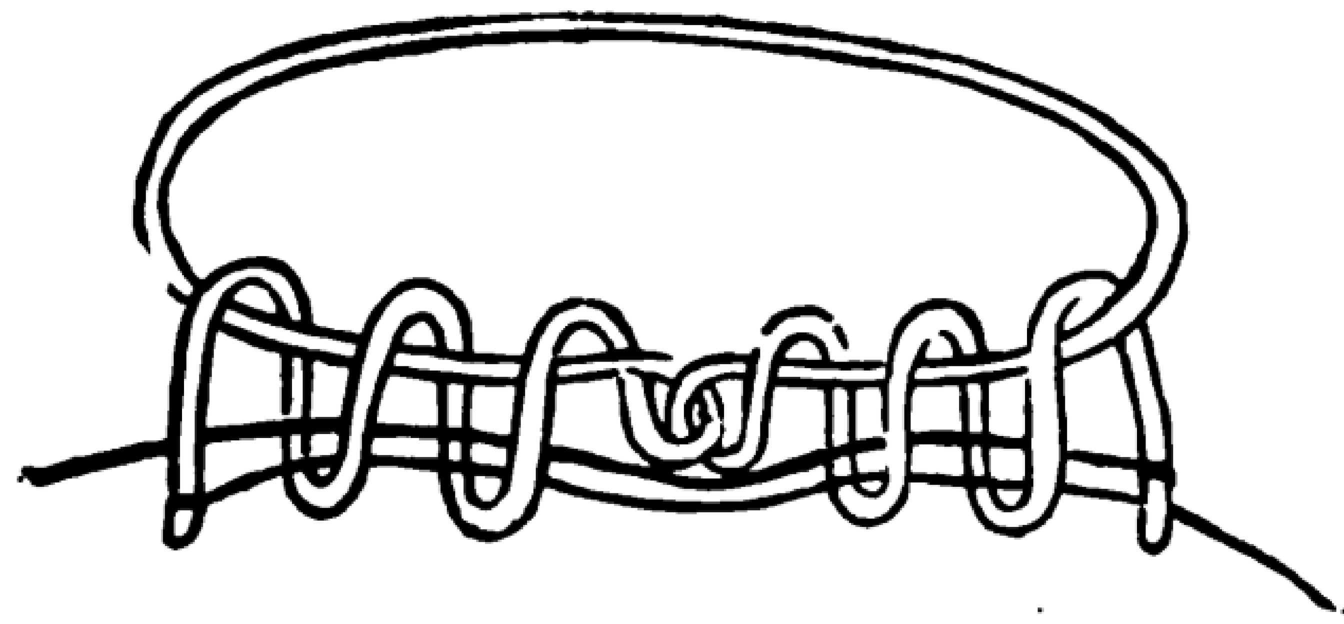
或說に云、貴人の鞭に用ゆ、一名たもひ結ともいふ。



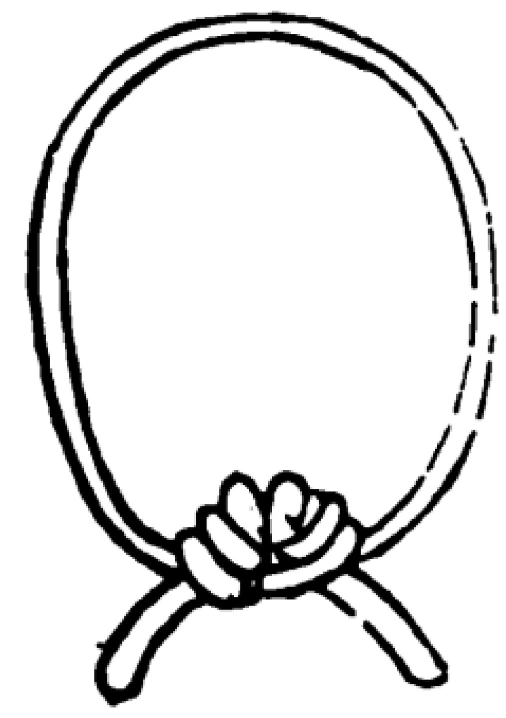
如此形になるゆゑ寶珠むすびといふ。

…て、漆を其方へ直にむけて、宝臺をあしをとりて引
…、両手にもちてたらて、右膝を引て爪だて、左膝を
…てつまだて丶、右の方の膝頭をうかして、左膝頭

第一圖



第二圖



結び上り

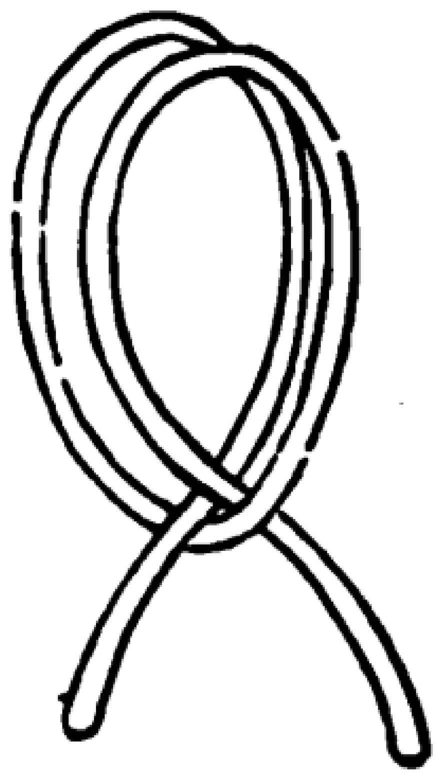
恋結20

是は古へ鷹の鳥の山緒かくる時のむすびなり。當今は、思ふに女子の頭髪をむすぶ時に是を用う。第一圖の両つの輪を重ね合せ、第二圖の如くして引しめ結ぶ

第一圖



第二圖



結び上り

或説に云、貴人の鞭に用ゆ、一名たもひ結ともいふ。

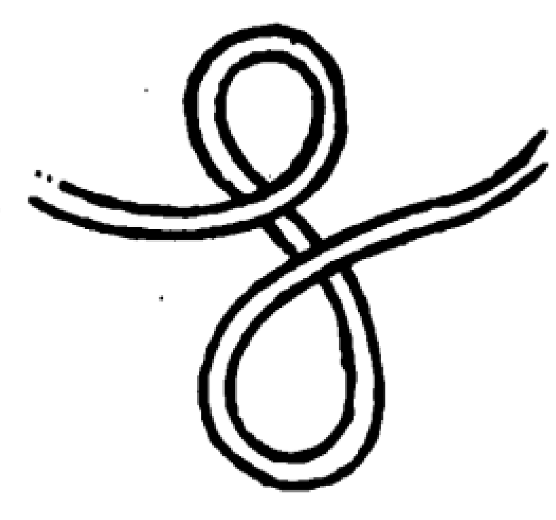
〇 如此形になるゆゑ寶珠むすびといふ。

墨線の通りに両方に引きてしむべし。

木瓜結21

是は辻結とき丶たる事あるが、伊勢家結の記を見れば、馬のまりかいの辻に用うとあり。又、もつかうと云もんの形に似たれば、かく名付たるなり。

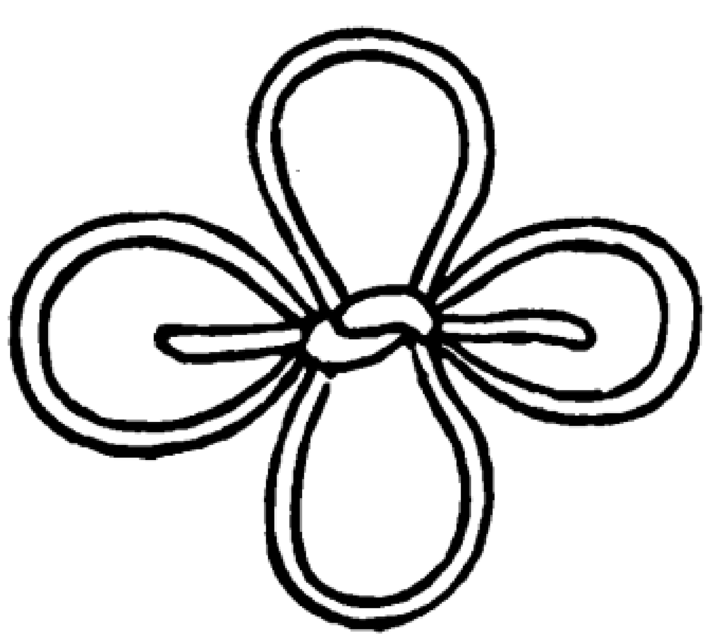
第一圖



第二圖



第三圖



結び上り

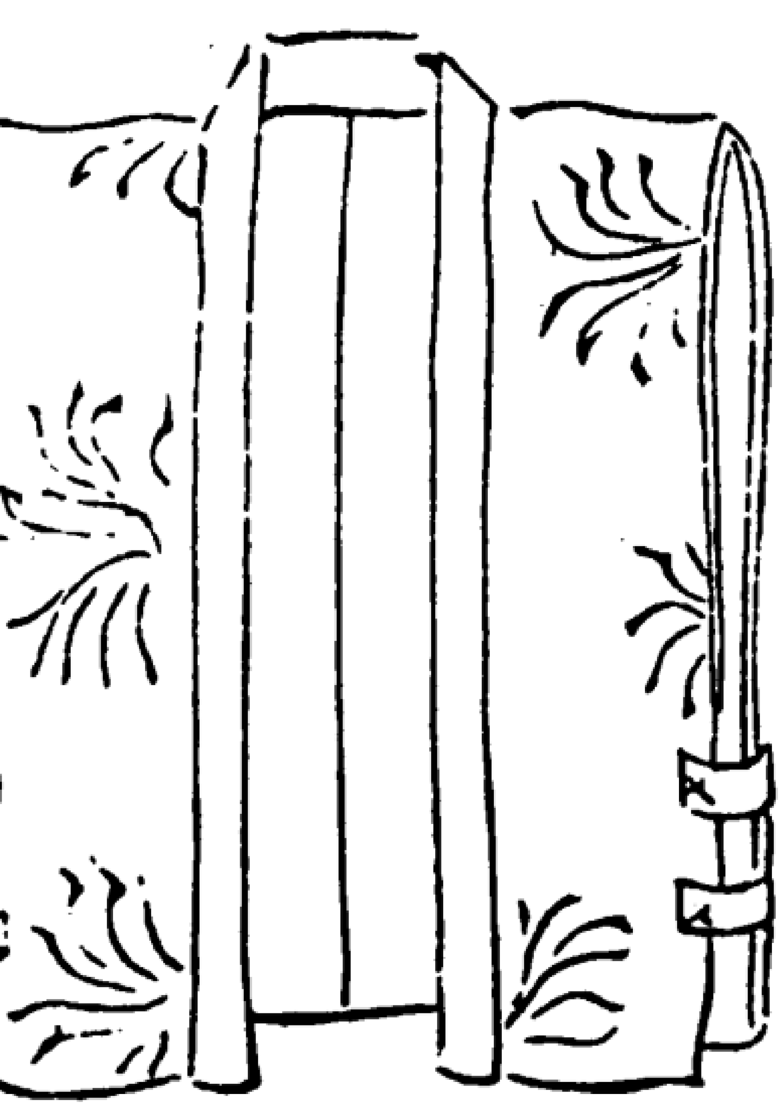
たちぬひ

西山たい子

（百）猿つ子大人物

冬寒き折り羽織の下、又は秋冷やゝ寒き頃、春の朝夕風のなほ寒きころなど、一寸一重の上などに着くるものにて、切は何にてもありあはせにてよろしく、若し新たに仕立つるなれば、木綿巾にて、七尺二寸ばかりあれば出來るなり、まづ七尺二寸ばかりの切を四つに折りて襟方を衣服と同じくわけ、其の前になす方を羽織を裁つ如く直眞ぐに切り取り、それを背の裏になすなり。又裏は外の切になして、かきたる切を襟になすもよろし、又裏に同じ切をなす時は、襟の切は他のものを用ゐねばならず、尤巾廣きものなれば、一寸ば

つくらむよりは都合よき古き切を用ゐる方よろし、其の裏表とも巾の同じ物は、先づ脊をぬひ、下より脇をぐるりとぬひ、たゞ襟の所だけ明けおきて裏かへして疊み、綿を入れ、ひきかへし、襟をつけてくけるなり。又新らしき物にて木綿なりに仕立つるには、表も裏も脊をぬひ、表のに裏を縦てに直眞ぐにはぎつけ、まへうしろも下を縫ひ、綿を入れ、引き返へして襟をつけて絎けるなり、又長さ二寸ばかり、巾三四分ばかり、ちの切を四つくけ、脇の下の方を前へうしろ二ヶ所とぢ合すべし。之はなるべく身に合ふをよろしとすれば



仕立上りの圖

巾五六寸丈け一尺五六寸より二尺ばかり其の人、の切の都合をはかるべし。よく圖を見合すべし。

だいどころ

みそしるのいろ〳〵

一納豆汁の拵へやう

豆と味噌とをよく摺り交せ、汁の實は、あられ豆腐、き菜等を入れ、能く煮立たすべし。

一卯の花汁の拵へやう

噌を摺り、水にてのべし、豆腐滓を入れ、又、葱の分切　蜊又は蛤のむきみ等を入れ、能く煮立たすし。

一酒粕汁の拵へやう

き酒粕の汚物なきを撰び味噌と等分にして、擂鉢に能く摺り交せ鰹節の煮汁（或は水）にてのべし、これに葱の五分切か、魚類ならば、鰯を二三分位の筒切、其他何魚にても、さいの目切にして入れ、或は豆腐のさいの目抔にてもよし少し入れて煮立て用ゆべし。又此の粕汁を客に進むには、摺りて水嚢にて漉し、薬味を入れて拵ゆべし。

一泥鰌汁の拵へやう

普通泥鰌汁の拵へやうは、先づ味噌をよき加減に摺り、水或は湯にてのべし煮るなり。又泥鰌は折々水をかへ、充分泥を吐かせ置きたるを笊に揚げ（死したるは取り除くべし）水を絶たちて丼様の器に移し、酒を少し入れ、泥鰌を傷め、或は、鹽にて傷め、汁の煮立ちたる時に、此の泥鰌を入れ、猶能く煮立てゝ用ゆべし。又此の酒、鹽にて傷むる代りに、鶏卵を割りて入れ（卵の分量は泥鰌の多少によりて加減すべし）泥鰌其の卵を呑みて弱りしとき、汁に入れて煮る時は、泥鰌の腹に鶏卵入り居て味佳きものなり。

一又一種の泥鰌汁

泥鰌をくだの如く切り、葛の粉に鶏卵を加へて溶きた

るを衣として、胡桃の油にて揚げ、加料は、茗荷、牛蒡、木の子の類を細かに切り入れて、交ぜて味噌汁仕立にするなり。

一納豆もどき汁

豆腐を摺り、味噌汁にてゆるめ、尤も味噌汁はいかにも能く摺り、煮汁ばかりにてゆるめ、味には、小鳥、或は野菜類細かに切り入るべし。

一煮ぬき汁の拵へやう

通常の味噌を其の儘摺らずに、酒少し、鰹節の煮汁等、よき鹽梅に調して煮上げ、水嚢にて漉すなり。但かげを少し落すべし。（かげをおとすとは醤油を少しさすことなり）



秀歌集（卅六）

鹽井正男

紅葉ちる頃なりけりな山里の
　事ぞともなく袖のぬるゝは

○之は後拾遺集秋の部の中の歌にて、清原の元輔卿が暮秋をよみ給るなり○頃なりけりな。頃ではあるわいなーと感歎せし意なり○事ぞともなく、何事と云ふでもなく、たゞ何となくと云ふ意なり。

○一首の意はあー實に紅葉の散るころではあるはいなー、山里の此の秋のくれは、都よりは實に悲しく何となく身にしみて、何と云ふ事はなく頻りにほろ

にて、かなしと云はず、あはれと云はずしてよむまゝに身に染みる心地せられぬ。

○

あら玉のとしや神代にかへるらむ
　御裳裾川のはるのはつ風

○之は後京極攝政が百番自歌合の中に立春をよませ給へるなり○あら玉の年や。新玉は年の枕詞なり。神代に。神武天皇の前、神の世を知ろしめす頃を云ふ。かへるらん、らんは想像の言葉にて、だらうその意なり。みもすそ川伊勢の國度會郡にありて、伊勢の大廟に近き川なり。

○一首の意は、年がかはりあらたまる年や神代にかへるであるのであらうか、此のマアー御裳裾川に立つ此の春の初風はその意にて、御裳濯川の春の風、誠に常の春にあらず、神代にやかへるらむと覺え侍ると人も譽め奉れり、實に新年の意、のどかに、歌がらもめでたうよませ給ひけり。

○

てる月の影にまかせてさ夜千鳥
　傾くかたに浦づたふなり

○之も同じ歌合の中の御歌にて、冬の歌とてよみ給へるなり。てる月は光り輝く月なり。影にまかせて。影は月の光りの事にて、物の蔭にあらざるなり。まかせては其儘に從ふ事なり。小夜千鳥、たゞ千鳥の事にて、小夜ふかくたつものから小夜の千鳥とは云ひしなり。傾く方は、月の傾き入らむとする方にとの意なり。浦づたふ、浦づたひにつたはりて行くとの意なり。

○一首の意は、てる月の光りのまゝに從ひまかして、小夜の千鳥が月の傾く方に浦づたひに鳴き行くの意にて、傾く方に浦づたふなりと侍る、珍らしうも聞え侍りて、いと景色ある歌なり。

○

山河の氷るも知らぬ年浪の

ながるゝかけは淀む日ぞなき

○之も攝政殿が同じ百番歌合中に年の暮をよませ給へるなり。○山河、山の間に流るゝ川なり。氷るも知らぬ。山河は氷つて居るのに、其の氷る事も去らない年浪はとの意なり。氷るを山河の水、年浪のなみとにひきかけよみしなり。年浪は年の事にて、年は、丁度、川水などの流るゝ如く、絶えず巡り流るる故、なみによせて年なみとは云へるなり。流るゝは。流れうつる日影はとの意なり。よどむ日ぞなき。淀むは凹き處に水のとゞこほりとまる意にて、氷れどよどみとゞまる事もあれど、氷る事を知らざれどよどむ日もなく、絶えず流るゝとの意なり。

○一首の意は、山河の水は冬になれど氷りはりて、水も淀みとゞまれど年は水の如く氷る事も知らず、日影はいつもよどみとまる日もなく、絶えず流れて、遂て此の年もくれんとするまでの意にて、月日の

源氏物語講義（十六）

下田義天類講義
山川鵜一筆記

はかなく日比すぎて、後のわざなどにも、こまかにとぶらはせたまふ。程經るまゝに、せん方なう悲しう思さるゝに、御方々の御宿直なども絶えてしたまはず。唯涙にひぢて明し暮させ給へど、見奉る人さへ露けき秋なり。なき跡まで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかなとぞ、弘徽殿などには猶ゆるしなうのたまひける、一の宮を見奉らせ給ふにも、若宮の御戀しさのみおぼし出でつゝ、親しき女房御乳母などを遣しつゝ、有様をきこし召す。

以下は更に段を改めて　陛下の御息所を追慕し給ふ事を叙するなり。

○はかなく日比すぎて後のわざなどにもこまかにとぶ

を叙するなり。

○はかなく日比すぎて後のわざなどにもこまかにとぶらはせ給ふ　御息所卒去の後は、

七日七日のとひ弔ひも、こまかにおそむされし由なり。並々の後のわざなれは、大方は、初七日、三七日五七日（即三十五日）、七七日（即四十九日）位の時々を營みて、跡は多くは省畧するが常なれども、陛下にはせめてもの御心なぐさに、唯法會をのみ事とせさせたまひて、四十九日、百ヶ日までも、一々細に御弔遊ばされたる由なり。

○程ふるまゝにせん方なう悲しう思さるゝに御方々の御宿直もたゆてしたまはず　去るものは日々に疎しとか言ひて、日を經るまゝに、悲しかりしことも忘られゆくは人情の常なるに、陛下はそれとはかはらせたまひて、時日を經過すれど、經過する程、次第々々にこし方を追想せさせ給ふ御心のみ募らせ給ひて、致し方なきまで悲しく思召さるゝが故に、女御更衣の御方々の、夜の御伽をもさせたまはぬなり。とのゐは殿居の意にて、宿直することなり。されど、この頃の使用語には、唯寢るといふのみの意に用ゐたり。さて、御宿直もしたまはず、は自他のとゝのへ少し穩ならず。心の進みたまはぬが故に、女御更衣の御宿直もせさせたまはぬなり。いひかふれど、女御更衣たちを、夜の御殿へも召し近づけたまはぬなり。かくては、常平生は、女御更衣の方々の爲に陛下が宿直し給ふやうにていかゝはし。常時は唯寢るといふのみの意にも用ゐし故に、かゝる詞づかひも折々有りしかども、猶、御方々の御宿直もせさせ給はずとやうにある方當然の用法なり。

○涙にひぢて　涙にひたされてなり。

○見奉る人さへ露けき秋なり　陛下の斯樣に御愁傷おそむす故に、その御けしきを見奉る近侍の女房たちまでも、思はず袖をぬらしたりとなり。露けき秋なりとは、内裏は悲嘆の涙の晴れやらずして、常に濕りがちなる由を、時恰も露深き秋なりし故に、露けき秋なりとは云へるなり。さて、この露けき秋なりといふ句は、内裏の濕りがちなる由を形容したるの

みならず。更にこの一句に依りて、年月の變遷し行くことをも知らしめたり。そは、この初に「その年の夏、御息所はかなきこゝちに煩ひて」といひて、御息所の煩ひそめしは、源氏君三歳になりし年の五六月頃なりしことを知らせ、それより病氣つきて死するに至り、遂にこゝに「はかなく日頃すぎて後のわざなどにも細に弔はせ給ふ」とあるにて、其の後五十日が百日ばかりは經過したることと察せらる。されど、今は恰も八月の初旬中秋の頃とみて能く協ふべし。次に「野分たちてにはかに肌寒きゆふ暮の程、常よりもれぼし出づること多くて、ゆげひの命婦といふをつかはす。夕月夜のをかしきほどに、いだしたてさせ給ひて、やがてながめおはします」とあるを以て考ふれど、八月十日頃のことゝ覺ゆ。袖もぬるゝばかりの露は、秋をもて第一とすれど、露けき秋

る文法とやいふべからむ。源氏の年立は、全篇にわたりて、かくの如く年月の經過し行くさまも、何年何月に云々の事ありとやうに更にきはやかなる筆を用ゐずして、行文中何となく必これをほのめかしたり。其の筆法の整然として亂れざることは、恰百顆の白玉を、朱糸銀繩に貫きたるが如し。疎なるが如きは却りて密なる所なり。これを悟らずして、等閑に觀過し去るが如きは、未讀者の目の、作者の意匠に到着せぬが故ぞかし。能々注意あるべきなり。

○なき跡までも人の胸あくまじかりける人の御覺えかな

弘徽殿などのれもはくなり。陛下には日頃へたまひても、御息所を忘れ給はずして、他の女御更衣たちを召し近づけたまふこともなきゆゑ、弘徽殿の女御、後涼殿の更衣などの方々の申すには、桐壺更衣はかやうに帝の御心をとらかして、死んだの

胸あくまじかりけるは、胸の飽きたらぬなり。心中不満に堪へざるをいふ。人の、とあるは、上なるは弘徽殿の女御などの人々の目にかけていふ。次なるは、帝を指して申すなり。嫉妬深き人の眞相、寫し得て妙なりと云ふべし。

弘徽殿などにはなほゆるしなうのたまひけるなどといふ言葉は多くの事のある時、其の主とある物をあげて他を省略する時に用うる詞なり。故に、弘徽殿などゝある内には、彼の御息所に、その曹子を奪れたりし後涼殿の更衣の如きは更なり。其の他御息所に恨を抱ける女御更衣の方々をも含まれたるなり。其の内にて、弘徽殿の女御は。右大臣の御女にて。東宮の御生母に御在しませぞ。女御更衣の方々の内には。最 權 力の強くおはして、源氏方とは、此の後も常に敵方となりておはしませぞ、弘徽殿の女御を旨と掲げたるなり。なほゆるしなう 猶は上の、見奉る人さへ露けき秋なりとある句をうく。 物の心を知れる人々こそ、陛下に同情を表して、共に袖をもしぼりたれ。弘徽殿などは、悋氣嫉妬の張合づくより、さはなくて、死んでの後まで、猶ヤッパリ疾んだとなり。ゆるしなう、御許容なきなり。一步も假借したまはぬなり。

○一の宮を見奉らせ給ふにも云々 陛下の御心中なり。一の宮は第一の皇子、即弘徽殿女御の御腹におはしまして、只今は皇太子とおはしまし、後に朱雀院と申し奉る御方なり。見奉らせたまふ この句は兩わかめの詞なり。「見奉る」は皇太子にかゝる崇敬語「らせたまふ」は陛下にかゝる崇敬語なり。作者が御兩方にかけてわかめむとして用ゐたるなり。

○若宮の御戀しさのみ思ほし出でつゝ

若宮は光源氏の君なり。皇太子殿下は光源氏君よりは二歲ぞかりの兄君にて御在しますなり。この皇太子を見奉りたまふにつけても、陛下が御最愛なる御息所の忘形見、即源氏君の二條の里亭にわひ住居

したまへるを戀しがりたまふはことわりなりといふべし。思ばしいでつゝ　つゝといふ助辭に二樣の意味あり。第一はながらの意　一方にかくありつゝ又一方にかくあるといふ時に用う。第二はてといふほどの意。同じことを重ぬる時に用う。つゝといふもてといふ辭のうつれるなり。こゝは第二の意味なり。即、思ひ出でゝ思ひいでゝの意なり。思ひ出でたまふたび毎に使者を遣し給ふなり。御使者の、二條の里亭を御訪問したることの一度ならず屢なりしことを知らする辭なり。

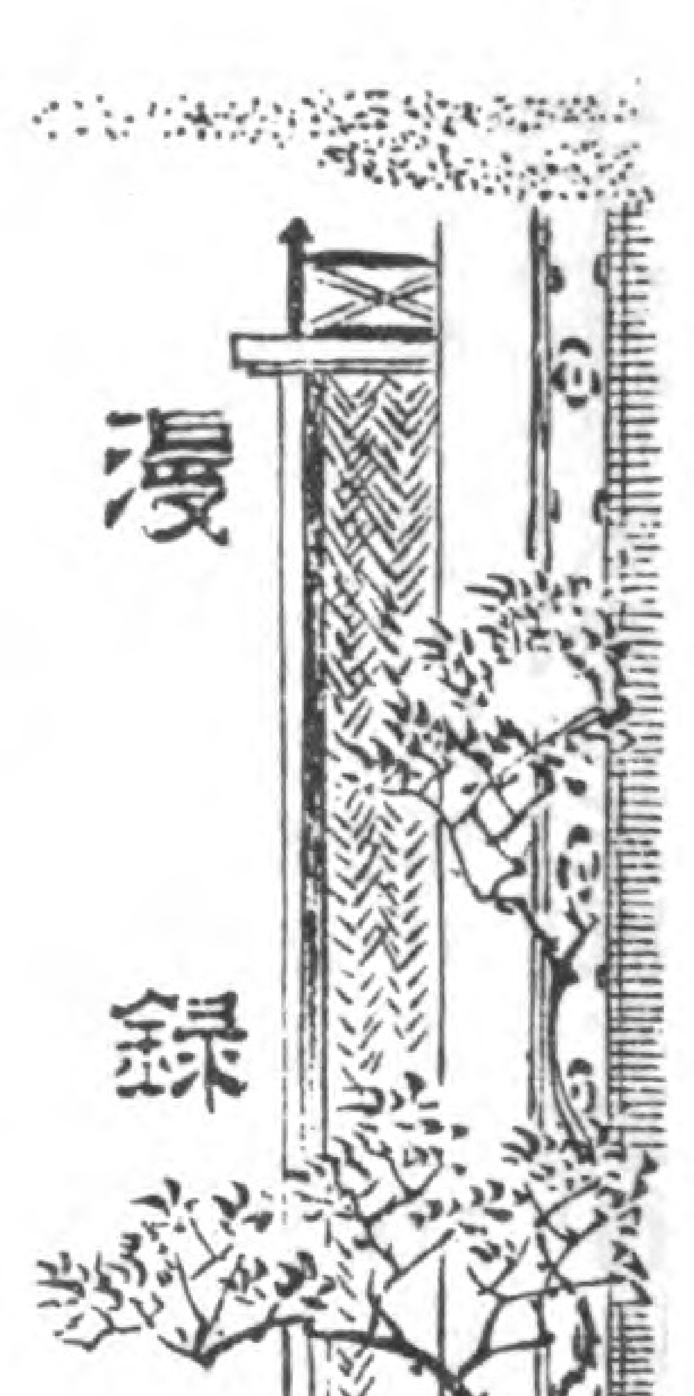
○親しき女房御乳母などをつかはしつゝありさまをきこしめす　時々陛下には、親しき女房、或は御乳母などを遣したまひて、源氏君の御樣子を御尋ねあそばすなり。御乳母は源氏君の御乳母なり。昔は貴人の乳兒を育つるには、多くの乳母を撰びてかしづ

多ありしかど」といふ詞のあるをもて察するに二人よりも多かりしものと思はる。さて乳母は其の母の養育者なれど、常に其の側近くあらざるべからず。されど、數多き乳母は必しも乳を差上ぐるものゝみにもあらねど、此の時の源氏君の御乳母も、悉二條の里亭へ附き添ひ行きしにはあらで、猶朝廷に居殘りたるもありきと思ゆ。その居殘りたる御乳母
今つかはしたまふなり。ありさまとは源氏君の御有様なれど、廣く二條の里亭の御ありさまと見るも可なり。

以上を一括して申せむ
敢果なく日子は經過して、後々に營むべき追善供養等に於きても、更に事を省きたまはず、懇切に御
問遊ばされた。人情の常として、時日を經過すれ
經過するに從ひて、疎遠になりゆくが習なるに、

りて、他の女御更衣をも召上げて、一向に夜の御伽をもさせたまはず。唯涙にのみ御袖をぬらして、一日二日と明し暮して御座る故に、御側に在りて御様子を見奉る人々まで、れきわまる秋の露のごとく袖をぬらした。斯くの如く主上は御息所のため。朝夕悲嘆にかきくれたまへる故、弘徽殿などの一派は、死んだ後までも、吾々の胸のさつぱりせぬほどの彼の人の思はれ方であつたわいといひて、陛下に御同情を表したまはで、猶やはり假借もなく仰せられた。さて、陛下は、第一の皇子を御覧あそばすにつけても、光源氏の御戀しさが思ひ出でられて、其の度ごとに親しき女房、御乳母たちを、二條の里へ御遣しなされて、御様子を御尋あそばした。となり。





主從心得草（上編續き下之卷）

諏訪忠元寄贈

詩經にいわく、始めあらざることなく、終あること鮮なし。とあり。

此心は、誰にても、始めの内はよく働らき、直性にてよかりしが、後には其心を失ふて、そろ〳〵我儘氣隨が出て、自由をなす、悪事ありても差付て異見する人もなく、我しらず大あやまりを取出來し、終に身をほろぼす、是を終りある事なしといふ、店々の手代なども、丁稚小者の内は、難義もあり。心にかなはぬ事ありても辛抱するが、手代番頭となると、直に私ありて不首尾となる、爰に於て丁稚小者よりの難義の功、一

時に亡ぼす、殘念なる事也。何卒心をせめ、身を愼んで終り迄辛抱いたすべし。これを終りをよくするといふ。此終りをよくする人がないゆへに、聖人も氣をつけ、御世話やき給ふ也。誰にても始の心ざす所はよけれども、末に至ると始の志ざしがくじけて、得仕遂ぬもの也。初の卷の歌のごとく「奉公に來た日の心いつ迄も忘れず念をいれて仕へよ」此歌の心を忘るゝ事なかれ。丁稚小者の時の辛抱を無下にする事なかれ。一切の諸君子、終りをよくする事を覺てれ〳〵。

孟子のいわく、自わたわずと謂者は自賊者なり。此心は、人により能身持よき事は出來ぬといふ人あり。かやふの人は、我手に我身を賦ひやぶるといふもの也。忠義せよ私をするなと、聞ても、我は出來ぬといふ人は、苦しみのしたき人なり。外より福徳を耗し、貧乏させるにあらず、皆己れより好んで貧乏すると見へ

も、己が勤むべきをよく勤め、道をふみ義理を正しく行ふべし。歌に、

　外からは手もさへられぬ要害を
　　内からやふる栗のいがかな

此歌をさとり玉へ、いわゆる自暴自棄の人なるべし。兎角上たる者は下へ無理をいふ筈のやふにおもひ、慈悲心は少も心掛ず、短氣いふりにして、我榮耀安樂を好みて下の難澁をかまはず、又下たる者は忠義をわすれ、上をかすむるを職分のやふに思ふ、是何といふ間違ぞや、かやふにては、上下で和合せず、國家の安全は覺束なし、異見狀にいわく、主人は無理としれ、下人は不足としるべしとあり。此心は、我主人は何にもかにも無理斗りいふてこまると思ひ、又主人は我家來は何の役にたゝぬ、埒が明ぬと不足に思ひ、又家來は早く出世させて呉る主人がほしひと思ひ、又主人は萬

々役に立ぬ所ありとも、それは少しも咎めぬ事也。身をかへり見ば、用に立ぬ所多かるべし。まして家來の事なれば、其筈のことと了簡して使ふべし。又家來たる者は、手前の立身出世は心にかけず、唯主人の為に宜敷事ある様にいたすべし。たとへ何様のことありても、主人をうらみなど決してすべからず。若主人より情なき事あらば、我忠義の足らぬゆへと思ふべし。かならず外をうらむること有べからず。是天の道にて、人として通るべき所也。初の巻の歌の如く、辛抱と堪忍との秘傳を以て、奉公をよく仕遂らるべし。此ことをよく忘れ深く心得よ。此外いとけなき時奉公に出るに、其品三ッあること、又、喜、樂、愁の三ッ、人たる者しらずんばあるべからず。また樂んで苦ある事、又三ッの不思儀あることは奇々妙々にしみの來らざる秘傳、金の生木の植様のことなどあれど、余り長言故、後編にゆずり、爰に筆を絶す。

（上編完）

拗論

此一篇は吾舊藩主阿部家先代椋軒正精公の撰述を聞傳へたり。今寫して貴社に送る

備后國福山　龍鱗窟主

拗論自序

拗はもとるとよみて世に云もんちなることなり。〇と ると同じ、世間の事、夏は熱きもの、冬は寒きものとのみ心得たるもの多し。然れども夏もさむきことあり、冬も暖なることあり。白きとみるに黒きあり、黒きと思ふに白きことあり。されど、片々よりてみるときは、古語の琴柱に膠するの謂にて、世に云杓子定規なることもあらん、我此論は、たゞ世の人にもちひたるにはあらず、夏の中に小補を仕立させ、冬の間にかたびらを忘れざらん為の戒として、我獨居の坐右の銘となすのみ。

一　緒水館主人題

拗論

遠ㇾ所ㇾ好而近ㇾ所ㇾ忌

我好む事は日夜心に絶ぬゆゑ、忙しき中にも是を爲し、我嫌ふ事は隙なるときもなすことなし。されど、我好むことは、何事によらず、萬に押移りて、人を勸め入る心有て自然と慢心を發し、好むに就ては花美潛上なることも出來るものにて、是程の事はなしても苦しからずなど、手前勝手の道理を付けなす故に、制禁をも犯すやうなることもありて、竟には吾身の害をもとむること有べし。飲食の類なども、諺に云得食毒なしなど、心得、飽までのみ食ふ故、脾胃を損じ、病をもとむるの禍あり。我好まぬ事はよきことにても近ぐなすことなし。因て好むことは遠ざくべし。さあらど、兩事ともよき程になるべきなり。我好まぬ事をも近けて、日夜に是をなさんと心がくべし。左程にしてもすぐる程には至るまじ。

急ニ緩事ニ而緩ニ急事ニ

ることとあるべし。又是は火急なることぞと思ふならど、隨分心を落しつけてゆるやかになすべし。あわてさわぎては物の損失も出來、人使ひも二重になることありて、却て遲くなるべし。昔、森蘭丸、右筆の者に向て、是は急ぎの御用なり靜に認めよと申たるとや。又古歌に、

武士の矢はせのわたし近くとも
いそがはまはれ勢田の長橋

重レ常而輕レ變

常の事は人々輕卒になりやすし、あまり手馴たること故に、うかめたてをして間違も出來ることとあるべし。又常になき事なれど、人に氣をつけ心を用ゐて評議をなす故、却て間違なく、事調ふ物なり。されども、是を麁略にせよと云には非ず、格別に驚き恐れずとも、事なるべきなり。小兒の手習をするに、草紙にかくと

り。人の病も、持病などは、其身も醫師も輕はずみに心得、常になき病は、聊の事にても其身も醫師も驚し早速に服藥し、療用手ぬけなし。持病とて油斷すべきに非ず。持病より大病に及ぶことあるものなり。

貴レ舊而賤レ新

新しきを悦び古きを厭ふは世の人情なれども、古來より爲し置ける作法規式を始として、器物の類に至るまで、古きを用ゐるに利あり、新しきは一旦人の目を悦ばすやうなれども、よく〳〵考へくらぶれば古きに及びがたし、法制の事は猶更なり。古語にも、人は古きを用ゐ、器は新なるを用うとあり。其器とても、昔の品は木地も塗もよし、是は人情風俗のすなはなる世になせる物なればなり。當世は只一旦人の目を奪ふのみにして調練しなせる物、多くは木地も塗も昔に及ばず、新しきを用うとある器物さへしかあれば、況や其外人の政法のこと、四海普通の品は古の道を捨べからず。利不レ十不レ易レ業 功不レ百不レ變レ常と古人も申れきたるなり。

疎レ近而親レ遠

縁遠くなりたる人は疎略になりやすきものなり。遠き縁とても隨分心をつけて義理の欠けざる樣にすべし。近き縁は云に及ばず、親み厚く交ることなれば、隨分失禮なきやうに心掛べし。まあり親みすぎて、出會なども日々のやうになりては、自然と飽られ、相互に内證のことまで見さがされ、陰にては誹謗にあふこともあるものなり。諺にも、遠きは花の香と云ふこともあり。餘り心易たてするは宜しからず。只實意を盡すべきなり。

抗レ尊而下レ卑

我より目下の者には隨分と謙遜して丁寧を盡すべし。目下の人の心にては、いかにもかたじけなきことと哉、我は輕き身分なるを、慇懃に扱はるゝよと、悅て思つくすべし。一役など勤る人は、別て心得あるべきことなり、目下とて手高くあしらひては、其人の心にて

は恨み嘲ることもあるべし。我より位高き人には失禮をせぬやうにすべし。格別にへつらひ敬ふに及ばず。

擇レ智而用レ愚

智に、賢智あり、佞智あり、佞は忠に似たれども、古人も分ち難しと云り。されど、才智ある人をばよく〱擇びて使ふべきなり。愚に、愚昧あり、愚直あり。愚昧は論ずるに足らず、愚直なるものは心の操正く守り、氣遣なき人柄なり。然れど、愚も用うる取柄あり。智も捨る所あるべし。

火愼二勢微一

火の用心と云こと勿論大事のものなり。されども、大なる火は恐るべからず、燒亡あらぬ夫々の手當してふせぎ愼むべし。扨圍爐裡の火は焚人是に向ひ、火鉢の火はあたる者是に對する、是恐るゝに及ばず、只恐るべきはわづかの火なり。烟草の吸殼、線香の火、蠟燭の

刀用二不利一

刀劍は必しもきれものを好むに及ばず。是一身の守りなれど、鞘をはなれぬを貴とすべし。されたりとも、村正の如きは人を害すること多し。其故いかんとなれど、名匠の精神をこめて、きれよ通れと鍛へたるもの故に、刀劍の精神、おのづから人を害するに至るならん。然れど、いかにも淸らかに、銘から宜く吉相ある刀を帶すべきなり。戰場とは事かはりて、治世に帶する刀は、人を害するの相あるは忌むべきなり。然れども、不慮の事出來して、是非なく殺害に及ぶとあるは、皆身の守あらざる故なり。

弓欲レ弱馬欲レ遲

分の厚き弓は非力の者取扱ひ難し。假令かなりに取はす者とても、力行屆き難き時は、其術施し難し。弱弓なりとも、左右の手法よく調ふときは、遠きにも

昔、八幡太郎は、幼弱の頃より射藝にすぐれ玉へり。常に弱き弓を用ゐ玉ふ、禁庭にて弓をためし玉ひしに、鎧を重ねて射ぬき玉ひしが、弓はよわかりけるとや。

馬は早きのみを詮にしては、假令一旦の勝をとれども、馬つかれ人くるしむ故に、あとにて折返しの用にたち難し、假令人よりおくれて、一旦はおとりたるやうなりとも、馬の息合を考へて、つまづきたふるゝの患なき故に、百里をはせかへりて、又地廻りの用事も、乗馬にて辨ずることとなりやすし。天明の頃、御小姓を勤めし角南氏、鎌倉へ遠乗仰付られ、外に大勢ありて、互に遅速を爭ひたる中に、此角南氏は、別に夜に入りおそく歸りたる故、御機嫌宜しからず、御叱りありて其遅刻のわけを御尋ありしに、角南氏愼て申されけるは、遅刻のことは誠に恐入奉りたり。然れども、私の乘たる馬は、今にても御召遊ださるべきことありとも、隨分御間に合申べし。息合等に考て、あとの御用に立べきやうにのみ覺悟仕たる故、かく遅刻仕りたり。牽出させて上覽あるときに相しれ申さん。とある故に、牽出し見玉ふに、隨分用立べき勢なり。餘の人々は我一勝にせられたる故、漸く品川あたり、又は芝の邊までのり、夫より牽せて歸られたるも、其馬は中々即刻の用には立難き躰なりしに、角南氏の乗たる馬は丈夫にてありしかど、御感に預りしとかや。

娶不レ擇レ美不レ厭レ醜

妻は人倫の第一にして、至て大切なるものなり。夫婦ありて父子あり、父子ありて後に兄弟あり、兄弟ありて後に朋友あり。されど、色情に耽るべき爲に娶るものに非ず、然れども、世の人婚姻を論ずるに、先其婦の美惡を聞きこれを定め、媒もつくろひ飾りてうつくしきを風聽するなり。素より深窓の處女なれど人前に出ること少く、彼の媒口と云もの信するにた

らず、形ぞかり美麗なれぞとて、心もさあるべきにも非ず、容治は婬を宜すと云古語もあれど、顔色によつて害あることもまゝ多し。夫婦さし向にて人つかひも少き族は、主用私用にて留守がちなるものなれぞ、其女の性によりて、密通などもしやすく、且は我美貌にはこりて、夫を蔑如することもあるべし。醜は人の嫌ふものなれども、心ざまさへ正しくて、婦の徳にかけたることなくぞ、家内を治め、世嗣をまうけ、縫紡の業、飲食の世話のみにて事足りぬべし。身輕ものは、是をこそ第一のとりゑとすべし。輕き人にも限らず、既に、昔、齊の閔王の后は、宿瘤とて桑を摘て賤き醜婦なりしを位にそなへられしとかや、わさ〳〵醜くきを求めよとにはあらねども、又必しもかはぞせのうつくしきになづむべからず。

寛政九年己丁仲夏

老子曰、正言若反。此心は天下の正論は、一世の

することと反て非に、安とすることと反て危く、一切の事、前後左右上下相反するなり。是道理、人或は口にいへども、心實はしらず、唯聖知の人のみよく斯に觀ることあり。吾が君、一日此御著述の書を出して示し給ひぬ。愼てこれを披きて熟讀し、始て正論反せるが如きの實を知れり。道在レ爾而求ニ諸遠ニ事在レ易而求ニ諸難ニ 彼の大道は、日用平生の間に在て、淺近なるやうなれど、反てこれを忽になし、かたく行ひかたきことを求、是身を終るまで勞すとも功なかるべし。聖語に、負たる兒を三年尋ると云へる風情なり、右に手あらぞ左を見るべしと棋經にいへる如く、樂は苦の種苦は樂の種とおもひて、己が私に克ち、禮に復らぞ、亦此御書の旨に叶ひて、過てること寡からんか。嗚呼、永く此御書を寶とし、斯御言葉を事とせんことを思ふ、吾子々孫々これを、思へや。これを思へや。

新瓦（續）

咨、汝芳子。今春以來。汝已親我如父矣。而我未能愛汝如子也。爲有媿焉。何以知之。鄉也。吾就汝之與汝父寢。雖夜寒衣薄。而未嘗啼。及與我寢。則雖煩亦啼、何也。蓋汝父豈不欲輾轉反側以適已哉。恐其動汝。是以不敢。待汝自動。然後從之。我則不然。雖黽勉爲之。而弗能久矣。此其所以異也。又汝父未嘗怒汝。汝之有過也。厲其聲。正其色。以警焉爾。故叱汝。未及慴詟。汝不及痛。是致汝也。夫善致子者。寛裕溫柔。施之有漸。自細至大。自淺入深。始於胎敎。終於顧命。不躐等焉。汝父不學無術。其安閒之。然而吾見其徃矣。可以望其來也若我怒汝。則自中心達於面目。叱汝必慴。笞汝必痛。西家之事。其可爲也。吾甚媿之。夫唯媿之。以弗爲也。雖則弗爲也。然其所以爲者存焉。無乃與汝父霄壤乎。我猶然矣。疏於我者。可知也。嗚呼汝之無聊。誰將與儔。既不知母。又無兄弟。且不得亟見父。而唯我是賴。詩曰民莫不穀。我獨何害。其汝之謂乎。」

咨汝芳子。我亦羇旅。餬口四方。於今十年。未必不凍餒以死也。而迎汝者。欲使汝父姑紓汝死。然後漸爲之計爾。安能終完汝乎。是汝父之愛未弭也。而其愛大於前日哉。何以言之。汝既親我。又無疾病。笑言啞啞。色容日盛。且諸君子之臨吾廬者。閔汝幼客於斯也。有賜汝衣帶者。有賜汝書圖者。有賜汝菓子若木偶者。有顧汝撫汝視汝如子者。有數使人迎汝而賜汝飲食者。此豈汝之所敢望哉。比相摸時。實爲天淵。汝於是乎氣志佚。漸以驕恣。欲行遠也。欲升高也。於衣有所恥焉。於食有所擇焉。亂我籩豆。遷我書策。毀我縹瓷。拔我錦葵。使我不遑跪處。吾雖爲之艴然作色。而不恤焉。提我耳。彈我鼻。視我如

享和紀元辛酉夏之月　臣　太田方　謹志

偶人。然汝之未可誨也如此。若欲待其可諭而後誨之。則吾與汝父。墓之木拱矣。其爲憂也。何啻饑寒。吾故曰。大於前日哉。汝能讀書。以考吾言。然後思汝父之德。則將知其眞。昊天罔極。雖百汝身。然未足以報之矣。汝其念哉。毋貌貌爾。毋訑訑爾。愼而德。祗而載。勿從非辭以廢吾言哉。及爲人婦也。順而舅姑。敬而所天。宜而室家。使而子孫有所矜式。則汝父之憂。可得而解焉。然後。於其德。纔爲無違。此汝之孝也。

否汝芳子。吾聞之。君子樂不忘憂。安不忘危。是以能安且樂。小人反是。吾將以君子期汝。汝亦不以自期乎。曰汝父之來與我謀也。離汝四十里。又無汝外祖母之保護汝也。則嫗何憚而不遑其虛乎。此乃委汝於狠也。夫嫗陰虐

苟無以爲驗。汝將謂我誣人。而不之信。故極言之。汝之初至於斯也。吾欲察西家之事。故問汝嫗何爲。汝乃順目切齒。以爲其怒已狀。且目指其頂及手足曰。此嫗所拏。此嫗所爪。吾熟視之。其瘢痕猶有存者。其驗一也。孩提之時。記性未定。其於前事。甚喜者記。甚怒者記。甚懼者記。不然則否。今汝所記於嫗。爲多且戲汝曰。嫗來嫗來。則變色矣。無乃以甚畏其虐之故乎。其驗二也。夫愛嬰兒者大氐不名其物。或爲之貌。或爲之聲。以開喩之。不然則重言之。手曰手手。乳曰乳乳。寢曰寢寢。起曰起起之類是已。若夫謂鼓塡塡。重言其聲也。謂食甘甘。重言其味也。謂溺津津。重言其貌也。凡如此類。皆將審其實以諭之。豈所苟哉。是謂幼。幼若賤惡之。則不然也。嬰兒化之。故

驗三也。我之使汝父迎汝也。欲其速行。故言之窮苦。如親見之。汝父未之必信。及至於西家。而後顧我言。則如合符節。其驗四也。旣之蚩。莫非嫗也。以此知彼。何難之有。詩不乎。他人有心。予忖度之。況嫗之心。我固有之。忖度之。是執柯以伐柯也。夫豈遠哉。其驗五也。推此五驗。以考其實。而比諸狠。不亦宜乎。吾不欲言之。雖彰其惡也。雖然。是不言。汝之患不著。汝之患不著。汝父之所以汝者。不可得而見焉。則雖責汝以孝。將惟庸罔念。又安知其愛且危而不忘哉。若乃斯言宿怨於西家。則非吾所以言之意也。之愼之。況嫗之鞅鞅。吾與汝父。爲有責。豈得其歸咎於彼乎。汝之所遇。命也。其不遇。亦命也。不知命。無以爲君子也。」汝芳子。吾欲汝之讀書也。苟不讀書。無以爲。無以爲娛。求之不已。能無過乎。且吾所以語汝者。亦唯讀書而後可考也。不然。非徒無以爲娛。又將不自知其初矣。今之婦人。雖或讀書。然其書皆國字方言。非吾所謂書也。於讀之乎何有。吾未見其眞能讀書者。姑以所聞有五人焉。非上通、內史桃。其三人則吾忘之矣。今欲以汝六之、豈不難哉。吾舍其易。而難是圖。所以敬汝也。人之言曰。婦人女子。抱兒爲多。焉用讀書。吾敢以此待汝乎。夫載籍極博。害讀害否。譬諸木焉。詩書爲根。論語孝經爲幹。左傳國語史記漢書其枝葉華實也。是爲綱領。不可不讀也。其餘不必讀焉。不必不讀焉。以成德者上也。以知恥者次也。以爲娛者又其次也。吾豈責汝以其上者哉。雖然。以爲娛之至。可以知恥。知恥之至。可以成德。吾豈不望諸汝哉。吾聞之。牝雞無晨。陰不侵陽。女之節也。無非無儀。唯酒食是議。婦之分也。安分守節。謂之懿德。照之脩之。是爲善讀書矣。

咨汝芳子。君子之愛子也。敎之以義方。弗納於邪。

邪之所自。或在於親。可不愼與。今世之人。大氐不教子。其教子者。則已甚矣。往往責駑駘以十里。不死則病矣。況無諸己。而求諸子。強聒不舍。繼之以怒。是犯義易方也。將何以教之。然而不納於邪者鮮矣。夫人品不齊。上下差池。其上者不待教也。其下者不可教也。唯中人不可不教也。且以文王之子言之。武王周公爲上。非教而然也。管蔡爲下。非不教而然也。其餘則若而人。是教而然也。不教豈能然乎。是爲中人。中人又有差。上下亦然。譬諸草木。區以別矣。而文王之教之也。如時雨化之。故被其澤。或多或少。或淺或深。皆自取之爾。安得而齊之哉。由此觀之。武王周公。雖無文王猶興者也。若管蔡。則雖有文王。亦無如之何矣。凡教子者。可以見其則也。詩曰。儀刑文王。萬邦作孚。汝其識之。

然。則霄壤耳。蓋偉元之不得事其親也。與作此詩者同情而又甚焉。雖然天實爲之。謂之何哉。我則異於是。雖得事親。而不事焉。高擧遠遊以失時矣。及讀書考文。以知其過。而欲改之。則親不在矣。於是乎泣。無以自慰。豈得與王比乎哉。吾將使汝三復是詩。以爲則焉。庶無與我同乎。夫事親。雖男女異宜。然其欲無父母詒罹已。無悔焉。則同也。其第一章曰。

蓼蓼者莪。匪莪伊蒿。哀哀父母。生我劬勞。

孝子之詩。是篇爲最。是篇之義。是章爲要。夫舜之孝。天下大之。而舜自視欿然。所以爲舜也。作此詩者。其庶幾乎。比之於莪。實其蓼蓼者也。而自以爲蒿。亦舜之心哉。蓋有是心。斯有是言。故曰。哀哀父母。生我劬勞。且讃親之德。以昊天罔極。然後萬世莫以尙焉。而凡事親者。皆受其賜矣。舜爲

[illegible]敎子者。可以見其賢也。詩曰。儀刑文王。萬邦
作孚。故其謂之。
吾以芳子[illegible]。請至蓼莪詩。未嘗不[illegible]
[illegible]

[illegible]之心哉。豈有是心。斯有是言。故曰。
哀父母。生我劬勞。且讀親之德。以昊天罔極。然
萬世莫以尚焉。而凡事親者。皆受其賜矣。舜爲
至孝。是人次之。其第一章曰。
蓼蓼者莪。[illegible]

夫親之憂子也。日新月長。子之幼也。血氣未定。師傳未訓。聞見未多。猶有望焉。及其壯也。將唯其疾之憂。若猶未也。其何望乎。身既衰矣。子又如是。將以憂終。豈得不勞瘁乎哉。蔚大於蒿。勞瘁甚於劬勞。蒿爲幼弱。蔚爲壯大。可以見其辯矣。其第三章曰。

缾之罄矣。維罍之恥。鮮民之生。不如死之久矣。無父何怙。無母何恃。出則銜恤。入則靡至。

我生之初。唯親是賴。親之衰也。唯我是賴。我以親存。親以我終。是我與親。相爲命也。親日衰。我日壯。親不自憂其日衰之憂。而樂我日壯之樂。我敢不憂親之憂。而自樂其樂乎。是以孝子無獨樂焉。有獨憂焉。夫舜之憂親不與焉。所謂獨也。天下之物。無以解之。及與親偕。而後能樂其樂也。將以忘天下。天下猶可忘。而況其餘乎。作此詩者。親不在焉。亦獨也。故自以爲無父何怙。無母何恃。出入惸惸是爲鮮民。（無父母之民之曰鮮民）鮮民無樂。不如死也。極言其憂耳。嗟乎不能憂此憂。安能樂此樂。其所樂者。皆可憂也。其所憂者。不足憂也。憂孰甚焉。其第四章曰。

父兮生我。母兮鞠我。拊我畜我。長我育我。顧我復我。出入腹我。欲報之德。昊天罔極。

生我鞠我。爲綱。自拊我至於腹我。爲目。目下有目。綱上有綱。綱無始。目無終。非昊天。無以稱焉。此章之義。縝密宏博。實爲罔極。請擧其一。以爲準焉。夫親之拊我也。或笑焉或泣焉。或歎息焉。皆有其容。有其色。有其聲。有其所由。然淵淵而湊。源源而來。靜言思之。懷抱之樂。膝下之歡。其宛然也。餘皆類此。故古人謂親既沒者。若誦是詩。而不流涕。非人子也。豈不然乎。其第五章曰。

南山烈烈。飄風發發。民莫不穀。我獨何害。

曩者。親之存也。南山是望。飄風是聞。以相歡也。之烈烈。之發發。以爲娛也。今則已矣。豈不悲哉。夫

孝子之歡。莫レ大ニ於事一レ親。其悲莫レ甚ニ於失一レ親。既有ニ此悲一矣。然後思ニ其所ニ嘗歡一焉。如レ之何其不ニ滋甚嗟一乎。方有ニ此歡一者。不レ可ニ以不一レ愛レ日也。其第六章曰。

南山律律。飄風弗弗。民莫レ不レ穀。我獨不レ卒。

有レ始有レ卒。爲レ穀。乃養レ生喪レ死。無レ憾也。夫民不ニ皆穀一。而云レ爾者。豈思レ古乎。是人也有レ始而已。雖レ欲ニ其卒一不レ可レ得矣。天也。若夫衆人無レ始無レ卒。雖ニ或有一レ始。而不レ能レ卒。雖ニ或能卒一。亦未レ足ニ以補ニ其始之闕一焉。人也。天人之分。君子擇焉。吾又聞レ之。善事ニ父母一。爲レ孝。夫謂ニ之善事一焉。則可ニ以見ニ其所レ及者廣且大一。非下唯於ニ父母之軀一言上レ之也。天子之於ニ天下一。非レ此不レ平。諸侯之於レ國。非レ此不レ治。其致レ人也。此以貫レ之。蓋君不レ君非レ孝也。父不レ父。非レ孝也。兄不レ兄。弟不レ弟。夫不レ夫。婦不レ婦。凡非レ禮非レ義者。皆非レ孝也。何以言レ之。有ニ一於此一。則父母不レ悅。父母不レ悅。可レ謂ニ之善事一焉乎。是故在レ彼無レ惡。在レ此無ニ間然者一。唯孝爲レ然。善之著也。美之會也。德之[illegible]也。依ニ乎宗一。則不レ亂矣。取ニ乎會一。則無レ闕矣。觀ニ乎著一。不レ眩矣。汝其勉レ之。嗚呼我之與レ汝語也。日暮途[illegible]唯恐レ失レ之。故於ニ其言一。曾不レ願ニ辭之不一レ逮也。他將ニ爲レ汝笑而掩ニ面於地下一。吾於レ是乎且懼且喜。其[illegible]者吾有レ罪焉。其喜者汝頗啓明。將ニ能讀レ書稽レ古以察ニ我之非一焉。然後吾言可ニ得而笑一也。　（未完）

尼將軍（三）

安藤正次

此の時にあたり、時政また京師に在番して之を知らず其の期滿ちて國に歸らむとするや、伊豆の目代平[illegible]隆と道を同じくし、之と其の長女の婚を約す。然るに歸來之を計れど、意外にもその長女は既に、賴朝の[illegible]通ずる所たり。時政是に於て大に驚き、頗る當惑のた[illegible]ひわり。即ち竊にれもふに、賴朝今斯く僻陬に流離[illegible]

に、到底永く池中のものなるべからず、時運會して
雲の機あらば、必や一躍遂に天下を心に任すべき潜
龍たるべきもの、我がかねて望を屬する所實に是にあ
り。此の人今わが家と深緣を結ばむとす。若よく之と
托し、事成るを得ば冀くばまたわが家を興すことを
むか。然れども、今目前の難事といふべきは、既に
が長女の婚を約せしこととなり。此の約を破らば、彼
まさに源家の流人にあつしとの故を以てわれを責む
し。然りといへども、之を賴朝より奪はむはわが本
意にあらず。あゝ是を如何がすべきと、反覆熟慮の末
計を案じ、陽に怒りて賴朝とたゝしめむとす。政子
そかに、遁れて賴朝により、相携へて山に隱る、時
即敢て追跡せず。是の故由を以て深く兼隆に謝し、
漸く巳むをえたり。
のごとくにして北條氏と賴朝との深緣は結ばれた
。政子の後年まで大にその威權をえたるも、實にか
る際より相伴びたりしを以てなり。

既にして賴朝以仁王の令旨を奉じて兵を舉ぐ、而して
八牧判官の第は幸先よく之を陷ることをえたりしか
ど、石橋山の合戰脆くも敗衂に歸し賴朝主從數騎纔に
身を以て免る、有樣なりしかば、この間にありてその
消息の明ならざりし程、政子はいかばかりかその胸を
苦しめけむ。然れども、天、源氏を捐てず、再擧の勢破
竹のごとく、遂に平氏を西海に殲すに及び、賴朝が征
夷大將軍として鎌倉の府に天下の武將を慴伏せしめし
とひとしく、政子は其の御臺所として時めくに至り
ぬ。而して、北條氏の一族は、其の勳功の點に於ては、
三浦、千葉、畠山等の諸族と比して大にゆづる所ある
にも拘はらず。帷幕の臣として外舅として頗權柄を得
たりき。
政子既に御臺所として勢威を擅にすることをう、是に
於て彼の嫉忌の心は頗その時をえて、大に夫君賴朝
を苦しめたりき。
始賴朝の伊豆にありし頃、良橋太郎入道の息女の敢て

美といふにはあらねど、その心操の柔和なるを愛し、之を納れて妾となす、後鎌倉に入るに及びて、之を小窪なる小中太光家の宅にれたく、龜前と號する是なり。後また遷して伏見冠者廣綱の飯島の家にれたく、寵愛ます〳〵あつし。而して頼朝かねてより政子の嫉妬をはゞかり、深く之を秘したりしが、時政の室牧之方之を知り、以て政子に告げしかど、政子の憤怨一方ならず、遂に暴力に訴へて心をはらさむとし、惹きて殆大事を生ぜむとするに及びぬ

謝小娥傳（其二）

赤松景福 譯

其後小娥は男子の服裝を爲し、所々に傭人の勤を志けり。一年あまり經て、潯陽郡に至りて、ある家の戸口に、傭人を求むる張紙せるを見て、小娥はやがて、そこに傭人となりて、其主人を見れど、即ち父の仇申蘭

くその意に從ひて、勤志けるより、甚申蘭の信用を得て、金銀の出入をも任されたり。かやうして二年あまりなれども、小娥の女なることは知れず。是よりさきに盜み取れし、父の家の金錦衣服器物など、悉く申蘭の家に在りけれど、小娥はそを見る度に、人知れず泣かぬことなかりき。さて申春は申蘭の親戚にて、家は大江北の獨樹浦といふ所に在りて、此二人いと親しく交れり。二人多く財帛を獲て歸るごとに、小娥に留守を賴みなどして、飲食衣服を小娥に給すること豐なり。ある日申春は鯉魚と酒とを持て、申蘭の許に來れり、小娥密に感じて思ふには、嚮に李君（瓦官寺にておひし李光佐を云ふ）が我仇の名を敎へられし如く、仇二人の正しく顯れて、かくよき折になるは、誠に天の導き賜へるにこそと思ひたり。その夜申蘭申春二人、共に酒飲む折しも、其黨類も悉く集りけり。されど酣なるに及びては、其黨類は皆退き去りぬ。こゝに申春は痛

て、申春を室内に繋ぎ置て、佩力を以て申蘭が首をつ。此時に里人來て視れど、持てりし品物夥しくて、くむかりなり。申氏の黨類數十人も有しが、これより悉く露れて、處刑になりけりとぞ。さて當時の法にれど、小娥も罪に遇べきを、潯陽の太守張氏、小娥志と行とを善し、爲にその事を奏聞しければ、罪赦るゝ事となりぬ。時に元和十二年（本朝嵯峨天皇仁八年に當る）の夏なり。小娥既に父と夫との仇を竟て、後本里に歸りて、親族などに物語しければ、里大家爭ひて、妻に聘むと求めけれど、小娥は再嫁せと誓ひて、遂に髮を斬り衣を變へ、牛頭山に至り、大尼將律師に事へて、米搗新采など其勞を厭はず。十年四月泗州開元寺に於て戒を受け、竟に法號を小娥す。是は本を忘れざる心を示せるなり。其年李氏長より歸るさ、善義寺に立寄れど、其寺の大德尼に從る數多の尼あり、小娥はその中に居て、李氏を見て師（小娥の師）に語るやう、我家の仇を討つことを得しは、彼李判官（即ち李公佐）の恩德なりとて、李氏を視つゝ泣きけり。李氏は早その事を忘れて、怪み問ければ、小娥答て某は小娥と申て、嚮に乞食せし孀婦なり。貴官が二賊の名を敎へられし事は、いつか忘れむとて、因て仇討の志を果すまで、樣々に辛苦せし事を委しく陳て、又貴官の恩に報ゆべしと懇に禮しき。小娥辭色沈重にして、性素より敏し。佛門に入しより、その行益淸し。爾後牛頭山に歸らむとて、李氏に別を告て、南海に遊びて後、遂に廻遇ふことなくて止ぬといへり。思へど父と夫との仇を復しゝは節也。傭人となりて、女と知れずして、身を守りしは貞也。貞と節とを始終全くして、女子の行成れりとこそ云へけれ。小娥の如きは、世の道に背き、人の倫を亂るもの、戒ともすべけれど、此傳を作て、その美事を旌すになむ。

明治三十一年の冬　柿屋の雨窓に譯了す

小娥の傳をよみて　景　福

ぬはたまの夢をさるべに尋ねねて
つひに君こそわたをうちしか

時雨集（承前）

白松園主人

○阿若丸（亡兄作）

上

正中元年高時は　帝の御方申しける
日野中納言資朝を　佐渡の島にぞ流しける
都に殘る其一子　阿若丸ははゝそだの
母にいだかれ山里に　隱れ忍びてちゝの實の
父の赦免をいつしかと　覺束なくも待ちにけり
帽額の簾綾の帳　錦の蓐に包まれし
昨日にかはる今日の樣　昔しのぶの生ひ繁る
軒端をつたふ蛛の糸　か弱き肌を襲ひくる
[illegible]

世に憚りのわび住居　包むとすれどしかすがに
涙にもろき母親が　今日か明日かと待つも
育てあげたる甲斐ありて　阿若丸は日に月に
生ひたつまゝに忠孝の　父が魂うけつぎて
自然と備る眼力の　光り凜々しき面影は
末頼もしく見えにけり　末頼もしく見えにけり

中

過る月日は矢の如く　阿若丸はいつしかも
父よ父よと待間にぞ　十三歳になりぬれど
母に向ひて申す樣　かくて空しく日を經なむ
夕に皈る山烏　頭白ぐる時くとも
我父上のかへります　時はいつとも計られず
幼しとてもますらをの　端に入るべきたのれ也
暫の暇たまはりて　佐渡の島わに打渡り
御有樣をつむらかに　見とゞけ歸りせめてもの
憂を慰めまつらんと　願ふ心の切なるに
[illegible]

はれ我等と同齢の　幼き身にて父親に
はんと思ふ心より　遙けき旅に出立てる
の程のいみじさよ　心の程のいみじさよ
みうみては青塚の　芝生の上に息をつぎ
にあらては綠松の　木蔭に立ちて打わへぐ
はぬ旅に日を重ね　漸く佐渡につく程に
原の露をふみわけて　向ひにたてる一搆
れぞ本間が館にして　我父上のたましなる
に殘る阿若が　思ひ余りて遙々と
ね來つるを一目だに　逢せ給へと願ぎ申す
子の心は天地の　神も哀とおぼすなり
るも知らぬも聞く人は　よそにもをしと思ふ也
理も情もわらでこそ　獸に劣る本間とも
らて知らざる阿若は　其たゞかりに陷りて
すといひし對面を　今か今かと待つ間にぞ
資朝ははかなくも　賊徒本間の三郎が
れ乃の下にたち　配所の露と消にける

嗚呼痛ましや君の爲め　父の爲めにと盡したる
忠臣孝子の心勞も　水の泡とぞなりにける
忠臣孝子の心勞も　水の泡とぞなりにける

下

あやめも別かずかき曇る　五月の暗のみ空より
一聲漏らず杜鵑　父が冥途の音信か
待ちわはすらむ母上の　許へ歸れと告るにや
君父の讎はもろともに　天が下には住ずとぞ
かねて聞きつる言の葉の　ふりて積りし怨かな
己れ三郎覺悟せよ　小腕ながらも日比より
覺えし手並今こそは　思ひしらさめ此の怨
晴さでやはか歸るべき　軒の玉水凄まじく
庭の面を漂はず　今霄の雨の我上に
心ありげの嬉しさよ　丑三告る鐘の音に
時いたりぬと身を起し　刀かいこみ勇ましく
勇む心をおさへつゝ　轟く胸をしづめつゝ
伺ひよりしねやの口　奥には燈火あざやかに

前後も知らず臥居たる　惡くき敵の姿やな
しらずや庭の梅の實の　落ちて漂ふ樣は今
汝が首を示すとは　愚なりや寢ぎたなし
いで一擊とはやれども　便りわろかる燈火の
は影を慕ひ寄り來る　蝶の功績いちじるく
內外の暗となりにけり　我物得つといへどれに
いはで飛び入る閨の內　向脛擧げてけり起す
起きよの聲と諸共に　怨の刃むなさかに
うけ戴きて絕えにけり　もろきは奴が命かな
榮利を計り義を忘れ　惡逆無道の高時が
後尾につきて忠臣を　空しくしつる非報い
聽てかくこそあるべけれ　これ迄なりや我も今
自害し果てゝ父上を　追ひ奉らんかさはならじ
都に君もれはすなり　母も待ちてぞれはすべき
死ぬべき時は今ならず　逃れてましよいで〱と
庭にはせいで篁に　身を潛ませて伺へど

逃さじ顔は事々し　猿の如く擧ぢのぼる
竹は撓わみて橋をなし　向ひの岸に事もなく
打渡してぞ失にける

漏屋の翁

白松園主人

いはけなかりし頃、父に懐かれて、外に出でつゝ、そこはかと立ち歩きて、さま〲に、賺し給へるなん、いとをかしき。暮れ行く秋の夕暮、賤が伏屋のけぶり、細うたなびきて、三つ四つ二つ、烏の飛び行くに、「からす〲早ういね、汝が家は皆燒くる、前なる烏後になれ、後なる烏前になれ、手桶も柄杓も買うてやろ、早ういんで水かけよ」と、聲をかしげにいひ給へる、いとをかし。鐘の音遠近に聞えて、西の山の端に、茜の色を殘しながら、うち沈める日の漸う暮うなり行けど、うちにぞ入り給ふ。さて兄姉圍坐して、例の昔語

れて、うち含笑つゝ語り給ふ。蟹の仇うち、土船の謀、さ〱なる中にも、漏屋なんいとをかしくて、今もれぱろに覺ゑたるを、思ひ出づれど、昔戀しくて、幼、なりぬる心地ぞするや。

主や誰、山の裾野に宿しめて、あたりさびしき、竹の一群」とは、むかし阿佛尼が、東國に下るとて、とわる山邊に、萱屋のひとつ、心細げにたてりけるを見て、詠めるとかや。それにはあらで、眞金吹く、吉備の中山の山ふところに、孤屋ありけり。淺間しう荒れはて、うちよろぼへる柴の眞垣に、柱危うげに、軒わらはにて、人住むべくもあらねども、六十ぞかりの翁なた、ひとりありける。もとより隣れる家もなく、浮世に遠き山奥なれど、鹿猿の外ならでは、友とする者もなく、峯の松風身にしみて、更け行く夜半の枕には、谷の水音響けども、れそろしとも思はず。よき馬一匹を持ちて、こよなうかなしうして、飼ひ勞はり、山のなる田のくろに、引きもて行きては、耕すに、秋の

穏いかなるらん、飢ゑたる色もなし。人の交ひもなく、世に求むる事もなけれど、耕しては食ひ、食ひては寝ぬるのみにて、中々に心安げなるを、薪樵る山兒等は、何を便りに、かくは活きてあるらむなど、囁けども、翁はさる事をぞ、絶ゑて憂しとは思はず。只家の、いといたう破れそこねて、有明の月かげ、隈なくさし入りたるを、寝ながら見るには、こよなけれども、雨ふる時ぞ、無慘なる。翁は之れをのみ、憂きものにして、遂に自らあだなして、漏屋となんつけたりける。

翁と一里許隔りたる山の麓に、曲六となんいふ者ありける。牛馬の買賣をもて、活業とするものなりけるが、年頃翁を相知りて、互に往來したりけり。一日曲六は、翁許れとづれて、四方八表の話の末に、翁は例の、漏屋のわびしさを語り出で、涙さへ落しつゝ、曲六に乞ひていふやう、秋のくせとて、時雨のみうちしきりて、見らるゝ如く、屋内は乾くひまもなし。わはれ雨のふらん折は、和君の家の片隅にても、雨を凌

がせ給はんには、こよなき惠みにこそ。といへど曲六うち點頭、いと安き事になん、雨ふる月は、いつにても來ませと云ひつゝ、軒場の方をうち仰ぎて、げに世のたゝずまひと、秋のそらの、今までは晴れたるに、また曇りたり。明日とも云はず、今夜すら六つかしからんと、いふをりしも、背戸の方に、一聲高く嘶きぬるを、曲六は耳ひきたてゝ、翁の悲しき聲にも似ず、勇ましき馬かな。うちもかはらず、肥ゑたるらむ。いでと云ひつゝ、厩さし覗きぬ。

（つゞく）

筑紫の旅（其二）

親々書屋主人

此の行、途中、京都に一宿して、名勝古跡を尋ねんと欲し、故らに東京を發する夜を以てしたり。然れども、夜を以てすれぞ、富峯山下は、深夜に過ぎざるべから
ず。天下名山の

る能はざるは、此又、憾なしとせず。更に、思ふに、此
の行、日程限りあり。一日を緩にせむ、則、期を誤ら
んと、遂に、夜行に決す。之が爲に、滊車の中、雨を
聽て眠り、夢中徒らに千仭芙蓉の影を印せしのみなり。
名山余に負かず、予、名山に負く山靈、若、知るあら
む、文を移して、當に予を責めんとするか。
九月廿二日、朝日を熱田停車場に拜し、木曾川を渉る。
水清うして、砂白く、漁舟の點綴する、眞に、一幅の
活畫なり。予、曾、拙堂木曾川の記を讀で、其の奇想
を想ふ、彼の木曾川を下る、萬里長江、一日歸の快遊
を激賞して已まず。今や、百餘里の長途、一夜に馳せ
去り、鉄橋轆々として、彼が昔遊の地を睨して去る彼、
若、知らましかぞ、文明縮地の術、長江一日の快を汗
なりとせんか。此の地方、河心は田園より高く、稻田
麥畦、皆、低地にあり。毎歳水災の多き之が爲なりと。
岐阜を過ぎて、大垣遙かに城樓を望む。頽廢僅かに存

雄が乾坤を賭して、一擲雌雄を決せし所、予には如何に、其の地の山川が感慨を呼起したるか、關ヶ原の地勢は、西北に山岳起伏、連亘し、南宮山、此の間にあり。山下は、原野遠く相接す。然れども、此の間に於て、百萬に近き兩軍が、互に相戰ひたるを想へば、地勢の狹少にして、如何に指揮操縱を爲したるかを疑はしむ。予、曾て關ヶ原の戰記を讀み、之を疑へり。今、其の地を踏破するに及びて、未だ釋然たる能はず。豈、古今三百年を經て、地勢の變化然らしむるか。山河依然として在り、山上の老松は、舊に依て靑し。眞に「夏草や武士どもの夢の跡」の歎を發せしむ。嗚呼、余をして、一夕の閑あらしめば、南宮山下、茅屋の下に千歳の幽魂を招きて、當時の戰況を夢中に說かしめんに、顧望の間、車馳せて、數驛を過ぎ、車窓既に湖光の瀲灧たるを見る。膳所の城壁、靑松綠樹の間に隱見し、仰て望めば、杳として天上蜃氣樓の如し。灣々曲々、漁家蛋戶、其の間に在り、三島何ぞ他に求めん。十二因緣、頓に空しきを覺ゆ。八景何れの邊ぞ、遙かに唐崎の松を有無髣髴の際に見るのみなり。唯、憾む、車上の客、過ぐる所の名勝、徒に瞥見し去りて、程中、僅に、指を染むるのみなり。仔細に賞するに暇なし。瀰迤として、湖畔を廻り走す。驛々顧望するも、尙、湖上の水天共に空濶なるを觀る。其の大なる知るべし。深夜富峯秀靈の氣を吞吐して、今は、湖心蒼空の翠を掬す。病夫頓に氣象の壯快を覺ゆ。予、小少東都に遊學し、京に在ること殆ど二十年、足、未だ曾て、都門を出でず。風塵の中、徒に山水を夢るのみなり。然るに、一たび陸奧に遊び、東奧の名山大川を跋涉して、千有餘年の古跡を尋ね、今、又、飛で鎭西に遊ぶ。到る處、皆、足、未だ踏まざる地なり。故に、過ぐる所深く、其の風光を賞し、地理に熟し、更に、古人の遺跡の感に入る切なるを覺ゆ。遊行の益ある、信に百聞は一見に如かじ。草津に達す。舊都に入る。既に、一二時間の後にあり。車中の客、多くは、京音を帶び、一

百里外の征客をして、故郷を去る遠きを感ぜしむ。馬場を過ぎ、大谷山科を過ぎ、一隧道に入り出れぞ、車、漸、徐行し、驛夫稲荷と呼ぶ。更に、馳する少時、母子事なく舊都に入る、時に九月廿二日午後一時なりき。飢うること甚し。直に、旗亭に登り、午餐して一憩す。時、尚、早きを以て、東山の名勝を探らんと欲し、東道者を雇ひて清水に到る。千歳の古刹、其の壯閣を極む。予輩の筆贅すべきにあらず。時、秋分に屬し、都人士の來り詣するもの陸續相接す。衣香釵影美を鬪はし、妍を爭ふ。櫻桃亂れ發き、魏紫姚黄春を呈し來る、唯、京都の女子は、濃艶賞すべきも、洒落愛すべきの風なし。竹外の梅花、之を東部の婦女に歸せざるべからず。而して、京男子の艶冶嬌容なる、一見余輩をして嘔吐せしむ。方廣寺、得長壽院を見て、祇園を拜し、知恩院に至り、丸山公園に憩ひ本願寺に詣す。吾母、佛を奉じ、且吾家眞宗に屬するを以て、京都に到り、本

母の喜知るべし。予も、亦、從て拜す。予、佛を好ま
ず、母の心に從ふのみなり。所謂、程子母の爲に被髮
に祭る類か。東道者、尚、名跡を尋ねんことを勸む
雖も、徹夜、車中に在りて、一睡を得ず。疲憊極れり
乃、旅舍を求めて宿す。時、既に、午下四點鐘なり
夜に入り、寢に就く。困臥の餘、夢の何れの邊に飛
を知らず。一眠して、曉に達す。

兩縣令競義婚孤女（六）

湘玉女史　譯

張婆が衙を罷りて外に出たるは、己是酉牌時分なり
が、夫より再び賈家に到りしに、只見れぞ、邦の養娘
は、正に小姐の身上を想煩ひ、厨下にありて痛哭居れ
り、賈婆は他に對ひて説き道ふ、我今你をぞ張媽々
外甥に嫁與し、婦とせり。月香に比ぶれぞ幾分か勝
たることとなれは、悲み傷むことを止めよ、長

ひ淨め、其打扮は帽兒の光々あるを頂き、衣衫を簇して、自家一碗の燈籠を提げ、前み來りて親接せり。婆は、養娘をして買婆に拜別せしめ、養娘を伴ひ往んとするに、那の養娘は原是卑しき身分にて、原よ大きなる脚なれど、歩むに艱む程にはあらざれとも、婆はわざと彼を扶けて歩行しめ、外甥の家に到りてを成さしめたり。話休㆓絮煩㆒再說、月香小姐は那の鍾離相公の衙内に進きたるが、次日、夫人は新來婢月香を呼び、中堂を打掃せよと吩咐られければ、月は命を領て、箒を携へ去れり。このとき鍾離義は面洗ひ髮を梳り畢りて、早衙を打點て事を理めんとして中堂に出たるに、只見れどかの新來婢子は、呆々として掃除箒を把りたるまゝ、庭の中に立ち居れり。離公は之を見て暗々に怪しみ、悄地前み來りてうちれど、原來庭中に一個の土穴あり、月香は那穴に對汪々と淚を流し居たり。鍾離公は其故を解せざれど、りて中堂に入り、月香を喚びて上來らせ、其緣故を

問ねたるに、月香は愈々哀み泣きて、是は自ら上げられませぬと恐入るを、鍾離公は再三詰問られけれど、月香は方纔淚を收めて言ふ、賤妾は幼時、父親と曾てこの衙内に住居たりしが、この時、父は妾をして蹴鞠の戲をぞ爲さしめ、妾誤て毬を此穴に落したることあり、父親は妾に問て道ふ、你手をもてあの毬を取らず、毬をして自然にこの穴より出すべき計較ありやと、妾答て云ふ、計有りとて、即養娘に水を汲み來らしめ、之を穴に灌ぎたりしに、水は滿て毬は自ら浮て穴の外に出たり。父親は之を見て、妾をぞ聰明と言ひて喜に勝へざる樣なりき。今は年久くなりたれども、尙記臆せり。今其物を觀て情を傷しめ、覺ねず哀み泣きたるなり。願くは相公、俯して矜憐を賜ふて、我が罪責を赦し玉へと述べければ、鍾離公はかくときゝて大に驚き道ふ、汝の父の姓は甚、名は誰なるや、又倆は幼き時如何にして此地に在りしや、細に我に說ききかせよ。月香道ふ、妾か父姓は石、名は璧、六年前此

地の縣尹たりしが、天災の爲め米倉を燒き、朝廷父の職を革め、軟監に入れ置き、賠償せよと迫られけれど、父親は之れか爲に鬱病を發て死せり、有司は妾と養娘とを官賣られたるが、本縣の賈公と云へる者、向に寃罪を蒙り、死刑と定まり在りしを、我が父任に到りてかれを救ひたることあり。かれは父を命の親なりとて深く喜び、之に報いんとて賤妾と養娘とを牙婆の手より買取り、甚だ能く看待て撫養呉たり、賈公今は外に出で丶商を爲し居れるが、其妻はわれらを嫌ひ、家に置くことを容さず、遂に妾を轉賣して貴門に到れるなり。只是實情にして、少しも欺き隱すことな、と答へけり。

今朝訴出衷腸事　鐵石人知也垂涙

鍾離公は聽き罷り、正是兎死して狐悲む、類を傷むなり。我と石壁とは一般是個の縣尹なれど、他は時の不幸に遭ふが爲に天災に遇ふて身を亡し、親生の女兒は下賤て淪めり。

なければ、たとひ其女兒が我か手許に到るも、夫れをでなり、今かく聞きたる上は、是天他を我が衙裏に誘き救はせんとするなり。然るに、われ彼を扶持せずば、同官たるの體面何くに在りとせんや、石公九泉の下にありてわれを如何なる人となさん、當下夫人を請て堂に上り、やがて月香の來歷を把り來りて細に敍明しければ、夫人道ふ、這等の說ならば月香も也是縣令の女どうして賤婢に使はれん、しかし目今女孩兒の嫁入期限も又逼り居る折がらなるが、其事は相公何と取計ひ給ふや。鍾離公道ふ、今より後月香を役ふことをやめ、女孩兒と姉妹と稱へ養はれよ、嫁入の事は下官自ら處置ありとて、即時一封の書を認め、人を差して親家高大尹の處に送れり、高大尹書を拆きて之を看るに原來是嫁娶の期日を寬めんことを求むるなり。其書面に道ふ、

男に婚し女を嫁するを希ふは父母の心なりと雖己を

るに因り豫め媵婢月香を置きたるに其顔色を見るに端うして麗しく舉止も安き詳なり心竊に之を異みて細に來歷を訪へど我より兩任前の石縣令の女なることを知れり石公は廉吏なりしが倉を火きたる爲に官を失ひ贓を喪ひ女も亦官賣せられ轉輾して寒家に售られたり同官の女は猶吾女のごとし此女年己に笄するに及べり唯屈して媵婢と爲すべからざるのみならず、且吾が女をして此女に先だちて嫁せしむべからず、僕今急に此女の爲に婿を擇び小女の薄奩を以て之を嫁せしめんとす令郎との姻期は少く改めトすることを待たれんことを特に此に懇請す伏して惟れど情諒せられよ鍾離義頓首

大尹看了りて道ふ、原來かくの如きは此長者の行な、吾奈何ぞ鍾離公をして獨此美を擅にせしめんと即事書を回して云ふ。

鸞鳳の配佳期有りと雖狐兎の悲豈志を同ふする者なからんや親翁に在りて既に同官の女を以て女と爲す不佞寧ぞ親翁の心を以て心とせられんや示言を復すれど人をして悲惻せしむ此女は廉吏の血胤閥閱に慙ることなし願くは親家即賜ふて兒の婦とし以て始の期を踐まん令愛は別に高門を選むれよ遮幾は兩便ならん昔遽伯玉は獨君子と爲ることを耻づ僕今願くは親翁の誼を分たん高原頓首

使者回書を將て鍾離公に呈しければ、鍾離公は看了して道ふ、高親家の孤女を娶らんと願はるゝは義擧なりとは言ひながら、我女と他兒とは久しき前に已に聘を定なるに、今更契約を改め更ゆ可んや、只我が石小姐を嫁了て、然る後に別に粧奩を備へて、吾女の事を完うせる迄待たするより外なしと、當下又一封の書を寫して、再び高親家へ送りたり、高公書を開きて讀み道ふ、

依ことなきの女を娶るは高情に屬すと雖已に定りたる婚を更むるは終に正き道に乖かん、小女と令郎は久しく鳳聲を諧へ鸞鳴に准擬ふ令郎に在りて妻を停

めて妻を娶は已に古禮に違ひ小女をして婿を舍て婿を求めしめむ人の非を免れがたし請ふ君三たび思ふて必前議に從はれんことを　義惶恐再拜

高公讀み畢りて嘆じて道ふ、我一時の思ひ附にて、深く考へずして返書したるが、今鐘離公の言を聞きて慚愧にたへず、われ如今兩盡の道あり。鐘離公をして其志の如く行ふことを得せしめ、吾も亦同じく其名を享け、萬世までの美談と爲さんとて、即時書を復して云ふ、

女を以て女に易ふ僕が義を慕ふ殷なりといへども妻を停めて妻を娶る君の禮を引く甚正し僕の次男高升年方に十七尚未だ姻を締むず令愛はわが長子に歸き石女わが次女に屬かは佳兒佳婦は兩對の良姻一死一生千秋の高誼なり粧奩は備はるを求るを須たず時日は且喜ぶ和同せん伏して冀くは俯從せられよ改めトするに及むず　原惶恐再拜

（未完）

才くらべ

蓬生屋女史

何處の國なりけむ、名は何と呼びけんふと忘れたるが、或るまづしき家に、一人の少女あり。父は田を耕し、母は紡績などしてかつ〲世を渡れむ、只一人の娘なれど、いつまでも膝下の花とのみ撫でられず、娘も又孝行深きものにて、小さき腕に紡績の手傳ひなどするもはかぐ〲しからねむ人の家にだも雇はれて父母が手助けせんとて、やがて語らひあひて、其の住家より一里計り隔りたる所の、或る富家の女の子守となりぬ。其の時年やう〱十二むかりなりき、其の主の女はまだ二つ三つなりけるが、いろ〱の手遊びもの數ある中に、鬼の面あり。ある時子護之を見ていたく泣きけれむ、主人あやしみ、此の子利發にも似ず、鬼の面の恐ろしくてさは泣くにや、愚の事など問ひ笑ふに、いな恐ろしくて泣くには侍らず、其の面またはしくて泣く

ぞとらせん、いざ持ち行きねとて、子守が顔にれしあらせ給ふにやとて、いたくよろこぶに、主人は何の意



とも知らず、可笑しう思ひ、其のまゝそをとらせ
たり。子守は、菓子衣服など與へたるよりは喜び
やがて懐にさへ押し入れて身の守りとなしぬ。欲
するものに品こそあれ、鬼の面をと人々あきる
むかりなり。やがて其の夜となりぬ、主人の女は
寝ねにつきたり。子守、主人に、今宵親を問はま
し許るさせ給へと幾度か請ふに、主人は少女の身
にて、夜、山路行かんは危ふし、事やみねと云ひ
てとゝむれど、子守強ひて請ひてやまざるに、日來
の孝心を知りたれど、さらばとて許したり、少女
はよろこび直ちに謝して、急ぎ親の安否をと山路
を恐るゝ氣色もなく走り、半里も來しとれも、山
奥に、盜人共五六人纒ひてありけるに、人音に驚
き見て、一人あつとさけびたるまゝ物も云はず逃
げ出しに、殘る四人、三人皆子守を見、れどろ

てなどしてたはぶれぬ。子守いと喜び、さては誠にと恐れて、取るものもとり敢へず、はう〱の体に逃げ

散りたり。子守は目も懸けず、やがて又半里ばかりを走りて親の許に行き、安否を伺ひ、兼て貰ひためたるもの菓子など取り出で、慰さむれど、親は思ひがけず少女が、夜路をかし來にたるをいぶかり、狐狸ならずやなど伺ふばかりなり、子守は靜に語りけるやう、實は晝のほど主人に鬼の面を貰ひたれど、それ冠ぶりて來にたるに、山賊五六人居りたれど、中々に彼方恐れて逃げ行きけりと云ふに、父母もいたく感じ、先きはどはさる事ながら歸りのほどは覺束なし送り得させんとて、父なる人、松火を燈して送り來りぬ。先き、盗人の居りし所は此處ぞと云ひながら、寄り見しに黄金白金、數多積みありしは、人の家より盗み來りし品を分たむとせし折りなりしかど、其の黄金拾ひて思はぬ所得を得たりとぞ。

禽獸の言行

田端の隠居

あながまし／＼、世の中の人の多きが中には、たゞ多口
にしてよく手足を動かすものあり、そは蟋蟀や、みそ
さゞいに類せる人なりと云へり。よれどあつまれど、人
の噂さ、彼の人は斯くよあゝよなど、がや／＼、がち
や／＼、さゞめきあひ、笑ひあふ、世に井戸傍會議と
て、いやしきもの丶、なすべき事とのみ思ひしに、高
等の教育を受くる孃たちにも此の習ひ又あり、四人五
人あつまるとすれど、はやも教の師を誹り、友を笑
聲かしがましく、其の人かあらぬか、ふと人の足音、は
はひすれど驚き、一齊になりをとゞむ、あたかも轡虫
ががちや／＼とかしがましく鳴きはこれるを、人音に
おどろきて、一齊になきやみたるに似たり。形のみけ
美しく、姿のみはやさしく、たゞ油をこらし、面

見る目にはさながら玉の如く、黄金の如く、光り輝くり、内、能も無く、學も無く、取る所なきものなり。之は、金魚、玉虫に類せる人なり。他目には篤實らし、見せ、聲もやさしう、人を慕ひ親しむさまして、人に油斷せさせ、我が利を得むとするものあり、これ、にやんとやさしげに鳴き、人の膝にむつれ、空ねぶりなどして、盗する猫に類する人なり。他の手にあるものをほしがる者あり、之は鳶が人の手にせる油揚などふことさらはまほしがるに似たり。己此の頃、都の繁きをさけて、田畑のほとりに來り住みけるが、流石になほ青草の茂きはうれしく、明け暮れ、田の畔をさまよふに、今年は田の實もうるはしく、千町の千束穗、房重げに見亘す限り首を垂れたる、げにみつほの國の賑ひめでたく彼方此方見亘すに、いつのほどにか表札の立なり。何事ならむと行き見しに、螽捕、穗を拾ふべからずとの札なり、をかしき札、如何に世なれむとてさやうの者のと思ふに、げにこそ札立つるも道理、三十、四十、五十のいやしき女ども、十二三、九つ、七つ、六つ、五つ、三つ、二つ、の子をさへ脊負ひて、大なる袋を持ち、螽を捕るさまして穗をこくなり。しかも十二三の子に脊負はせ、六つ、五つ、の子が腰に附けさせ、肩の子にまで持たしめ、重げに持ち行く傍らになは小松葉を摘みなどして、こそ〳〵と出で行く幾人なるを知らず、其のきよろ〳〵と穗を摘み、人音におどろき、そこ〳〵に逃げんとするさま、げに村雀の群れて穗を拾ひ鳴子の音に驚きて逃げ迷ふさまに似てあさまし。あはれ穗を拾ふ隙に糸繰り、綿つむぎ、生計をたすけむ道は他にあらむものを、鷹てふ鳥は、鳥にてもすら落ち穗を拾はずと聞くを、萬物の靈たるものが、小倉の行ひ、生れながらの子をさへかやうに育む將來のほどこそおそろしけれ。

（未完）

家庭の花（中篇）

小倉山人

漸々小降に成りし秋雨、いつしか名殘なく晴れわたりて、庭前の垣根に溜れる柿の葉に弱き夕陽の影させり。川上霞峯先生の夫人は眉を寄せ給ひ、何方へか越しなされしか。お晝も到頭お歸宅なく、これは大層お手間が取れる。併し最う追附おかへりあるべし。どれ斯うして居る手間で、お湯でも沸しておきましやう、と膝に眠れる猫を突退け、火鉢に炭して懸け給ふ鐵瓶は俗を離れし南部の小霰。折しも颯と吹き起る秋風の、庭に木の葉を降すれば、ア丶秋は誠に心ぼそい。これから又日にましにお寒くなる。山の手は閑静で宜いが、これからの霜柱には、また暫く難澁する。今年は植木屋が大變おそい、例ならば最う四五日も前に松葉を布きに來る時分。アレ彼の熟柿が到頭落ちたなど獨言ち

く々あがり、鐵瓶も人まつ虫の音をぞ立てたる。この時表の敷石傳ひに足駄の音。もしやと窺けど先生なり。ヲヤお歸りあそばせ、大層お手間が取れましね。ア丶と便り無き返辭を聞せ、一室を差して悄々と入相の鐘、秋の夕べは取分けて淋し。先生火鉢の縁に片手をかけられ、煙草一服召し給ふ元氣も無く、眼を眠り體を斜めに長息を吐かれ、ア丶誠に氣の毒なものじや。今も言つて聞せていたが、この美術家などゝいふものは、鳥渡局外から見たところは、至極呑氣な職のやうに見ゆるが、常に他の爲ぬ苦勞をして、收入といへば極細些。世法の上から算盤を立てた日には、實に馬鹿げ切つたものじや。獨り彼ればかりではない、自分も今日までに成るには、言ふに言はれぬ苦勞を見て居る、十五の年から四十幾つの年までは、實に難澁な事であつた。多少世間に名を知られて、机の抽斗に質屋の通帳の無く成つたのは、辛と四五年以來じや。何十年と

と思へど、恐らく美術家ほど果敢無いものは世の中にあるまい。彼れなどでも矢張爾うじや。最う世の中に出ても、私は畫工でござる、と云つても恥しからぬ腕前は持つて居るが、それでも是れから時節を待つには、まだ／＼餘程間がある。併し乃公などは彼れと違うて、おなじく貧しいといふ中にも、幸福な事には、家庭が始終和睦して居つたので、愉快に修業の功を積んだが、彼れでは實に可憐さうだ。貧には攻められるは、その上傍で如彼口喧しく言はれた日には、成程身を入れたものは畫けまい。彼れでは如何にも氣の毒じや。當人の身に成つたならど、定めて辛いことであらう、と問はず語りをして居る所に、夫人は自ら晩餐のお膳を運び、視れど勝れぬ顔色なるに、先刻の樣子といひ、何とは無しに氣がゝりなり。御病氣かと尋ぬれど、イヤ／＼左樣では無いがの、今日は道中から不圖その氣に成つて、實は霞村の家に行つたのじや。近頃は何んな樣子でございます、と胸を安めて銚子を執る。先生も洋箋おもげに把らせつゝ、イヤ最う相も變らず貧乏な所に、母親の口説は益々火の手が激しい。それはかた／＼誠にお氣の毒でございますね。他の品評は爲ぬものなれど、彼の樣な可怖お方の子に、桐生樣を見たやうな、これは又取分けて優しい方が、善くまあねえと不審を打てど、されどのうこ先生は、洋箋片手に娃を見渡し、折しも落つる栗に目を止め、彼の可怖しい刺の中に、栗を見たやうな高尚な味ひを有つて居る實のある世は、又不思議な物だてのう。彼の母子を栗に比へて見やうならど、邪氣一偏の母親は、鳥渡觸つても手を刺す奴で、霞村は人に賞美せらるゝ中の實じや。兎に角霞村は可憐さうな者じや、何とか心を添へてやらねど、彼れでは到底も行立たれぬ。第一は母親が邪見で、よしや貧苦の中にもあれ、その方法は幾つもあれど、わが子を賞勵して世に出さうとか、可愛とかいふ觀念は未塵も無くて、たゞ最う朝から晩まで口喧しく罵るので、彼れでは如何に溫順な者でも、一番是れを

畫いて見やうといふ勇氣も出ねど、強ひて筆を執つて見た所で、到底も滿足な物は出來ぬ。又第二は數多い門生中で、腕は一番達者であるが、正直でその道に熱心なほど、世法にかけては疎いので、他の奴等の半分も取れぬ。其處にもつて來て、家事を取締つて、彼れの苦みを分つ役目の妻は無し。在らずもがなの母親は、月夜の犬を見たやうに、喉を鳴して吠ゆるが藝で、筆洗一ッ洗つてもやらぬので、氣を遣ふ一偏の業では、實に彼れの壽命が縮まる。何んでも早く心の確乎した妻を以つて、母親の機嫌を取らせ、家事の世話を爲せるのが、實に目下の急務とも云ふ可き所じやが、何處ぞに一人あるまいかのう。彼れの家に來て、一番力を添へて見やうといふ樣な女は。邪見一偏の母親と、目下の貧苦にさへ耐へてくれる女なれど、標致、敎育、その邊は決して擇びは爲ぬがのう。惡い事をお勸め申すじやございませぬが、それは姑くお見合せなさいまし。

しても、また廣い世の中なれど、何樣な賢婦が無いとも限りませねど、尋常一樣な女では、よし貧丈は辛抱しても、彼の姑御には一月の事はおいて、一日一時間も仕へる事は出來ますまい。一番最初にお媒介成されし娘の如きは可愛さうに、釋致も心も十人並に勝れて優しく美しく、この節の嫁御としては先づ無難ともいふべきなりしが、到底もといふ際に成りて此方へ參り、泣々何んと申しました。夫の貧乏、これは最うその時の廻り合せでございますれど、決して苦には致しませねど、姑御さまのお心の六かしさは、深淵に張つた薄い氷を踏むやうで、おそろしさ氣味わるさが、五臟六腑に徹へまする。今日までには隨分と辛抱もして見ましたけれど、彼の樣にお心が妙に僻んで居られましては、よし何の樣に心を配り身を棄てゝ、御機嫌取つて見ましたところで、益々火の手を高めるぞかり、この期に成りて彼れ此れと姑御樣のお噂申すは、誠に以て

ござりまする。彼れでは如何なこと私には、到底も御嫌が取れませぬ、辛抱が出來ませぬとて、これも隨氣むづかしい人と聞いて居つた繼母の所に、ア、今から地獄わがりを致しまする、と悦んで歸つたではござりませぬか。その後擇んでれ媒介成されし二人の妻も同じき始末。而て見れぞ彼の姑御の何んとかれなりなされるまでは、幾度れ媒介を成されてもれんな事でございましやう。それに又桐生様も幾度れ迎へされても、暴々しき風波の起るぞかりでは、却つて迷惑でございましやう。その邊篤と御思案あそぞせ、の際又候嫁沙汰は餘程れ考へものなるべしと申せ、左様さのう、又候その樣な事でもあつては、尠かず困るには困るが、さて、またわしの身に成つて見れ、何うも彼の儘にして、他所目に見ても居られぬがう。何處ぞに一人良い妻はあるまいか、最一度もたて見てやりたい、れ前も心がけて居てくれい、と御の後にてれ茶一口喫させし所に一人の門生襖を開け

て手をつかへ、先生、紙屋が參りました。紙屋、ム、淺草の清川か。よし〳〵此處へれ通り成されといへ。はいと答へて行かんとする書生を奥さま呼び止め給ひ、憚りながられ膳丈、これは私がとれ鉢抱へてれ銚子片手に、また何うやら曇つてまゐりましたね、と小股に急ぐ椽側に散るや木の葉の夕風に誘はれて、來たか紙屋の清川といふは、齢まだ五十に間われぞも、頭は光る源氏の君、これは平家の大入道、辨財天女に恍惚して、夕日を扇に返したといふ清盛然たる顏はしたれど、心は花の敦盛さまより美しく、行きくれてと詠ひけん忠度卿より風流に、加之戯謔心に富みたり。れ通りなされと書生にゆるされ、勝手知つたる家のことゝて、ナニ最う御案内には及びません、此家の勝手は私の方がずつと明るい、エヘ、、、と輕く笑つて、太りと肥滿したれぞ、わが身ながらも重さうに、れ次の部屋まで進みし清川、唐突に入つてはいかゞと、襖の引手に手をかけて、こほり〳〵と咳嗽すれぞ、奥には先

生早くもそれぞと御承知わつて、サア何うか此方へ。御免下さいまし、と小腰かゞめて入來る。何方の機轉か今まで奥さまふうはりと座り給ひし座蒲團は引繰返つて素知らぬ面、此處へお出でといふものゝ如く、火鉢に引附けしかれたり。清川は前みかね、敷居よりわづか進めて席を取り、日の暮に參りまして、いかいお邪魔を致しまする。その後は誠に御無沙汰を致しました、お異狀もござりませぬか、と恭しく挨拶するを打消して、ア其處はいかん、何うか火鉢の側に、サア〱。ムゝ好く來て下さつたのう、今こそお前さんの事を思つて居つた所であつた、と先生頗る御機嫌宜し。紙屋は流石に進みかね、何うも暫く御無沙汰を致しましたが、私もその後太く病ひましてな。ムゝそれは少しも知らなんだ。又例の疝氣かの。イエ今度は方角を轉へましてな、上も上か直と尖邊を病ひまして、その爲誠に申譯の無い御無沙汰を致しましたと頭を撫でる。はてな、しは又これまでの疝氣が、頭の方に養子にでも參りましだものか。ハゝゝゝゝ養子と云へば此方は嫁の相談で、實はその、お前さんの見ゑるのを待つて居つた所じやがのう。これは恐悅、こんな老爺でも娶つてくださる所がございましやうか。そりや幾何でもございましやうよ、御容色は美し、それにお齡もお少くて居らツーやるし、オホゝゝゝゝとこの時突然言ふものあるに、清川吃驚振向けば、何時の間にやら奥さまのお茶器運ばせてお在します。ヤアこれはと退去つて平伏し、その後は誠に御無沙汰を致しましたを冒頭に被せて挨拶長し。奥さま好き程にあしらひ給ひて、それでは御窮屈でございます、何うかお樂に、オヤ未だお火鉢も、アレお敷物も、粗末なお茶でございまするが、と琉球錫の茶臺に道八が茶碗を乘せ、玉露一碗すゝむれば、戴きまする と恭しく取揚げて、喫む口元に至るまで茶道の心得あるものは、何處やら目立ちて有がたし。淸

に、此處は冷ゆると先生がの給へど、サア何うか、それとも別に火をお取り申しましやうか、と奥さま立たんとし給ふに、イヤ最う何うかと清川は、露額頭をがつくり低ぐる。それでは貴方何うか彼方へ。ハア。酷く遠慮爲られるのう。實はその相談爲たい事があるのじやがのう。何うか此方へ來て下され、と先生も强ひ給ひ、奥さまも勸め給ふに、清川今は辭退ならず、それでは御免を蒙りまする、と窮屈さうに腰を屈めて席を移せど、早速じやがのう、嫁は一人あるまいか。左樣でございますな、と清川は煙草入取出さんと腰を搜れど、仕舞ッた、今日は忘れたり。手持無沙汰に手を引けど、奥さまは既に中座し給ひ、先生はお氣が附かれず、何處ぞに嫁はあるまいかのう、と頻りに煙草喫し給ふ。煙草喫はぬは知るまじき此の苦みを、清川はこらへかねて生唾を呑みつゝ、無いとも限りますまいが、御標致、教育、お年の比、いづれ其邊にお好みがございましやうな。イヤ〳〵標致、教育、その邊にお好みは無し。然らばお年の比は。左樣さ先づ二十五までじやのう。別にお好みも無いとあらで、一番當て碎けましやうか。何分にもお賴み申す。それでは段御注文はございませぬな。左樣さ別段注文は無いの、當座の貧乏を辛抱してくれて、それから最一はの、誠に言ひ難い話であるが、實に邪慳で口喧し姑の機嫌を取つてくれる者で無くては困るのじや。の二ッがあるに依つて、此方から標致教育、その邊では言ひかねるが、これもあれどあるに越した事はい。さうして何分急ぐのじや。と先生膝を前め給へ清川の顏の擠へをむづかしくして、これは中々困難まる御緣談、而も至急とあつては尙の事なり、總じ若い女にて貧乏に耐ふるといふこと既にむづかし。の上それ程御嫌機の取り難きお袋さまさへ御座つて益々むづかし。とは又何故かと仰せまでも無く、一それ女子は的の主義上下通じて行はれし昔時にありすら、嫁姑の間は猫と鼠に比へられたる程なり

に、況んや淑徳其處退け、お前に闘つては面倒じやといふ女のみの今日、貧を忍んで良夫を助け、その上姑の機嫌を取らうなどといふ優しい女が一人はおいて半分でもござりましやうか。朝には甲に歸ぎて其家政豐ならねど、夕べには後足に砂を搔かけ乙に轉じて恬として少しも恥づる所無く、良人〳〵と甘んじて、良人を尻に敷妙の枕の塵を拂ふのが今日女流社會の一般、然るし若し御注文通りの嫁御あらば、それこそ糠の中から砂金ほどの拾物併し、先アノ〳〵無いと申すが實際、お聟さまは何方さまかは存じませねど、この御緣談は到底〳〵、私風情の力で及ぶところにあらず。時に先生、誠に毎々お願ひ申し上げかねまするが、又お手隙の時に何うか一枚、イヤ最う何時ながらつひ身勝手な事ばかり、エヘヽヽヽヽと紙屋は飛んでも無い所に話の頭を轉へて了ひぬ。

（中篇了）

梅の下風（十五）

白魚女史

夢に靈夢、神夢、正夢、虚夢、吉夢、凶夢、思ひねの夢なんど云ひて、さま〴〵のゆめありと聞く。傳吉が夢、お錢がゆめ、げに凶夢、げに正夢、ゆめははたして靈たるか、いな、之も積り〳〵し思ひねの夢なるべし。やがて傳吉は役場に連れ行かれけり。潔白清廉の心、傳吉は憚る事もなければ、おのゝきもせず、從容、頭も下げず、高手小手結はいらねしまゝ畏りて命を待てど、馮司は頭を幾度か地につけ、倅が敵、はやくもお捕へ賜はりし嬉しさ、言葉には述べ難し。此の上の御仁政、何卒倅が遺恨をはらさむやうの御成敗をと、出もせぬ淚拭ふさまして、慇懃めけど、上又盜賊の言の甘きを推さぬ小人、殊に馮司は物を賄ひ、言葉を低くし、身をかゝめて、上様、旦那さまと百度千度米搗



（中篇了）

の甘さを推さぬ小人、殊に馮司は物を賄ひ、言葉を
くし、身をかゝめて、上樣、且那さまと百度千度米搗
蚯の如くに頭を下げ、尻をふりふりなれど、儒吉は

直一筋、上にへつらひ、下をしへたぐるなど云ふ心はなく、只よく村内を治むるが、上へ盡す眞心とのみ思ひて、郡奉行等の代りしにもこびへつらう心は更にあらざれど、巳れに諂ふ者を悦び、己れに利する者を善とする小人ども伊藤清兵衛、川崎正直など、名のみ正直らしき强慾士、なまくら武士、みごと大小をたばさみ、上下いかめしく座をしめ、急度傳吉を睨まへ、やはそこの傳吉、汝、村の庄屋役をさへ、勤むる身として、役儀にも憚からず、私の恨を以て、人を殺す罪重々至極と、聞くより傳吉は靜に頭をあげ、誠に思ひがけぬ事を承り及び候。拙者いかで人を恨み、人を殺ろし候べきと言はせも果てず、傳吉、汝如何に知らぬふりして過さんとするも、はや逃れぬ。證據、飛石の血のあと、衣のけがれ。夜べ猿島河原までは何しには行きたる。何とて、衣、飛石等のけがれたる。思ふに、汝、村民にこび、馮司が役を奪ひ、村役の威權を振りて、又村役を收めて、もとにかへさむとし、且は汝、馮司方より金圓を借用いたし、そを催促さるゝをうらみ、ねたみて、夜べ猿島河原に行き、昌次郎が、夫妻を殺せしなるべし、最早かくされぬ罪、尋常に白狀せよとの言葉に、傳吉はあきるゝばかり驚き、こはあまりなる御疑ひ、やつがれ夜べ猿島河原へ參りしは一昨夜はからずも夢を見、何となく心に懸り候へば卜者を問ひしにて候。衣の裾に血のつきたるは、昨夜尋ぬる人候て、夜半遲くさまよひしに、ふと何にかつまづき、暗中、何とも存ぜず歸り參り、今朝衣の穢れを見て、私ながら驚くばかり、傳吉が人を殺さぬ證、我が指添を取寄せ御覽下され、けがれたる所は、毛頭御座なきが何よりの證、殊に馮司に叔父、昌次郎は、從弟、日來血脈と思へど、先年昌次郎、私妻花と密通露見の折も、故障をも申さず、花との緣を斷ちて彼方へ遣はし、あまつさへ、金圓をさへ添へて白妝をも贈り候

の後やつがれ、未熟、思はぬ過は候とも、山林を横領せしことなく殊に、馮司方より金圓など借用せし覺えは、夢御座無く候。此の儀も村民をおよび寄せ給はりて、御尋問をと皆まで云はさず。だまれ傳吉、汝言葉をかざり、正直らしう申立つるとも逃れぬ證、此の火打袋覺はあらむ、さりとも高田村傳吉とは他に同名のあるにや、如何ぞと空うそぶけど、虎の威をかる狐の馮司は膝摺り出で、、恐れながら申上げます。傳吉は私が甥、實に私は叔父に候へど何事も穏便に致し居り候ひしが、傳吉は江戸へ奉公中、旅宿屋の女と忍び逢ひ先妻および母れ早を非道にも追ひ出し候ひしを、あまりに哀れに存じ候て私方へ引き取り世話を致し、やがて女房になはし候ひしに候。此の儀明察をとあくまで紫の朱を奪はんとするに、役人共は黒白を分たむともせず、兎に角に、衣のけがれ、火打袋の落ちありし證、拷問にくるしまぬ間に早く白状致せ、やは、なは强情張るか、火打袋は汝のにあらぬと、汝のにあらぬものが何とて傳吉と記しある。高田村に汝ならぬ傳吉は、われは、まだ曾て耳にはせぬぞ。汝が手ならずと。おろかや、盗人たけゞゝしとは汝が事、彼を申せど之と申し飽まで上を僞はらむとする憎つくき心、おのれ此の上は拷問にかけて、白状させ呉れん、者ども石を此處にもて來よとの聲の下に青鬼か赤鬼か、角なき鬼の大石を二人三人して抱へ來り、傳吉が膝へ打ちのせ、かくても白状せぬか、白状せよとて鋭どきしもとをさへあつれど、忽ち皮破れ、肉出で、、骨も碎けんばかり。

お専は思ひがけぬ災に、とかうのすべなく、暫くは泣き沈みしが、夫が安危分れの場、女々しき折りからならじと身を起し、尋ね來りし村人等によべの事、今朝の事を物語り、如何なる事の違ひなるか、事のもとを正し、何とぞ夫を救はせ給へと頼めど、村人もとんな間違ひ、傳吉殿が人など殺ろさるべき、人にもよりけりな、あまりに目なきお上の御捕へ、されどやがて疑ひも晴れて歸り來られむと一日二日誰も皆夢も結な

でありけるが、傳吉は中々に歸り來らざるに、やがて、村人、よりつどひ、頭立ちたる者五六人傳吉に罪なきよしを云ひ開かむとて即日役場へと上りたれど、役人共は露受けつけず、傳吉ははや白狀せりとの言、村人は又々驚くぞかりなり。



文林

國旗　東久世通禧

大君のあれまし丶日とのきごとに
たて丶も仰ぐひのみはたかな

深夜時雨　鍋島直大

更ぬれど眠られぬまでさわがしく
この葉ましりにふる時雨かな

山家落葉　久我建通

いはのたき丶に猶あまるらん

海邊歲暮　水野忠敬

小よろぎの磯邊近くもやどりして
のどかにくらす年のくれかな

夜落葉　諏訪忠元

人とはぬこの山まどを夜もすがら
れとなふものは木の葉なりけり

歲暮祝　宮地嚴夫

天のしたゆたけかりつる今年とて
くれてもくれぬこ丶ち社すれ

歲暮梅　手塚光榮

新玉のとしをむかふるにはの面に
こ丶ろありげに梅かをるなり

都初雪　坂正臣

うちひさすみやこ大路はとく消ねて
家かけにのこる今朝のはつ雪

ちぬべく見ゆる高嶺のれは岩に
　根ざしゆるがぬ松もありけり　　小出粲

閑庭霜
さむみにはゐの水はこほれども
　とけんともせぬ松のしもかな　　鎌田正夫

夜話
はかるうつはは胸にかけながら
　更くるもしらでかたる夜半哉　　遠山英一

社頭曉
まかきのあけてのちまで燈火の
　影こそのこれもりの木の間に　　内藤存守

翠松
磐なる松のみどりはわか木より
　れいての後ぞいろまさりける　　岩崎勝從

神樂
すめる雲井のにはのかみあそひ
　かみもうれしときこしめす覧　　三輪義方

山家紅葉
山端のこのめにまじるはつもみぢ
　みやこにしらぬにほひなり鳧　　三浦千春

月前船
夜もすがら月にうかれて漕ぐ船は
　明るところそとまりなりけれ　　佐々豊水

千代能姫
父をしたふ心ひとすぢふたへ三重
　とざし〻ひとや堅からぞこそ

あそびをも學をも共にせし從八位中尾
五百樹がみまかりける頃手むけつる歌　　仝

花紅葉ともにかざし〻そのかみを
　しのぶなみだぞ袖にしぐる〻

れきあまる霜の花野のれくつきに
　木の葉はかなくちりしきに鳧　　足立正枝

洋裝美人

かぐはしきやまと島根のさくら花
などとつくにの色にさきけん　近衛貞子

池水鳥
はちすばはみな冬がれし池の面に
所せきまでかものれりゐる　鍋島榮子

旅歳暮
事しげきみやこはなれて長閑にも
ひなのたひ寐にれくる年かな　柳原愛子

寄玉歳暮
言のはの玉もひろはでいたづらに
くれゆく年のをしくもあるかな　稅所敦子

山眺望
東やまみねにのぼれどうち日さす
みやこの西の野邊も見えけり　小池道子

爐邊歳暮
埋火のれもひれこしゝこともみな

江邊雪
松にふくかせさえさえて舟つなく
いり江はゆきに人かけもなし　松平健子

寒樹風
山からすねぐらしめたる梢たに
あらはになりぬこがらしの風　保科節子

海邊擣衣
藻汐やく海士か苫屋に夜をこめて
しほなれごろもうつ音のする　諏訪晴子

野逕霜
風さむみゆきかふ人のかけたえて
ゆふしもしろし野べのほそ道　佐藤艶子

海眺望
みえがくれ浪まに浮ふいさり火の
数そそひゆく伊豆の海づら　坂田泰子

冬雲
原田蒼生子

何時かゆきけのくもの閉たる

河村重子

驚歳暮

あづさ弓はるたちしよりゆく年の
早きにこそはれどろかれけれ

安東菊子

冬山

あらしふく山の紅葉はちりぬれど
ふゆかれらしぬ松ぞのこれる

仝

冬窓

すきまもる風さへ寒きまどの戸も
月のさす夜はあけてこそ見れ

内田遊歌子

冬庭

冬枯てさびしとなにをなげくらん
めぐみそめたる梅もありけり

足立三尾子

池鴨

妹かぬふきぬ笠れろし吹くなへに
かもぞ鳴くなるひろさはの池

鈴木翁を志のふ詞

諏訪忠元

飛鳥川の淵瀬定なき世の中とはいひながら、あはれはかなきは人の世なり。翠園のあるじ鈴木翁は日頃いとすこやかにして、此年八十あまり五の齢を重ね給へど、水無月の照はたゝくにもさはらず、深雪ふる冬の寒さをもいとはずも、をちこちの歌のまとゐに臨み給ひき。且大方は車にはゐのりたまはず、かちにて行たまふなど、若き人の及ぶべくもあらずありけるを、いにし十四日は翁の例會なりけれど、行きて聞ぞ、きのふ他のまとゐのかへるさ車よりまろびれちて、肩のあたりをうち給ひぬとて、打つどふ人々にれどろかぬはなし。若き人だに、かゝるいたはりは、全くいゑんにはな月日を重ねつべきを、高き齢を重ねたまへど如何あらん、一日も早く癒ゑまさんことをと待渡りしに、他の病さへくははりて、このごろの木枯に、もろくもれつる木の葉と共にきゑ給ひけるは、悔しきことのかぎり成けり。れのれ此翁にまみゑそめし時、はや齢八十に近

き頃なり。かく其月日は淺けれど、此五年あまりが間、月々の家のまとゐには臨みて、ねもごろに歌のよしあしさとし給ひ、其外所々のまとゐの席にても、何くれと其敎へを受たけりき。また人々の乞ひまつる事は心よくうけひき。つゆ高ぶり給ふ狀なく、物がたりし給ひけり。されど、一度あひまつりし人は、其德に服してなつかしき、忘れこしぬべし。まして、門人の人々は如何計り深き惠の露にうるほひけん、おもひ出づるも涙の種なりけり。さておもふに、翁はたゞ歌人のみにあらず、其若き時より、天下の爲に心を盡し、後には佐渡奉行にすゝみ今の大御世となりては、相川縣の令にさへ成給ひぬ。其くはしきことは翁の傳記にもしるされぬべければもらしつ。又思ふに、今の世、歌に巧なる大人少なきにあらず。されど、其心まめやかに、此道につくさるゝこと厚く、ねんごろなりしは此翁になん。おのれ此年月うけし惠の程をおもひてそゞろに其世の[illegible]

て申す。

埋火

下田美天類

世に埋火ばかりゆかしくなつかしき物はあらじ。さるは、かき起す心の友など、たのもしきかたの好にはあらねど、世に光なき身は、文みる窓とても、あるゝかにしもしつらひがたきを、狐なく寒き夜すがらをこたりなく、我が身をなぐさむるものは、この埋火なればなり。されど、こたつといふものは、覆ひたる蒲團の、所せく立はだかりて憎さに、倚りそふ人の立居ものうげにするなど、埋火の咎にはあらざめれど、心つきなし。すこし膝さしいだしたるに、ねぶれる猫のそのさきにふれたるなどは、ことにむくつけしかし。霜のあした、雪の夕、常に我が身に伴ふ火桶は、桐の丸胴に、あかゞねのおとししたるものなれど、よく筆とる手さきをあたゝめ、ある時は筑紫綿のうすきをれぎな

ことさへあり。かゝれは年ごとに身近くならせど功はてらず。恩に慣れす、こよひもまためく／＼しく文のかたへにさもらひたり。かしらのやゝしろくなれは、われに仕へて老いたるにかど、少しかきれてこさとするに、この芽にてきこしめせと、そゝのかしがに、湯わかしの音たてたるもうれしくたのもしくなし。

し

この、埋火といふものよ、黄金の火桶、玉のすびつ、さくら炭わたゝかげにさしたてゝ、化装灰の上に枝炭めやすきほどにさしはやして、そらだきくゆら窓の内に、白金のかなへをあたゝむるもありとか。る耳遠きことは、わが身にふさはしからねど、こゝはいはず。今の世に用ゐらるゝ、ストーブとかいふるものも、家のしつらひ、わが身に及びなきものなぞしらず。青銅に金銀の象嵌して、錦のしとねにかしかれたる花がたすかしぼりの鋻籚は、常に二頭だて馬車にのりて時めくときけど、炭團一つを中にうづめて、わび人の股ぐらに穢さるゝだき火鉢もありとか。されど、その品々も、きざみきざみはいと多かめれど、たかきに、居てもまどゆき光を放たむともあせらず。低きにれきても、れだやかにあたゝむる徳をうしなはぬものは、この埋火なるべし。世にうつもれたらむ身には、ひとしはゆかしくなつかしきものにれもひなさるゝもわりなきれもひどちにこそ。

花のうきよ

鶴渚

あだなる花にあくがれて、こゝの枝や手をらん、かしこのは幹よりやとらん。とて、道も家もわすれつゝあらそひて、つひにこれを得るものあれど、かたへには、落花狼籍とのゝしりさわぐもあり。これもれなじく花に心のあくがるゝ徒にやあらん。しづかにれもへど、いづれも／＼誠に此山をれもひ、此花を愛る心にはあらざるべし。此人々は、神代より動きなきこの山、稀なる老木の此櫻などゝたふとみ見るは、いと／＼昔人の

心にこそあらめ。よし山わくづるゝとも、櫻はかるゝとも、れのが心を樂ましむるぞよき。取り得るものをとるこそ今の世の道なれ。との心なるべきか。げに爭ふ人々はいふもさらなり。のゝしりさわぐ人々とても、誠の心はありとしもれもはしらず。すこし花のかげをはなれて、谷川のほとり、あるは岡のべなどによりつどへるも、谷水に流れ來る花の香をしたひ。または山風にさそひ來るかをりのしもいはれずとて、遊びつゝ、この水此の風なくぞ、此まとゐも何のせむなしとやれもふらん。なほよきをりもあらぞ、かの枝手をらん。とのこゝろもあるべし。これも、此山此花を誠にれもふ人にはあらじかし。此み山には、たふとき神の御社のましますものを、神慮のほどやいかならん。とれしはかりまつるさへいとかしこきを、あゝ心なの人々や。はかなき世の有樣なるかな。といへぞ汝がごときは今の世にいふ人にはあらで、猿の類とやいふらん。されぞ、水の

色も香もよそになしつゝ秋のよの
　月に嘯く身こそ易けれ

此頃、野外の秋蝶といふ題にて歌よめと人のいひけれぞ、

朝顏の花さくのべになれきつる
　なれもこてふのあはれひと時

とうたひぬ。前にしるしたるは、この夜の夢にてやありけむ。

天長節

女子高等師範學校　服部よしを子

けふはしも、いともかしこき、すめらみことの、あれませる日なれぞ、九重のうちより、天さかるひなにいたるまで、旭旗をひるがへして、いはひ奉らざるはなく、祝砲の音、萬歲のこゑ、四方にみちて、いとにぎはし。國といふ國はあれども、我國のごとき國はなく、君と

は、ましまさじ、御國のはじめは、大君のみはじめにして、大君の御はじめは、御國のはじめなり。かく祖宗の御時より、今にいたるまで、よは百廿七代、としと二千五百五十八年、皇統連綿、ゆるぎなくましまし、歴代のみことゝ、聖賢の君にましまして、蒼生を愛撫したまへる、仁恩徳澤の深厚なること、慈母の赤子に於けるがごとし、されど民もまた、赤子の慈母に於るがごとく、君とし仰ぎまつるが外、父母ともしたひまつるなり、これ他に類なき所以なり。

上のみかどは、殊にかしこくましまして大御位にのぼらせたまふや、直に文事に武備に舊來の陋習を改めたまひ、夙に教育の道をすゝめさせたまひて、彼の御誓の中にも、博く智識を世界に求むとの御言あり、かくて貴賤男女の別ちなく、家に不學の徒あらせじの大御こころもて、あまたゝびこれに係れる、かしこきみことのりを下したまひき。されどこそ此道漸く盛になりもてゆき、數ならぬ我等も今此校につどひ此まとゐにつらなりて、陛下の萬歳を祝し奉り、併せて天壤と共に、きはまりなき皇運の隆盛を、いのり奉つることを得たれ。けふはこの祝日を、此日と定めたまひしより、廿六かへりの祝日なり。いはへやいはへ、もろともに、うたへやうたへ、君が代を。あゝ我等教育の衝にあたらんと期するものいかなることをか、つとむべき、すゝ大御言のむねを、奉戴し、千倔前起、以て此道をこゝめ、國恩の萬一に報いんことを、こゝろがくべきなり。いさゝか、壽言に併せてれもへるふしを、そこはかとなくかきつけぬ。





雜報

●大御惠　さきに、十月中、讃岐國、多度津港沖にて、大坂商船株式會社の汽船宮川丸、沈沒して、乘員五十名、底の水屑となりにしを、きこしめし給ひて、いとあはれと思し給ひ、兩陛下より、遺族に金二百圓を賜ひ、又、この時、同じく乘り合ひ居て、白浪の行方もしられずなりし海軍兵員十一名には、各、祭粢料を賜ひて、あはれませ給へり。

●北白川宮征討紀念碑　宮殿下の貴き御身にてれはしましながら、大命のまに〳〵、臺灣征討にとて、遠き浪路をわたり、戰の場に出でたゝせ給ひて、遂にかくれさせ給ひしは、誰かは、畏み、忝なみて、忍び奉らざらん。このたび、宮殿下の紀念碑を、臺灣三貂堡澳

て、土臺は石もてたゝみ、この上に、三尺あまりの砲彈形青銅製の碑をすゑたり。表には、

北白川宮征討紀念碑

と記し、裏には、左の銘を刻せりとなむ。さらでも、御績は、千代に朽ちせじを、かくては、八千代の後も限なからんかし。

明治二十七八年戰役之後臺澎全土歸我版圖突而土匪起頑抗我北白川
宮以近衛師團長遂奏能討賊之功其偉勳赫々耀千萬世三貂嶺我軍初上
陸設師團司令部之地今乃建石此地以傳後世
明治二十九年四月
臺灣總督海軍大將伯爵樺山資紀謹誌
臺北砲兵工廠陸軍砲兵少佐從六位勳六等　南部茂時
陸軍砲兵大尉正七位勳六等　時澤右一
陸軍技手勳八等　松本六雄
鑄工　酒井藤兵衛
摸工　千田恒雄
謹製

●富士名判官碑　富士名義綱は、勤王の志深かりし人なり。嘗て、後醍醐天皇、隱岐の島に、遷らせ給ひし時、從ひ奉りて、警固たりき。かくてれはしますほどに、義綱いかにもして、義兵をあげて、賊兵と

せ、海をわたりて、本土に入り、ひそかに、諸國勤王の軍のありさまをさぐりて、天皇に奏し奉り、潜幸をすゝめ奉りて、ひそかに、隱岐の島をいでたゝせ奉り、遂に、伯耆の國、名和の港に、潛幸せさせ奉りき。この後、なほ、忠勤れろそかならざりけり。かくて、判官が古跡は、今、島根縣、八束郡、湯町村、字布志名にありながら、荊棘に埋れて、見るかげなきさまなるをなげき、そこの有志の人々、相はかりて碑をたて、この跡を千代の後までも、はふらかさせじとすといふ。いとよき企なり。其の碑の銘には、

富士名義綱は後醍醐天皇の忠臣なり官は檢非違使判官にて出雲國の名家佐々木氏の一族なり後醍醐天皇隱岐國より還幸ましまさんさする時誠忠を勵みそれよりして京師にのぼり勤王の事數件みな載せて歷史に詳かなりさて氏が出雲國にありしさきの古跡今も現在すすなはち八束郡湯町村布志名城山さいふ城跡及び奥馬場又馬場さいふ所ありまた判官山さいふ丘陵あり其山腹の平地に石碑あり氏が戰死に及びし時其遺髮等を收めて葬れりさいふまたその山下の田地を判官下さいふそれかくの如し義綱氏の功實に後世尊崇すべきのいたりなりいま村人これを貴重し猶島根縣人及び其他有志の囑こゝに碑石をたてんさ予に其擧を告ぐ予よろこんで其事を記叙す詠じて曰く

ふしな山その山風は千代かけて
みなおもふべし皆あがむべし

正三位勳二等　子爵　福羽　美靜

●織田信長の社殿　織田信長、尊皇の志深く、嘗、正親町天皇の密勅をうけたまはりて、天下一統の基をたてたりき。今、この功業を、顯彰せんとて、京都府下の有志の人々、相謀りて、建勳會といふをおこし、會長には、前田侯爵を、副會長には、渡邊國武氏を推し、なほ、鍋島侯爵、細川侯爵をはじめとして、贊成者、いと多しと聞く。其の企圖の旨項なりといへるは、

（一）社殿幷に附屬建物を舟岡山上の崇高の地に移轉する事（二）外郭を築き唐門を建つる事（三）神苑を設置する事（四）眺望佳絕の地に應接所を設くる事（五）墳墓を修理する事（六）保存金及祭典費を積立つる事

●高野長英紀念碑　高野長英は、さきに贈位をたまわりしが、明卅二年は、五十年祭に當れるをもて、紀念碑をたて、功績を後の世に傳へんものをと、巖手縣水澤の人々、相謀れりといふ。さて、又、曾孫長運といへる人は、正しき傳記を編み、なほ、遺書の世に傳はらぬを發刊し、遺墨をも、石版にすりて、義捐者に頒たんとて、今しきりに、之をものすといふ。

●孝貞　福井縣、越前の國、足羽郡、上文珠村、字

生部に住める木村茂平が妻こと女といへるは、干茲、三十七歳なり。心すなほにして、いとよく、舅姑を奉養し、又、よく夫に事ふ。父を岩佐茂兵衛といひて、同村の北山といふ地の人なり。こと女は、この二女なり、明治十年十月、こゝに嫁ぎ、後、二男二女を生めり。夫茂平、家ゆたかならず、木挽を職として、すぎわひとし、常に外にあれど、こと女は、幼児をはぐみながら、舅姑につかへ、暇だにあれど、苧をうみ、薪をこり、又は、何くれと、いさゝかながら、物を商ひなどして、家計をたすくるを例とせり。舅茂助は、年老いて、もとより、不治の難症にかゝり居り、姑も、亦、去し十七年のころより、僂麻窒斯をうれひて、病、漸、おもり行き、翌十八年の五月となりては、たちゐもまゝならぬ身となれり。こと女、日夜をわかたず、かたはら去らずして起臥には、必、いだきかゝへ、進退には、せおひなどしつゝ、看護おろそかならざりけるが、去し廿四年、八

舅茂助は、老いさらぼひて、食を求むること、日に、幾度といふことを知らず、かくて、何くれと、品を擇み、心にかなはねど、いかりのゝしり、少のことにても、聲をあらゝげて、責むれども、こと女、氣をなごめ、面を和らげて、其の心を迎へ、又、をりをり、糞尿をさへ、あやまちて、衣衾をけがせども、之を清めて、厭ふ色なく、奉事すること怠らざりしが、本年、六月二日、年、八十七歳を重ねて、空しくなれり。こと女、姑に事ふること、七年。舅に事ふること、十三年。病を看護し、かたへには、業をはげみて、家計をたすけ長男茂三郎、次男義作、長女さつ、次女いゑの四人の子どもを養育しつゝ、よく夫につかへて、始終一日の如くなりけり。されど、事、知事にきこえて、このごろ物を賜はりて、褒賞せられたり。其の文。

足羽郡上文珠村生部木村茂平妻　こと

資性温厚にして孝貞明治十七年中姑病に罹り漸次重症となり舅亦老

ら子女を撫育す不幸にして去廿四年中姑歿し本年男亦歿す十有余年の久しき志操の堅き一日の如し洵に奇特とす依て爲其賞金五圓下賜候事

明治三十一年十一月十日

●又、同じ縣、坂井郡、高椋村、油爲頭に住める石尾秀太郎が母たま女といへるは、明治二年一月五日の生にて、干茲、卅歳なり。もと、吉田郡、五領ヶ島村、兼定島に住める奥野儀平が女なり。明治廿一年四月、秀太郎が父源右衛門に嫁げり。さて、長男秀太郎をはじめて、次男穰、長女なつゑの三子を生めり。姑ひで女は、たま女が嫁がざりし七年以前より眼病をわづらひ、後、明治廿八年、つひに、盲目となりぬ。夫源右衛門はふと、病にかゝり、明治廿六年より足なへて、はたゝず、ともに、去し卅年に致りて、六月中、夫、死、つゞきて、十一月中、姑も、亦、みうせにけり。家もとより、貧しくて、洗へるが如くなるに、たま女、幼兒をはぐゝみながら、姑と夫との病を看護し、なほ、女の手一つに、農事をはげみて、一家六人のすぎはひを、わが身一にうけ負ひ、骨身をくだきつゝ、みさをゝかへざること、こゝに十年一日の如し。近郷傳へて、ほめたゞへさるはなく、この事、亦、知事に聞えしかば、ともに、物を賜はりて、褒賞せられたり。

坂井郡高椋村油爲頭石尾秀太郎母　たま

資性篤實明治二十一年故石尾源右衛門の妻となりし以來克く姑夫に事へ姑眼病を發し終に盲目となり夫亦疾病に罹り漸く重症となり身体自由ならす去三十年六月中終に歿し仝年十一月姑亦た歿す玆に十年の久しき克く兩人を看護し毫も倦怠せす撫養至らざるなく洵に奇特とす依て爲其賞金三圓五拾錢下賜候事

明治三十一年十一月十日

●孝女　島根縣、石見國、羽村に住める橋本はる女といへるは、母に事へて、おろそかならず、又、叔父年老へて、生業をつとめかねたるを、みづから衣食を節して、之を養ふことを至れりければ、皆、ほめたゝへざるはなく、こも、知事に聞えて、褒賞を賜はれり。

資性温良幼より母に事へて孝明治二十四年母病に罹り起居自由を失ふや看護懇到日夜怠らず叔父亦老衰生業を營むこと能はざるを以て自ら衣食を節し其嗜好に任す生計餘裕ならずして能く老情を慰藉する事玆に八年郷閭其德行を稱し穀を醵出して生計の資に充つるに至る洵に奇特とす依つて爲其賞金三圓五十錢下賜候事」

●孝子　世には、妻子の愛にひかれて、思ふがまゝ

に、美味にあかしめながら、親には、つゞれをまとはしめて、かへりみぬ者もあるが中に、かゝるは、いと稀なるべし。北海道、根室の國、岩内村の人、小田音吉といへるは、妻と子三人とをもてるが、なほ家には、齡八十二歳を重ねたる祖父あり。家貧しくて、妻子には、衣食、常に、足らねども、祖父には、日毎に、うまきをすゝめて、おこたらず、もし、兒童、見て、かたへより請へど、なみだながら、これ毒なりといひて、去らしむとぞ。聞くだに、涙ぐまるゝことなり。

●篤志　身のほどく〳〵に、めぐみは施すべきなり。さいつころ、篤志なる野尻とみ女は、福井縣の人なり。さいつころ、篤志なるをもて、褒賞せられたり。

大野郡下庄村横枕野尻源右衛門養母

夙に慈善の志篤く金員を投じて貧民を賑恤し殊に公共爲金員を寄附する數回實に衆庶の模範たり依て爲其賞木杯壹個下賜候事

明治三十一年十一月十日

●善行　善きを、ほめあらはし、惡しきを、きため

きためをうけざらん。善きもの、などか、あらはれざらん。誰もみな、大御心を心として、獨をいましめ、善行をはげむべきなり。こゝに、富山縣、越中の國、西礪波郡、埴生村、村長、太田信岑といへる人は、はやくより、公のことに、いさをありしかど、このごろ、章を賜はりて表彰せられたり。

資性謹厚夙に村政に從ひ聲望あり町村制施行以來再三選まれて村長と爲り能く地方制度の旨を體認して自治の發達を圖り最も力を救荒賑窮に竭し又五箇山の特産たる煙硝の製造を擴して貧民の生業を授け教員を養成して學事を奬め其他道路を開鑿し惡疫を豫防し養蠶を勸誘する等能く其職に稱ひ諸務齊整衆民安輯す洵に公同の事務に勤勉し勞効顯著なりとす依て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

●奇特　巖手縣、氣仙郡、小友村に住みの人なり。巖手縣、氣仙郡、小友村に住みて、桶職をすぎはひとせる、村上熊吉といへるは、わが村の小學校の前の路、いとあしくて、兒童の通學になやむを、外に見かねて、みづから、骨をしまず、こを修繕せりといふ。

●學位令の改正　博士會規則、この二は、さいつこ

士、文、理の五博士の外、更に、藥、農、林、獸醫の四博士を設け、この數種の博士等をして、博士會といふを組織せしめ、學位の授與褫奪のことを審査せしむべしとなり。なほ、委しくは、十二月十日の官報を見よ。

●字音假字遣法　從來のは、いと複雜にて、學習に難きのみにあらず、實際に用ゐて、この法に拘はるべき必要と効益とを、普通敎育にて、之を敎ふるは、徒に、生徒をして、心力を勞せしむるのみなりといふ意見にて、文部省にては、別に、一定の法を採用せんとし、其の趣意書と用例とを、全國の師範學校にれくりし、回答せしめ、さて、調査の後、國語調査會に提出して、決定すべしと聞く、如何になりゆくことにかあらん。

●全國の戶口　昨三十年末現在は、

戶數　八百五萬八千四百七十四戶
人口　四千三百二十二萬八千八百六十三人
內　男　二千百八十二萬三千六百五十一人
　　女　二千百四十萬五千二百十二人

これを、前年末に比すれば、左の增加なり。

戶數　五萬三千六百二十五戶
人口　五十二萬五百九十九人
內　男　二十六萬二千六百二十八人
　　女　二十五萬七千九百七十一人

百歲以上の男女は、この內、

百	男三十人	女六十五人	百一	男八人	女五十一人
百二	男八人	女二十三人	百三	男六	女二十五人
百四	男五人	女十二人	百五	男三人	女七人
百六	男二人	女四人	百七	男なし	女二人
百八	男一人	女一人	百九	男なし	女一人
百十	男なし	女一人			

●割烹學校成績品陳列　來ん卅二年、一月五日、授業始の日、生徒の成績品を、校內に陳列して、廣く、誰彼をいはず、有志の人々の縱覽に供し、さて、其の可否の批評をこふべしとぞ。(東京日本橋區本町一丁目十二番地にあり)

○授業始明治卅二年一月五日

略目

●第一部　參考品●第二部　藝門人諸氏　有志者出品の擬數(野菜遺物也)●第三部　男生徒女生徒出品擬數物●第四部　藝門人出品包物給物●第五部　生徒出品包物結物

●剝製　さきに、南地より來りし、猖々と、大蛇と

をぞ、東京、上野公園の內なる動物園にかひおきて、廣く縦覽せしめしが、さきごろ寒氣にたへかねて、病にかゝり、終に死したれど、二つながら剝製として、その博物館に陳列すべしといふ。

●賴玄翁みうせぬ　從七位雅樂師東儀賴玄翁は、管絃に妙を得て、其の名きこゑたる人なり。さいつころより病の床にふしたりしが、つひに、去し三日、空しき人となりぬとぞ。惜しき哉。

●重嶺翁逸事　おきなは、もと、幕臣小幡多門が子なり。後、鈴木半次郎の義子となりて、其の家をつげり。この鈴木の家の遠つ親は、駿河の守重家とて、名きこゑたりしが、子孫久しく埋れて、世に名あらはれず、おきなの代になりて、家門、再、さかゑたり。かつて、幕府五代の主につかへて、忠勤おろそかならず、さきに、佐渡奉行たりし時、治績いちじるく、人々みな、敬ひ慕ふこと、父母に事ふるが如くなりき。かくて、

こりて、人心おだやかならざりけるを、誰とて、
めんものもなかりけれど、おきな主命をうけたまは
て、かしこに下り、懇にときさとしけるは、「この地は
むかし信義にあつかりし武田信玄がしりし國なれど
今もなほ、この風をうけつぎて、義も正しかるべきに
かくさわぎて、公をわづらはすは、きこゑぬわざなり
とて、さまざまになだめしかど、人皆、翁の德風にか
まけて、事なくしづまりけり。おきな身すこやかに
て、官を辭して後、世を終ふるまで、二十年がほど、日毎に、諸家の歌會のむしろに連りて、一度だも、欠
ぎしことなかりきとぞ。歌をは、村上素行につきて學
ばれき。素行は、眞淵翁のをしへ子にて、田安家に仕
へりし人なり。後また、伊庭秀堅をも師とせられき。門人數百人にあまり、名きこゑたる人すくなからず、子はなかりけれど、重明ぬしをさなきほどより養ひ
て嗣とせられたり。翁また、竹をゑがくこと巧なりけり

幕府の小吏たりしころ畫才ありて、師なくてよくゑかくを見て、翁いへるやう「かゝる才をそなへながら、小吏にて身を終へんは惜むべし。今より、力を畫につくさば、必、大名をあげん」といへるを、和亭これに從ひしかば、果して、名きこえたり。又、幕府、竹内下野守を外國に遣はしける時、名士學士多く隨ひて赴きしかども、中に皇國の學にたけたる人なかりければ、翁、いたく、之をうれたみて、皇國大意一冊を著して、おくりけるに、使臣等、大にたよりを得きとぞ。性、又、人をあはれむ心深かりけり。さきに明治の三年のころ、或る人、千葉縣下にある山野をひらきばりせんとす。こは如何にと、翁にはかれるに、それよけんといひしに、この人、株金をつのりて、政府に請へるに、ゆるされざりければ、せんすべなくて、終に、腹かき、りて、うせにけり。翁これをいたがり、又、株主どものこの事の爲にまづしくなするを見るに忍びず、悉、わが家產をうりつくし、數千圓の金にかへて、之をつくなへり。この時より、家とみにゆたかならず。されども、なほ、財を惜まずして、貧しき人を救ひしこ……其の數幾百人といふことを知らず。さきに翁みうせ……りときゝて、皆、悲みいたむことなべてならず。松……ふし拜かみて、今よりは、誰にたよりてか露の命……保たんとて、涙にむせぶもの數多ありきといふ。翁……佛法を好まず、遺言して、僧侶の道引は、用なきこ……なり、又、讀經に時を費して、會葬の人々をして、徒……に貴き時をな失はせそといへりきとぞ。其の人とな……思ひしるべし。

著書は、翠園叢書(五十冊)翠園雜錄(五十冊)雜言……(四冊)翠園紀行、皇國大意、雜俎、翠園詠草日記(……三歲より八十五歲に至る)、月並詠草等あり。

新刊批評

○兒童研究　第二號　東京教育研究處發行

近時、教育學の愈々進歩するに從ひ、兒童研究に注意するもの……多くなりゆきて、遂に世に率先して此の「兒童研究」なる雜誌さへ……行せらるゝに到りたるは、吾人の最も喜ぶ處なり。本誌は其の項な……

論說、研究、研究法、適用、紹介、雜錄、教育界彙報の各部に別てり。研究欄の高島平三郎氏の我國に於ける兒童研究の發達、松本孝次郎氏の兒童發達誌の研究、塚原政治氏の兒童の美感、皆讀むべし。雜錄欄の文体平易にして、母親のため、なかくによし。適用は少しく難く且教授上の事のみに止りたるは、唯教育といふ科學を主眼とせればにや、いとあかぬ心地せり。

そもく兒童なるものに最も深き關係を有するものは婦人なり。さればその研究は獨り教育學者のみに止まらず、世間一般の婦人皆之に注意するに至らば一入の好結果あるべきは勿論なり。故に吾人は、此の兒童研究雜誌の如きは、世の婦人たちの宜しく愛讀せらるべきものとして之を紹介すると同時に、亦、其文体の極めて平易ならんことを希望するものなり。又其の研究の材料、結果等は、婦人よりも寄せらるゝことゝなりたらんには、一層の趣味あり有益なる事柄も增加すべしと思はる。兎に角に、兒童研究といふことは、女子にとりて最も趣味多きことなるべし。

さてこゝに、一つの記者に望ましきことこそあれ。そは、すべて人間を研究するに、下等動物を採りて標準とし、其の下等動物の狀態を觀察して、人も斯樣くなりと推論するは、今の科學者の一般の例なり。こは實驗を重んずるといふ學風より出でたるなるべしと雖、人は禽獸よりも　に高等なるものなりとは誰も認むる處なるべし。獸に高等なるも　とすれば、強ち人の下等動物に似たる處をのみ詮索せずとも、少　は其の以上にも詮鑿すべきものあるべきなり、こは吾人の常に今の教育學、心理學等に就きて考ふる處なり「兒童研究」も亦此の風に隨ひて、本號にも、「兒童と野蠻人との類似點、兒童と猿族」などの項あり、科學者の目には、之も趣味あることなるべしと雖、猶も少しく世風を擬寫する人より此の題號を見たらんには、誰

子我が妹は、何々の點は禽獸に似たり何々の點は野蠻人に類似せ[illegible]などとのみ考ふるが如きことあらば、其結果果して如何ならむ[illegible]物は見樣にこそよるなれ。兒童が野蠻人に似たりといふと同じく[illegible]賢君子に似たる點も亦甚少しとせず、大人者不失其赤子之心者也[illegible]もいへり。其の赤子ながらの大人の心を正しくおふしたつることこそ、親[illegible]たるもの、又師たるものゝ務ならめ、己が子は禽獸に似たる點幾つ[illegible]我生徒は野蠻人に似たる點幾つと考ふる師父あらば、實に危き限な[illegible]らずや。

此の雜誌は、單に科學のみに忠にして世道を顧みず。斯道專門家のみ[illegible]の研究に資するものとすれば、世の婦人たちの必ず之に眼を觸るゝ[illegible]なからんことを望む。

兒童研究學者諸氏、若し科學は單に或る一科學を專攻する者に[illegible]倫理學と兒童研究とを混ずべからず。さればゞ吾人また何をか言は[illegible]ん。吾人は夙に着實重厚なる兒童研究雜誌記者諸氏が當今の世道を[illegible]憂慮せらるゝことと甚だ深切なるを信ず。然るに「兒童と野蠻人との類似點」「兒童と猿族」の如き題號を揭げらるゝもの、切にこの雜誌の爲に惜む所なり。よしこの事を以て必要なる研究事項とするも其標題[illegible]は今少し穩當なる他の文字を以て言ひ表はさるゝ能はざるか。如斯[illegible]題號は世の腦髓薄弱なる人に讀ましむるは最も危險多きものなり。

此の評を草し終る時、たまく一封の郵書の机上に到るものあり、[illegible]披きて之を見るに、地方なる或兒童研究熱心家よりの寄書なり。日く、頃日「兒童研究」の題目に倣ひて他に兒童の野蠻人に似たる點を猶多く發見せり。我が兒は四肢を有す、野蠻人も亦之を有す、類似の一なり。我が兒は二目兩耳を有す、野蠻人も亦之を有す類似の二なり。我が兒は疲勞の時睡眠を催す、野蠻人も亦之を催す、類似の四[illegible]なり。[illegible]

●新年附録として、まづ、巻首には、權掌侍從五位税所敦子刀自にこひて、本誌兼題新年松の和歌を、みづから色紙にかゝれたるを得て、こをさしはさみ、巻尾には、かの安嘉門院四條阿佛尼がものせられたる夜の鶴一巻を加へ、下田義天類ぬしが校訂評論をも添へ、なほこの首には、故栗原信充が、寫せる阿佛尼の肖像を附すべし。この肖像は、信充が知人をはじめて、つねに、欣慕せる古き人々のかたを、自、うつしれきて、其の功績を忍むれし肖像集といへる者十巻わりしが中より、これるなり。女鑑、號を重ぬること、百七十二、來ん卅二年一月五日、年毎に、學の道の愈榮ゆかんことを祝ぎ、聊こを添へて、更に、讀者諸孃を益せんとするなり。

●今年も、はやく暮れて、去なんとす。殘れる日數いくぞくもなけれぞ、都大路をはじめて、鄙のながらに至るまで、人の心もいそがはしげに見ねて、足も空にゆきかふめり。筆をのみとる身だに、年の暮といへぞ、事多きならひなれぞ、さおらんも實にとぞ思はるゝ、いはけなきは、小指をりかぞへて、一日もとく、新しき年の立ちかへり來んを待ちわびて、一日の長きをかこち。さらぬきは、事の多きに、一時も、時の長からんことを思ひて、日の短きをなげき、且はわが齡の老い行かんをうれたむ。年は、一時、二時、一日、二日と序をれひて、進み行くはやされそさは、常もひとしきを、こは思ふ人の心々なりけり。親は、子の頭かきなでつゝ、わが齡のふけゆかんことを忘れて、片時もとく、ねびまさりて、世にたゝんことの速かならんをねがひ、子は、又、身に、經驗の積らんを忘れて、親の齡のかたぶかんことをうれふ。これ二つながら親子の至情にして、このごろは一しほ切なるめり。年はやがてもくれなん。やゝや、よはひ一をかさねたらんも、身の一きはたけのびまさりたらんも、たゞこれのみにては、何にかはせん。心のたけを一しほ、高から

しめ、さて、ひたすらに、身を修め、わざをねりてこそ、大御代の御榮をはかり、大御心を安め奉るべかりけれ。いでや、筆をあらひ、硯を清めて、立ちかへらん旦を待ち、若水に墨すりながして、更に又、ありとあらん善事を書きあつめてんとこそ。（五十闌記）

惜しめどもかひなく暮るゝ一年は
またも我が身に積るなりけり

●明治卅二年度女鑑月並歌文兼題

一月五日　歌　新年松　文　梅をめづる詞　十二月廿日〆切

一月廿日　歌　都雪　文　鶯を待つ　一月十日〆切

二月五日　歌　尋梅　文　婦人慈善會に入會を勸むる文　一月廿五日〆切

二月廿日　歌　霞隔行船　文　同返事　二月十日〆切

〆切期日に遲れし

一月五日兼題に限り歌文とも特に
左の賞品を參らすべし

●天
土佐日記燈　一部

●地
女鑑　半ヶ年分

●人
女子の本分。女子處世論。女子教育要言。雅文消息集。修身百首。の内望みもの一部

●秀逸



教の庭

十二月廿日兼題　風船

天　横濱市日出町太田町二千二百三番地　笹子雪子

月の世のたよりもやがてきかるべし
あめの戸わたるふねのゆき來に

地　大阪市南區西清水町八十九番屋敷　日吉わさ子

しらくもをなみ路となしてゆく船の
とまりやつきのみやこなるらん

人　肥後國八代郡八代町長丁　田代艶子

天にのぼる龍かと見ゑてくすしくも
みそらゆきかふ船にもあるかな

秀逸（十五首）

くものなみわけつゝのぼる舟人は　三河　永井さい子
月のみやこをさしてゆくらん

大空のかぜのまに〳〵ゆくふねは　肥後　佐々小琴子
星のはやしやとまりなるらん

雲わけてあまつみそらをゆく船は　東京　住山幾子
月のみやこにこぎやよすらん

すゝみゆくひとの心をはにあけて　大坂　高橋かね子
くものなみまにうかふふね哉

みそらふく風にまかせてゆく船は　甲府　坂田きみ子
雲のいづこかとまりなるらん

いにしへの人にみせむやあまの原　甲府　名取よし子
とわたる船のくしきしわざを

浪路のみ漕ぎ行くものと思ひしに　肥後　徳永萬壽子
空にもはしるふねはありけり

久方のつきのかつらもをられなん　出雲　山根久子
そらゆく船もいでし世なれば

あやしくも雲の浪間をかけりつゝ　東京　坂井つるき子
そみらにのぼるふねもありけり

行くとりを羨みにしはいにしへの　出雲　根岸豐子
この風船のなき世なりけり

かみよにはありときゝつる久方の　北海道　鳥山百合子
あまの鳥船けふみつるかな

とぶ鳥をうらやみし世も進みきて　横濱　笹子茂子
あめのとわたる船もありけり

空のうみ雲のなみ路をあやしくも　横濱　笹子雪子
さをかぢなくてわたるふね哉

ひらけゆく世はくすしくも久方の　山口　百濟いち子

そらにゆきかふ船もありけり

星のやど月のみやこもゆきて見ん
みそらにのぼる船もある世に　伊豫 續木かめ子

（以下原稿到着順）

空たかくくものなみ路をはしりゆく
ふれやけふりのちからなるらん　濱口貞子

雨もふりにはかにかぜもふきいでて
あまつみそらのふれのあやうさ　石井豐子

しなつ彦かみのこゝろにまかせゆく
あまつみそらのふれぞくすしき　佐々有鄰子

竹さりのをさめのすみかもさめまし
くもゐにのぼるふれにのりつゝ　横山柳子

はろ〳〵さくも井をさしてゆく船は
かせをちからのしをりなるらん　中山露子

わし鷹もつはさをさめておさろかん
みそらはるかにのぼるふれみて　川村高子

すゝみゆく人の智しきのあらはれて
みそらにのぼるふれもありけり　竹村竹堂子

大そらにたゝよふふれのかげ見れは
けにもあかなきなかめなりけり　萩原章子

雲井なるそらをもいまはめぐりつゝ
すゝむはひさのこゝろなりけり　志茂多ひろ子

進み行く御代のめぐみにつはさなき
身もおほそらにうちのぼりつゝ　安村歌子

大そらをかせにまかせてゆくふれは
くものなみ路に見ゐかくれしつ　仁保しま子

見るかうちに雲にいりけりかざふれの　降田愼子

大そらのくものかよひ路のり上けて
よろへをまかすかせのまに〳〵　木村きく子

吹く風にまかせはてつゝかせふれは
行くへも知らすそらかよふなり　栗生きく子

あまつそらたゝよふくもの浪わけて
ゆくへさためすわたるふれかな　名取正代子

そらの海ゆくふれこそはあやしけれ
ひらけし御代のしるしなるらん　白川惡子

水をのみ行くものなりさおもひしを
そらにたゞよふふれもありけり　高橋照子

いにしへの人はゆめにも見さりけん
みそらゆきかふふれのありさは　田代綾子

かりわたるくもゐのそらを風船の
のぼりゆくよさひらけぬるかな　德永廣子

いかにしてつくり出でけん大そらを
こゝろのままにはしるふれかな　小森田輝子

ひさかたのくもゐをさばす風船は
こゝろもそらにのりてこそゆけ　澤田春子

ひさかたのくもの浪間をゆくふれは
あめのいづくかみなさなるらん　眞島千鶴子

あはれ世は人のたくみをかちにして
くもにたゝよふふれもありけり　竹村貞子

つはさなく雲井はろかに入るふれは
いつこのそらをかけめくるらむ　山下はま子

はてもなきこの大そらのくもをわけ
いつくをさしてふれのゆくらん　金森さし子

水の上にうかぶもあれどもゆる火の　淺谷いく子

みそらにうかぶみふねなりけり　羽根田米子

ことわりの開け行く世はうみならて
くも井をかけるふねもありけり　石川類子

乗る人のこゝろもたかく見ゆるかな
くも路たどりてあそふかざふね　石川樂子

天つかぜまほにうけつゝすゝみゆく
ふねにあそへる御代そたのしき　石川南江子

いつくまてゆくらんあまつ風ふねの
すゝむは御代のためしなるらむ　石川久子

いかばかりたのしかるらん風ふねは
うき世のなかをとほくはなれて　畠山千代子

ひさかたの天のはごろもきぬ身にも
そらとふみちのある世なりけり　新井數子

いにしへの人は知らしなゆめならて
そらにものほるふねのありとは　數島花子

とふとりのつはさもからて天つそら
くものあなたをわたるふねかな　磯野君子

空の海をほの〴〵ふねのわたるなり
ひとのたくみをさをかぢにして　山田[illegible]子

ひらけ行く人のこゝろを帆にあけて
みそらのうみをわたるふねかな　西[illegible]子

とりならて得やは飛はるゝ空の中を
かせのまに〳〵ゆくみふねかな　佐藤喜代子

かさふねにのれは千さとも足したに
見ゆるはみよのめくみなりけり　川上喜代子

世の中のすゝむにつけておほそらを
わけてゆきかふふねもありけり　加藤[illegible]惠子

あに見ぬかぜをはらみて遙かなる
くも井にのほるたくみふねかな

海はらをこぐもののみとおもひしに
いまはそらゆくふねもありけり　加藤眞子

ひらけゆくひとのたくみを梶にして
くものなみまをはしるかざふね　加藤英子

そらの海かすみのみををかりならて
わたる御ふねもある世なりけり　森やす子

うなゐ子のいだしやりつるかぜ小舟
くものみなとによりやはつらん　綿野りき子

大そらをこゝろのまゝにかけるなり
これやかみよのあまのとりふね　岡部やよ子

いにしへの天のはごろもなにかせん
くもゐにかよふふねもある世は　中村[illegible]枝子

開け行く御代のしろしはおほそらの
かぢなきふねにかぜもさはらず　四條こま子

つはさなく雲のうへまでゆくふねは
ひらけゆく世のたからなりけり　林[illegible]子

うかびては夢かさぞ思ふうみやまも
たゞめのしたにみわたされつゝ　中條露子

さをもなくつはさもなくてふく風に
あまの門わたるふねのあやしさ　鈴木やい子

ひさかたの月のひかりのさむき夜に
そらにたゞよふふねもありけり　鈴木うた子

吹く風にひとのたくみの帆をあけて
そらかけりゆくあまのとりふね　鈴木せに子

み空とぶとりのつはさもうらやまじ
くもまをわたるふねもある世は　吉岡歌子

すゝみゆく君がみ代にはうみならで
くも井にうかぶふねもありけり　吉岡すみ子

ひさかたの御そらの海をこぐふねの　谷口婦佐子

開けゆくひさのたくみもあらはれて
　はつろやくものいつこなろらん
佐々敏子

あふきみし月のみやこへこさつてん
　くものなみぢをわたろふれかな
絹川ますゑ子

久かたのくも井をさしてゆくふれは
　くもゐはろかにのほろかさふれ
高屋はぎの子

進みゆく御代のさちさてかきりなく
　あまのかはらやさまりなろらむ
遠藤艮久子

すゝみゆく世にさもなひて風ふれの
　くものうへにもかよふふれかな
木下千代子

みろがうちに風のまにくかちさりて
　こゝろもそらにひさやのろらむ
羽田三緒子

吹く風にまかせてそらを行くふれは
　くもゐはろかにのほろふれかな
諸井くら子

飛ぶさりにまかひて見しは雲のなみ
　あまのかはにやかよふなろらん
吾妻ちか子

めつらしな空吹くかせをたのみにて
　わけて空行くふれにそ有りける
戸塚てつ子

ひらけ行く世のありさまは風にのり
　くものなみ路をはしろふれさは
池谷さみ子

あまのはら風のまにく行くふれは
　くも路をはしろふれにこそ見れ
舘脇ます子

大ぞらにきのふも今日もたゞよひて
　いつこのそらかさふりなろらん
小早川朝子

すゝみゆく學びのみちぞおそろしき
　なみのまにくうかぶふれかな
松屋もさ子

大ぞらにいさかろげにもやすげにも
　みそらをわたろふれもいやさて
野田ゝ[illegible]子

開けゆく世はおもしろなかさふれの
　そらさぶさりのわさもありけり
椎野ぬき子

うらやまじ空ゆくさりをかせふれの
　つはさある代さなりしさちには
稲原董子

やままつの枝にかゝりしかさふれは
　いつこのたれのすさびなろらん
臭尾はな子

見ろがうちにくもゐはろけく昇りけり
　うべうきふれさなつけそめけむ
塙いさむ子

翼さへはれさへなくておのづから
　空ゆくふれのくすしくもあろか
山崎つき子

かきりなき人のささりのあらはれて
　くもゐにのぼろふれもありけり
山崎しつ子

ひらけゆく御代のためしにつはさなき
　ひさもそらゆくみちはありけり
森こさ子

久かたのみそらのうみをのりめぐろ
　これやかみよのあまのさりふれ
白石梅子

久かたのつきのみやこにゆきてみむ
　そらをもわたろふれのある代は
野中あさ子

天のはらさわたろふれをたよりにて
　つきのみやこもゆきて見てこむ
高市さし子

雲井までふれかよふ世さなりにけり
　ひさのたくみぞあやしかりける
玉井隆子

風のまにくもゐはろけく行くふれは
　つきの世を訪ふひさやのろらむ
齋藤よし子

ふく風にくものなみよろそらの海を
　さをなくわたろふれやこのふれ
河村君子

すゝみゆく人のたくみにあまかけり
　くもゐにのほろふれそあやしき
近藤好子

十二月廿日兼題　捨子

天

甲府市山田町　名取正代子

世の中に、「思ひあれども、子をこふる、思ひにまさる、思ひなきかな」と、何がしのうたひけんも、げにさるものにて、誰かは、我子を思はざるものあらん、しかはあれども、はからざる災にかゝりて、やう／＼世にふるたづきなく、朝夕の烟も、今やたえなんとするに、子などもちたらんきはゝ、共に飢ゑしむるに忍びずとし、やむことなく、之を捨つる事あり、ふと見たらん程は、其子の親は、そもいかなる鬼かとあやしまるれど、其人の心になりて、よく／＼考ふれば、いかばかりかなしかりけん、よしや、我は飢ゑてたふれなんにも、せめて、いとしかはゆの此子を良き家の軒端にすし、情ある人のすくひを得て、世にながらへさせんとれもへばなるべし。されば、かく捨つるまでの其心は、いかにありけん。捨てゝの後も、幾度かいだきあめゝん、かへりゆく道すがらも、幾度かかへりみたりけん。いかに名残やつきざりけん。今夜いづこのよそに子ゆゑの闇路にまよふらんなど思へば、いよ／＼あはれなるに、さりともしらで、捨てられし子は、かへでなす手を乳房にかへて、口にふくみつゝ、見る人、たれかれのわかちなく、母とたのみて、打ゑめる様、かなしさいとほしさも一しほにて、朝夕、乳母よ、もりよ、とかしづかるゝ、我子の上を思ふにも、立ちまさりて、あはれまるゝは、おのづから人の情なりや。

地

越後國南蒲原郡三條町二之町　中條露子

木枯ふきすさびて、ふすま重ねし閨の内さへ、なほ寒く、埋火のみ戀しうて、ねざめ勝なるま夜中に、軒近くちごのなく聲す、かゝる時、かゝる處に、いとあやし、こはからねこの妻戀ひてなくならん、あるは高く、或はひくゝ、あなかしがましと、かこちつゝ、まどろまんとすれど、また聲を張りあげぬ、今霄は、我をねさせじとにやとて、起き出でゝ、門の戸をたゝきて、逐へど、やむべうもあらねば、戸を開き、燈火うちかゝげて、見れば、こはいかに、唐猫ならで、生ひ出でゝより、まだ幾日も立たぬ、みどり子なりけり。うすきつゞれの衣一枚につゝまれて、泣き居る様、いと哀なり。あゝ先きに、聲のひくうなりしは、泣きつかれしにやあらん。高うなりし時は、乳ほしうなりしならん。あはれ／＼生ひ先きたのもしき、ちごを、心つよくも、かゝる霜夜に、人の軒にすてつる母の面影、見まほしうなん。なべての母ならんには、已が身のひゆるもしらで、ちごにのみふすまかづかしむるを、されど、その母も、同じく人なれど、さぞや捨つるは是か、捨てざるは是かと、子を思ふやみに、まどひしならめど、宿るに家なく、着るに衣なく、食ふ

に食なく、泣く〱も、心を鬼にして、捨てしならんと思へど、また哀なり。

人

越中東水橋　吉岡歌子

世に不幸なる者は澤なれど、捨子ばかり不幸の者はあらじ、襤褸の袖は、身を蔽ふに足らず、茅が軒端、雨風を凌ぐに由なきも、誰かは其子を饑ゑ、寒ゑしむるものあらん。無心にして神の如き稚子が、安らけく、暖けく、其父母の懷に眠るを得るは、唯愛てふ物の力なり。あはれ、世の人毎に受けうべき父母の慈愛、この暖かき愛にしも育まれず、捨てらるゝ稚兒の身よ、世にかばかり不幸の者やはある、あはれ、子を思ふ、心の闇は、今も昔も、替りなき世なるを、高き、賤しき、おしなべての人情なるを、已が私情にひかされてか、衣食に窮してか、子を捨つる鬼の親の、開け行く御代にも、跡たゑずと聞くぞ、悲しき極みなる。

（以下原稿到着順）

中山登美子

よへは寒さ一しほにて、時ならぬ六ツの花も降りつもりたれば、四方山の景色も、なか〱によからむと、朝まだきに、遣戸おし開き見れば、思ひきや、いとも愛らしき緑子の、小き箱に入れあるに、こは何故ならん、定めし貧苦にせまりて捨子となしゝものならんと、母君などと表にあぐれば、あな愛らしやいたはしや、捨てられし身もなげかで、幼心ににこ〱と笑ふ面もいとあはれなり、此緑子やがてみ國のますら男となり、末たのもしき撫子を、如何なるうきふしありて捨てけん、貧しき中

はかりかと、おし計られてなん、燒野雉子夜鶴てふ言の葉、げにもしこさ
わりにて、さこそあるらめ、世にはあはれなる事も多きものかな、あゝ。

降田槇子

慈母の暖なるふところを知らず、嚴父の篤き敎を受けず、眞の兄弟を知
らで、他人を親とも賴み、或は養育院に孤兒院に、人となる、捨子の身
こそ實に哀れの限りなれ、いかなれば、親たるもの、黄金にも玉にもま
さる子寶を、かくは軒に捨つるならん、其心は鬼か蛇か、あらず、多く
は貧しきが爲、己が力もて育むことのかなはぬによるなめり、さはいへ、
いと淺ましき心なり、たゞ哀むべきは、捨てられたる稚子の、更け行く
月かげに、呱々として泣くは、母の乳房をしたふにや、安らかに籠の中
にねむれるは、親にそひねの夢を見しにや、誰かは此樣を見て涙を催さ
ざる、こをひろひ上げて育つる、人の情けの大なることよ、捨てし親も、
いかばかり嬉しう心安う思ふらん、昔和氣廣蟲は、飢饉にあひて、子を棄
ひ得で捨つるものの澤なるを、深くもなげき、ひろひ上げて育みしもの
八十人に余れりとかや、げに有難く尊き心にこそ。

佐々有鄰子

此ごろの霜夜に、埋火はさらなり、あつふすまかされても堪へかぬる
に、行きかひたゑし里のちまたのちり塚のかげに、虫のねよりもかれが
れにきこゆる聲は、黄金にも玉にもかへがたきといふなる、むつきのま
まのみどり兒の捨てられたるになんありける、

親ごころいかにかあるらんかぜにつれて
きこゆるこゑはらわたをたつ

とうめきいでつるをりから、巡査の灯のきらめき來るをまちうけて、其
筋に上申しければ、それぞれの手當を賜りしが、あないたはしのみどり
兒や。

松泉かつ子

嗚呼愛らしのみどり子や、かたちは玉の如く、赤き心をもあらはの頰に
あたる夜さむの風に、目さめて、

や、子をおもふなる親の心を推しなば、さそな忍ひかれしこさならむ、はれ、いかに貧しき中にても、うみの親のめくみのつゆにうるほひて、ひたつなでしここそ、幸なれ。

西　艶子

も今も變らぬ、老少不定の世の習ひ、天命の致す處は是非無けれど、しく、親は、現世に在りながら、親なき者さ、爲り果つる者こそ、あはにも痛ましき事の、極なれ。親在りながら、親無き者さは何そ、彼のち離き、愛のきづなを絶たれて、早くも世の荒浪に、漂ひ出でたる、捨にぞある。燒野の雉子、夜の鶴、いつれか子を愛せざらん。されば、人も、

しろかねもこかねも玉も何かせむ
子にしくたから世にあらめやも

こそ、うたひ給ひつれ。さるを、我から、子を捨つる人、思へば恐し鬼心哉。かゝる者の心には、愛も情も、籠らざらん。愛なく、情なきのは、木なり、將た石なり。さはあれ、誰かは、始よりさる淺ましきを持つへきや。其の大方は、貧てふ鬼に、せまられてなり。されは、てられたる子の、幸に人の情に、おふし立てられし後、生みの親には、なかるべきか。あらずく。いかで恩なき事の、あるべき。捨子よ、がたらちねの、汝を捨てつるは、なかなかに、汝を、愛するこさの深ればなり。心靜に思ひれかし。汝が親の、汝を捨てつる時の、心の中「捨てんか、いかで、さる情なき事の、爲らるべき。捨てざらんか、一つをたに、養ひ兼れたる、この貧しさを、加何にせん。愛のきづな、絶たずば、親も子も、玉の緒は絶ねぬべし。さりては、我れは死ももこの哀し子を、如何にせん」さ、子故に迷ふ親心、末の禍福、思ひくらして、泣く泣く捨てたるならん。されば、其が恩の露、朝夕、おし立てられし養ひ親さ、なさ、淺き深きの、あるべきや。大方の、世、捨子達よ、ゆめおろそかにな、思ひ給ひそ。

佐藤喜代子

た山おろし吹すさむ、霙まじりのあめいさゞふり出で、此頃になきあしきそらもやうさて、夕つ方は、早くより天の戸さしてこよひは文よむ事もさはあれど、あまりにひねくしければ、こよひはうちつさひてこたつなさあたらんさて、夕げもすみにしかば、母君諸共に、こたつの中に、よもやまの話し語らふほどに、あめはますく降りしきり。そが中に、あないぶかしや、赤子の聲、さざれくに聞ゆるに、さなりもあらぬ我家に聞ゆるはいかなるわけかいぶかしさ、あま戸おしあけふきしきる風に、さもし火をやうやくかさしつゝ、うち見やれば、こはいかに、やれほころびたる、見るからにあはれをもよほす衣に、うまれてほにもあらざるべしさおぼしき玉の如きをの子を、うちつゝみてしき物もなく、うちすてありぬ、あはれいたくしき限りなれば、如何なる人のち子がわかれども、此さむ夜半にうちすておかは、いきたねなくは日のあたりなればさて、母君さ共に、いだきあげて、家の内に入るれば赤子はさむさにねたへでなきもやしたりけん、姿がひざにすやくされむりぬるいさしさよ、あはれち子の母君は如何なる人にあるならん、世の中に、子たからさしも云へるを、如何にたつきにそまればさてうちすておかんさは、あはれいさしき此乳子の母の心はおにか蛇か。

綿野りき子

手のひらの玉さめでられ、多くの人にかしづかれて、あかしくらすが多かる世に、月さゆる霜夜に捨てらるゝ子や、如何なる悪日にか生れつらん。されど、親さして子をにくしさ思ふものあるべきか。無邪氣に笑ふ顔を見ては、明日は如何なる人の手に渡りてさ、いくばくかなしう思ひやしけん、實にもいみしく哀れのものなりや。

岡部やよ子

やけのゝきゝす夜のつる、さりだに子を思ふものを、人さして、などか親の子を思はざるべき、おやこはらから、一つさもし火の下につどひゐてだに、なほひまもるかぜも寒う、門守る犬の遠ほえもさびしうおぼゆるこの冬の夜に、あたゝかきたらちねの慈愛のふさころをはなれてたつきもいさゝ白妙の、しもおく道のかたはらに、捨てられしちごの身よ、いかにかなしからん、はた寒けかるらん、思ひやるだに、そゞろ

秋しほらるゝよ。こがれにも玉にもかへがたきいとしの子を捨つる、父母のこゝろや、いかにおにおにしくならではあらで、おにおにしくならではあらぬ、浮世のおにゝ責められてなるべし。かりそめのわかれだにかなしきものなるを、捨てらるるともしらで、うまいする子をおきて、別るゝ心やいかなりけん、なみだにくもりて見わかぬ目にも、なほひろふべき人やあると、やみにかくれて、みやりつゝ、しばしは立ち去りかたかりしなるべし、なかなかに、やけのゝきゞすよるのつるにも、なりなむとや思ひけんかし。

杉村さだ子

冬の夜のふけゆくまゝに、誘ふべき枯葉のかずもつきはてゝ、月にふきすさふ木枯しの音物すごし。それさへあるを、窓の下にうゑつる南天の枝に、さきみだれたる白雪の、折々はさはさとおつる音して、あはれさはいやまさりぬ、げにかなしきものは、山家の冬の夜中にぞある。時しも、門の邊に、一聲高く、呱々の聲をはなつものあり、こは何ならんと、耳そはだつるひまもなく、ねものあさるか、うゑに狂ふか、一群の狼の、悲しげにたけりさけび、み空の月に吼ね立つるさま、身にしみわたりていとすさまじ、なくれは愈高くなりぬ、小兒はあはれにも霜枯れのれもてなきぬ、霜さゆる夜寒の風にあてられで、父母の惠みの露の光よりめぐみそめたる頃ぶすまに、あたゝまるみの、かゝるかなしきこわれを耳にしては、なごか靜まりかへりていぬる事をよくしうべき、もだしあへぬは人の心のなさけなりけり、あはれいかなる人の小兒ならん、何處如何なる日の元に生れたる人の子か、など、とつおひつ、燈火てらして、ひとり、外の方にうちいでんとすれば、ささふきしきる風に、燈火の消ねはてぬると共に、いかにしつらん、小兒は、ひたさなかずなりぬ。

一聲亦一聲、あやしくも、狼の聲のみ、物すごく靜かなる世界になりわ

分けたる稚子の、乳をこふるより外の慾もなきが、匂はん末の色香も思はれて、いとしさは日毎にまされど、貧のため、あるは其他のさはりに、蕾のまゝに枯れんより、人の情に生立ちて、親にまされる幸を得よと、子を思ふ闇に迷ひて、なさけありげに富みたる家の軒などに捨たるものから、人の目にかゝる迄に、犬にやはまれん、饑ゑはせずやなど思ひ、程經ては又情なき人に拾はれて、辛き目や見る、今頃は如何になど、案しわづらふ苦しさ、なかなかにありし時にもまさるべし、開けゆく代のめぐみの露は、是等の幸なき子等にもかゝりて、孤子院育兒院など、所々に設けられ、夫々の業を授け教の庭にも導かれて、やまと御國の民艸の、已がむきむき花さき出でんとするさまを、其親の影ながら、見たらましかば、いかにうれしくも又かなしくも思ふらんよ。さはれ、かく人々のあつきなさけに、いと安らけく育てられながらも、親の慈愛のあたゝかさしらぬ子等なればにや、何となくさびしけにしをれがちなるぞあはれなる。

綿木艶子

奥深き窓に隙漏る風の寒さも知らず、重ねし衾暖く、結ひし夢を驚かして、門守る犬の頻りに吠ね立つるに、小兒の鳴聲さへも交りて聞ゆるぞ怪しき。又例の捨子にては、あらずやなど思ひつゝ、門を開きて打見すれば、思ひしに違はず、綠子のしされも布かず、其儘に門邊に臥して、玉の緒も絶ねなむばかり鳴き叫ぶは、捨子なりけり。いかなれば、此門にのみかく幾度となく子を捨るにか、要なき子は生ますもがな、何者の所爲ぞ、未だ遠くは得行かじ、あと追ひ掛んなど、口々に下部共の常とての、しりさわぐぞ是非なき、げにや霜夜の鶴の子を思ふ親心に、尊きも卑きも隔てあるべくはあられども、昔より子を捨つる例し、多きが中にも、なべて皆貧しきより、黄金にも玉にも代へがたきいとし子を育つるの道絶ねて、斷ちかたき恩愛のきづなを斷ち、他し人の情を頼みて、

ゝ嘆むれば、啼き止みて、與へし乳味糖にも早や飽きてや、世の憂きしも知らず顔に、打笑みつゝ眠れる様、誠に邪無氣には見ゆるものか、よしやかくて生ひ立ちぬとも、捨子とそしられ、拾ひ子と蔑しまれ、終に世のあなどりは免かれず、いかに幸なき身にかあるらん、我門捨てられし不幸の兒女、すべて十四人の内十二人は母上の拾ひ上げして、今二人は姉上の手に拾ひ取り給ひぬれど、今こそあれ、以前はかる邸にては、牛乳等の便りもなく、乳母とても得難きを、自ら抱きいくしみて、さま／＼と憐み育てつる心つくしも、また一方ならぬ事にそ、さるにても、あはれ子を捨つる親の心は更にも言はず、また拾ひつる人の心つくしもさるものながら、捨てらるゝ子の不幸此上やあるきと、思ふにも、なほ嬉しきは衣食に足らぬ方もなく、朝夕たらちね膝下にありて、海山も及ばぬ慈愛を受くる身の、限りなき幸をよろこの外はあらじかし。

塩いさむ子

はれ事繁き浮世に、うきことはいとさはにあめれど、捨子ばかりいみう哀れにいとほしきはなからまし、たゞに人心濁れるうき世に生れ來、何のあやめもわかで、犯せる罪さへあらぬに、他人の門邊に捨てらゝ身のさちなさ、いとはかなしといふもおろかにこそ、燒野の雉　夜鶴、誰かは我子を思はざる、闇にはあられど、親の心は子を思ふ道にふとかや、さるに、かくいとほしき我子を棄つる親は、そもいかなる心ならん、かく恐ろしきしわざの爲めに、寄る邊なきさの捨小舟となて、いつくにたよらむかたもなく、たゞあはれと見て救はれなむ人をいな頼みにかゝらるゝ身こそ、げに／＼不憫なる限りなれ。

乾　路代子

木もねぶる眞夜中に、妻訪ふ男鹿の其ならで、たらちねの、世をたづぬみどり子の泣くこゑ聞ゆるぞ、いぶかしき、若しや聞きちがひにはあぬかと、いきをこらし、耳をかたぶくるに、まさしくて、まがひなし、ぶかりつゝ、やをらたちあがり、柴の戸あくれば、こはそも如何に、むこんやな、未だ一歳にたらぬ赤子の、くれなゐなる毛布に包まれて、捨てられしとは、露しらぬ、妾の顔を、見るや、否、誠の母と思ひてか、こぼるゝばかりの笑をたゝへ、楓の小手をふりかざすさま、いとほしさも、淺ましさも、云はんかたなし、かゝる、罪なき子を捨つる親の心ぞはかりがたき、あなあはれのみどりごかなと、手をさしのべて、抱かんとすれば、ひらりとちりし一葉の紙、若しやとひらき、讀みくだせば、

日頃よりそなた様の御あはれみにとませ給へるを汲みしれば、御門前へいとし子を捨て申し候、御みそだて下されたく候ぬきさしならぬことと出來候ても世にながらふることのできぬ身と相成り申候、さりながら、何事もしらぬいとし子まで、あのよのものとなすことのかなしく候ひて、心ならずも捨て申候、涙に胸もふさがりて、持つ筆さへもまゝならず、何卒妾の心の中御すゐし遊ばし下されたくとり急ぎ御願ひまで。

山崎しつ子

しろかれもこがねの玉も何せんにといへるも、さることにて、世の中に、親の子を思ふおもひにまされるはあらじかし、さるを、物のあはれもしらぬ親にや・人の門へ、あるは道のへに、子をすつるは、いかなる親心ぞも、燒野の雉子、夜の田鶴だに、子を思ふなるを、人のなすべきわざとも思はれず、こは皆家まづしくして、子をはぐゝむしろだになく、おのが身もうゑこゝゆべきくるしさに、心を鬼として、捨つるにそあらめ、あなあはれや、その親の心はいかなりけん、いくたびかへりみしつゝ、なく／＼子のおひさきを祈りつゝ捨て行しなるべし・今は世に慈善會てふ事の設けありて、かゝるあはれなる者共をあつめはぐくみて、後にはなりはひの道をさへ數へみちびきて、助け救ふ人達の恵をうくるも、皆廣き厚き御代のおほんめぐみになん、かゝれば常におのが身をつゝまやかにして、世にたつきなき者どもをすくはんことこそねがはしけれ。

河村君子

燒野のきゞす夜の鶴、いづれか子を愛せざらん、さるに、子を捨つる親の心いかに、鬼とも謂ひつべきか、蛇ともたとへつべきか、否、子を思

ふ思ひにまさる親心さ、子を愛せざるは親の心にあらざるなり、彼は雌鹿が子を捨てんさして、月光皎々たる秋の夕、浮雲の有耶無耶の心裡にさまよひけん、彼は亦雄鹿が子を捨てんさして、暮雲朦朧たる冬の夜、吹雪烈しき畦道をゆきつもどりつせし、捨つるは非か、捨てざるは是か、捨つれば此の兒死し、捨てざれば彼の身飢う、さはれ、捨てらるゝ乳兒の心には、草の床も慈父の脊さ思ひ、霜の衾も慈母の懐さや思ふらん、無邪氣なるそのかんばせを見ては、思はず念佛を唱へ、あいらしきその姿をながめては、一滴の涙も無量の情をこめて落つらん、げにあはれなるは、菩薩を夢みる乳兒にひきかへて、不動をやどす、親の心なるよ、頑是なく遊びたはむるゝ隣のみどり子を見ては、いかに捨てし我が兒を戀ふか、諸行無常さ響き渡る山寺の鐘の音をきゝては、いかに我兒をすてし夜半を忍ぶか、

故郷の子を思ふヿがれは、花の飛鳥の巻もおもしろからざるべし、まいてこをすてし人の親やいかに。

近藤好子

世に捨子程、あはれ深き、物はあらじ、めぐみ深き、み親の許に、ありてだに、うき時もかなしき時もあるを、うまれてより、いまだ、暑さ寒さの、わかちさへ、ね知らぬころ、いたり深き、父母の、みひざをはなれて、みもしらぬ、よそ人の手に、ひろはるゝそ、うたてきや、をさなき、時こそ、何事も知らざれ、年たくるに從ひ、萬事知りねて後は、又なく、かなしきものぞかし。わが生みの親は、いつれの里に、いますらん、み名さへ、しらざれば、たづねゆくへき、よしも、なしさ、思ふにつけても、いさゝ、むれふたかる、ものにぞある。あはれ捨子、ほど、幸なきものは、なからむ。

延着又は書式に違ひたるにて没書させしもの、

りいさ繁く、人目も草も枯れ行けば、日頃住みなれたる山里も、何さなう寂しさの增す心地して、親しき友垣の、など音づれぬさ、獨りごちつゝ日を暮しけり。一夜梢吹く風は靜まり、筧の水の音の絕ね〳〵に寒さいさ堪へ難きに、朝早く起きて外を眺むれば、終夜雪の降りたりけん、おびたゞしく積りて、目もはろ〳〵に、たゞ白銀の世さ變り、樵夫の通ふ細道も埋れて、往きかふ人もなく、たゞ山寺の鐘の、氷りつゝかすかに聞ね、村雀の餌をや求むらん、ちよ〳〵さ友呼びかはす聲のみなり。門の松の枝は、にはかに老いて白髮さなりたる、惜しけれごなか〳〵に見處あり。かゝる景色を、ひさり見んもなしやむあるをもがなさすがにうれしからで、今昔の書ごもくりひろげ居る[illegible]柴の戸をはた〳〵さ訪ふ人あり、急き見れば、待ち居りし友の[illegible]ろにて、何の言の葉もなく、

しろや君つむ白雪にあさつけてはろ〳〵きぬる深きむを

さうち出でたれば、恨むべき謂も出です、つたなけれご通して、嬉しく喜び、先つ奥の室へさ請じ、茶などうち啜りつゝ、窓推し開き[illegible]を見れば、枯木の枝には、皆時ならぬ花をつけ、賤の伏屋は、玉の[illegible]さ變りて、其景色いはん方なし。いざ〳〵後の思ひ出に、いさゝか[illegible]のせんさする頃しも、塒へ急く鳥の聲のかまびすしく、はや日は暮れかゝりぬ。雪の光にて、室はさまで暗からねさ、燈火さもしてよなど童に言ふ折しも、十六夜の月の山の端より、花やかにさし登りて、白[illegible]う積りたる雪の上に照り渡り、山も川もみなかゞやきて、銀を布き[illegible]らんが如く、月影ににほへる雪の、一きは景色まして、描き筆には[illegible]し難くて、共に頭をうなだるゝに、忽ち耳を驚したるは、時計機な[illegible]けり。友俄に思ひ立ちたる樣して、道遠きに夜も更けぬらし、いざ[illegible]らんさ立ち上れば、名殘惜しけれご、せん方なく、月明など言ひつ

春風會詠草

故鄕擣衣

みよし野の山のしたかぜさむきよに
　たれふるさとにころもうつらん　　居藤千代子

あれはてしみやこの跡のさよきぬた
　むかしながらのおとぞさびしき　　服部なん子

ふる里はあれにしものをころもうつ
　おとはむかしにかはらざりけり　　天野ちかた子

あれはてしわがふる里のあきのよは
　きぬたのおともさびしかりけり　　和久たき子

ふるさとのまがきが原のさよふけて
　とだえがちにもころもうつなり　　森本らく子

あれはてゝ野となる里にたれすみて
　むかしのつきにころもうつらん　　塚本きし子

紅葉

つたもみぢ色にいでずばときはふる
　まつのあきをばたれかしるべき　　天野ちかた子

あきぎりにすそ野の里はくれそめて
　ゆふひかげろふみねのもみぢは　　塚本きし子

月

かりがねの山のはわたるかずみえて
　ひかりさやけきあきのよのつき　　島山千代子

友の新婚を祝ふ

千代八千代ちぎり遂へずあひおひの
　まつにならびてさかえませきみ　　島山百合子

いにし日先帝の靈前へ同僚貴族院多額納稅議員一同より古銅香爐壹基を贈られたるによめる　　山田暉子

うれしきはみ親のみかはひさもみな
　しのぶこゝろはいやまさりつゝ　　住山澂子

三十一年のとしのくれに

春をまつ子等にひかれておいの身も
　かさぬるとしをいとはざりけり　　福原菰子

學者惜年

いかにせん今年もけふとなりにけり
　まなびのみちのなかば經ぬまに　　小川直子

爐邊讀書

うづみ火をかきおこしつゝ文の上に
　見ぬ世のひとゝむつむ夜半かな　　小川歌子

うづみ火をなかだちにして見ぬ友と
　むつぶもうれしふみのまき〲

養子政德が熊本縣菊池郡合志東部高等小學校訓導兼校長に任られてゆく時よみける

鞍がたけくまなくをしへみちびきて
　はこくみたてよにはのわかくさ　　佐々小琴子

長男當二第十二師團の入營をおくる時

つるぎ太刀さやにをさまる大御代に
　おみのまさみちふみなたがへそ　　綿永政蕊子

犬

をさまれる御代に心やゆるみけん
　わがかどまもるいぬもねむれり　　島山合百子

出塾入學

てすさびに我がきならすつま琴の
　しらべにかよふまつむしのこゑ　　仝

窓前燈火

奥ふかきまなびの窓にともしびの
　ひかりもほそく更くる夜半かな　　島山千代子

雪を見てよめる　　仝

はるの花あきのもみぢにまさりけり
　のきはの木々にふれるしらゆき

越後よりある都の友におくる　　山田璋子

七重八重つもるしらゆきはなならは
　香をもつゝみておくらんものを

殘菊　　佐々敏子

ひさめかれちくさも朽ちし庭の面に
　なほうつろはぬしらきくのはな

雪中の景　　佐々敏子

折ふしの遷り變るにつけて、種々の眺めは多けれど、山里は春秋の花紅葉にはひさのさひきて淋しからぬを、冬はひさめも草も枯はてゝ、軒の松風ならではさふものなし、一夜隙もる風の冷かなるをり、早く起き出で戸を開けば、一面に白雪の景色、げに枯木も花咲き、鶯もなきや出づらんさばかりのさまなれば、こよなう、うれしうて、門前に出て、はるかに見やれば、茅屋も白銀の屋さ見ゆ、軒のみさりの松にはかに老いて白髮さなれり、千町田の細道も、うもれはて、ゆきかふ人もなく、只雀の千代〳〵さ祝ふ聲のみなり、かくて朝日のはなやかにさしのぼれば、一きはの景色をそへ、この世の變りたらんやうなるはいさをかし、香爐峰の氣色もかくやあらんさ眺め居たるに、薪を負ひて過ぎ行く翁あり、此景色を眺めつゝ、彼方の山々はくもり來れば吹雪や起らんさつぶやきつゝすぎゆく折しも、北風はげしく吹き出で、美しき花も忽ち見所もなくなり、枯れし木榴もあらはれにけり、あはれ時ならぬ花をつけ、一時の賑りを極むる人の行末こそ、かくあらめさ、思ひ出でゝ、いさゞ寒さもまされば、歸りて後の思ひでにさ、物のかたはしに記しつ。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題 …………… …………… …………… …………… 住所 姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題 ……、……、……。 ……、……、……。 ……、……、……。 ……、……、……。 ……、……、……。 住所 姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、片假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、片假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○書式に違ひたるは總て沒書とす。
○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得

孝明天皇御遺

先帝御製歌挿入　全壹册　●實價廿五錢郵税

恭く按するに先帝　孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして**事蹟**尚澀晦に**聖德**屬し未だ外に露れず是頗る憾むべしと爲す此書は宸翰秘書及先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の**實歷**談に依り以て汎く**事蹟逸聞**を網羅したるものにして庶幾くは聖德の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず今試みに本書の一

御一代の章を掲げ編年体を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し

聰明の章に於て　先皇の英明絶倫なるを概説し

夙成の章は御幼時の御言行を示し

慷慨の上編は醜夷掃攘の事其下編は皇權回復の事に痛く叡慮を惱されたる事蹟を叙し

孤憤の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫す

撫御は識見卓出の實際を明かにし

豁達は言路洞開の聖德を輝かし

忍耐は襟裡荒廢供御菲薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し

仁愛は惻隱仁恕の御心甚だ厚かりしを明にす

前數章に配置する能はざりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の章に網羅し

國民たるもの丶必讀すべき良書なり

東京京橋區築地二丁目廿一番地　(電話本局八八

發行所　國光社

副島蒼海
老伯講話

精神教育 全一冊

第三版

定價上製金六十錢郵稅八錢●並製金五十五錢郵稅六錢

この書は『教育の大本は必や區々たる形式の末を離れて專ら正心誠意に本づき**傳神感化**の妙用を主とすべきこと』につきて老伯講話のまゝを記せるものなり。其の忠孝の大義を發揮して**本邦歷史**の**特相**を說示し。人心の本然を闡明して**存心養氣**の工夫を懇示し。宇宙の神秘を窺ひて**至誠敬天**の**要**を訓誨せられたる。實に當今唯一の倫理教育書なり。發刊以來有識の士競て之を讀む。皆**精神教育**の**明鑑**を得たるを喜ぶ。今や再版を重ねて第三版を發刊するに至れり

國光社出版 **發賣所** 東京京橋區築地二丁目廿一番地 **靜思館** ○取次店 全國各府縣書肆

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○
て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さす
の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者
書郵送料送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑 每月五日廿日發行

定價	一册	十錢
	六册前金(三ヶ月分)	五十五錢
	十二册前金(半年分)	壹圓
	全國遞送	
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十	

明治三十一年十二月十九日印刷
同　年十二月二十日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直

印刷人 東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木艮

發行所 東京京橋區築地二丁目二十一番地 (電話番號新橋八八) 國光